

共産主義運動——国際主義とプロレタリア独裁の旗をかかげ

共産同赤軍派再建

——労働者階級の前衛党建設へ

共産同赤軍派臨時総会報告集

共産主義者同盟赤軍派
中央委員会

- ★マルクス・レーニン主義万才ノ世界プロレタリア共産主義革命の旗の下、中国共産党・朝鮮労働党・ベトナム労働党と結束し、国際共産党を闘い取ろう！
- ★万国の労働者・被抑圧民族は団結して帝国主義を打倒しようノ米帝を支柱とする国際反革命同盟を粉碎し、社会帝国主義と対決しようノ
- ★プロレタリア国際主義を堅持し、自立更生の日本社会主義革命を闘い取ろうノ米帝を日本から叩き出し、日本帝国主義を打倒し、プロレタリアート独裁を樹立しようノ
- ★米帝を日本から叩き出し、日帝の侵略・民族抑圧・反革命・搾取と収奪、差別と分断、反動と暴力を打ち砕く闘いを発展させ、独占ブルジョアジーの権力を打倒する労働者勤労人民の統一戦線に組織しようノ
- ★蜂起・革命戦争を闘い取る正規の攻囲を組織しようノ
- ★現代修正主義と排外主義・経済主義・無政府主義に対決し、全人民の闘争の前線に労働者階級の不拔の戦闘の第二革命党を建設しようノ
- ★労働者階級の解放の力に固く立脚し、同盟のプロレタリア的作風を打ち鍛えようノ

△序△

連合赤軍の敗北と解体から一年有余の後、我々は共産主義者同盟赤軍派再建のための、第一回全国臨時総会を開催した。我々はこの一年有余、混乱、混沌、動揺のたゞ中で、総括作業に全力を集中してきた。我々の再建活動の大半は、総括討論に——何よりも思想的総括のための活動に集中されてきた。それは我々が再生に向けて進み出すためには避けられないものであったし、自からの歴史に責任を負い、革命の事業に責任を負い、新たな出発点を闘い取るための、唯一の最初の一步であった。この過程で、我々は、この任務から遠ざかり、真剣に、誠実に総括作業を遂行することを回避し、自己の中途半端な気分と心情のままに浮動と没政治的反発に終止する分子、どのような確たる見解と立場ももたず、たゞ徒党をくんで徘徊するにすぎない分子と、厳しく自己を峻別してきた。それは又我々が組織的無政府性と闘い、固く結束した厳格な組織を建設していくための最初の闘いであった。我々は無思

想性と組織的無政府性の沼地から自己を防衛するために、無原則的な協議会を拒否し、へわが道へを進んできた。だがこのことは他方で、我々の弱さ——とくに実践的活動の立ち遅れのために、我々の周囲のすぐれた革命的で実践的な戦士、友人諸君との一時的な分離をも余儀なくされた。しかし我々は真の結束を闘い取るためには、まずもってへわが道へを確立し、鍛え上げることから始めねばならないと確信してきた。又必ずや近い将来、真の結束を闘い取りうると確信している。

我々がこの一年有余その大半の力を注いできた思想的理論的活動は、今後の課題からすれば未だ微々たる端緒に過ぎない。むしろ真の思想的理論的活動、努力、訓練はこれから始まるのだと言わねばならない。しかし我々は同盟活動の主要な精力を、実践的な活動に移さねばならないと考えている。我々には今や前線に出撃し、進出し、前線に我々の橋頭堡を打ちたて、基礎

組織を確立すべき任務が登っているのだ。労働者階級人民大衆の闘いの前線のたゞ中に、革命的マルクスレーニン主義の旗を打ちたて、革命的宣伝活動の拠点、組織工作の中核、戦闘の塔となる組織を建設しなければならぬ。第一回全国臨時総会は、総括の基本観点を採択し、(臨時)中央組織を確立することによって、この出撃を準備したのである。そして我々はこの出撃と、それを総攻撃、突撃にまで前進させていくための導きの糸となるべき全国機関紙の発行に早急に着手する用意である。

最後に我々は、同盟の真にプロレタリア的＝革命的再建を通して、プロレタリア階級の前衛党を闘い取る一中核へと自からを鍛え上げる決意であること、そしてその事業のためには、プロレタリア階級の全ての革命的政治グループと協力する用意をもっていること、更に厳格に原則上の一致をもって共に統合を実現していくことを心から望んでいることを表明しておく。

第一章 総括のための我々の立場

六九年夏、共産主義者同盟内闘争から、秋の前段階級起の方針、党の革命を掲げて登場した我々赤軍派は、大薩の敗北とH・Jの貫徹をもって、最初の闘争に党的敗北を烙印した。第二次綱領論争をもって開始された再建活動は、日本共産党革命左派神奈川県委の下に敢行された二つの統奪取闘争を引き金として、七一年M作戦、六・一七爆弾闘争へと突き進んだ。そして両者は相合して、これらの闘いを「革命の魂」としての「人民の軍隊」へと凝集すべく、七一年夏連合赤軍を結成した。連合赤軍はその核心を「プロの統」の一点に凝縮し、それを体現すべき「新党」＝「革命戦争の党」を、「統による滅敵」の政治的基準と、「共産主義化」の思想的組織的基準の下に組織した。この「新党」はその組織化の闘いの端緒において、同志殺害の腐臭と統奪の炎の中に解体した。プロレタリア独裁への道をその統と「共産主義化」において体現せんとした「新党」は、その誕生と共に自己の破綻、敗北を烙

印し、統奪戦によって党派としての生命を燃えつかせて自己と革命運動の名譽を守り、自己を烙印し、その意志をプロレタリア階級と生み出されるべき前衛党に遺言したのである。

このことは我々にプロレタリア独裁の旗印、それを闘い取る実践を真にわがものとし、鍛え上げるべきこと、そのために根本的な総括を要求してきた。その核心はまずもって、労働者階級と人民大衆の階級闘争の一切の現われを統率し、プロレタリア独裁樹立、共産主義革命へ導いていくべきプロレタリアートの前衛党の建設、この建設を闘い取っていく我々の思想的、政治的、組織的立場の第一歩を確立するための闘争に集中した。だから再建活動の一年間の論争は、何よりもまず、連合赤軍の解体と破綻に到った過去数年間の我々の思想と運動の総括は、どのような広さと深さにおいて要求されているのか、それはどのように根本的なものなのか、我々が新たな出発点を確立していく闘い

においてどのような目的意識性が要求されているのかを明確化することであった。

我々はこの過程で以下の点を確認することから始めてきた。

第一に、我々は決して自己の心情から出発してはならないこと。曖昧な心情的評価に拜跪しない、厳格さと首尾一貫した毅然たる態度、思想的厳密さと忠実さ、これこそが最初の前提とならねばならない。

第二に、連合赤軍の同志殺害に帰結し、体现された解體と破壊は、我々赤軍派の過去数年間の思想と実践の凝縮であり、この解體と破壊は自己の内部からもたらされたものとして、かつ思想的・組織的解體と破壊として買われているものとして、根本的全面的にして徹底的なものであること。そのことによって歴史的使命と重さをもち、歴史的地点を画していること。だから、我々の総括と新たな出発は決して部分的継承と部分的克服、修正という曖昧な、浮動的なものであることはできず、根本的全面的にして総合的な総括・克服・変革をめざさねばならないこと。これが我々の最初の

の共通の確認点であった。

第三に、従って赤軍派→連合赤軍の正当な評価と教訓は、決して旧来の我々の思想と実践の枠内での延長、同一の基準の上では真になされるものではなく、この思想と実践の基礎、基準そのものを変革しなければならぬ。この核心点を曖昧にする一切の総括は、それ自身墮落であり、浮動性と混乱を生み出す。

総括論争における目的意識性は、この思想と実践の基礎・基準そのものを変革し、新たに闘いとする（内在的克服として）ことにおかれねばならないのである。

第四に、だから我々は何よりもまず、我々の思想的破壊を切開し、それを克服していく思想的総括にこそ最大の基礎をおき、かつ、それを我々の実践全体、実践の構造そのものの変革にまで買っていくという態度を確立してきた。——我々はこの点において、旧来の我々の思想と実践の弱点に新たな理論を接木して補い、継承性を主張するといった傾向に反対する。

第五に、我々はこのことを頑強に実現し、鍛え上げ、革命的プロレタリア党を現実のものとして日程に上せ

る闘いにおいて、そしてそれを基礎として自己の歴史的

的任務を実行し、実現していく一般的な方法と活動計画を打ち立てる水路において、その中でこそ連合赤軍の諸経験、諸成果、諸教訓を真に、どん欲に学び尽し、わがものとするであらう。我々は、そのために長い格闘が必要であり、未だ端緒にすぎたばかりであるにすぎないことを認める。しかし我々は決して「時間がかかること」を苦にしない。そのことによって悲観に陥ることも、焦燥に駆られることもなく、厳格に頑強に、かつ精力的に自からの任務を遂行していくであらう。何故なら、長期にわたる堅忍不拔の闘いによって教育され、訓練され、組織された共産主義的プロレタリアートの隊列だけが全労働者階級を率い、全被搾取労働大衆を引き寄せ、プロレタリア独裁と共産主義社会を實現していくのだから。

そして、今我々に要求されているのは、それに耐え、その中核となり、それを支え抜く思想的・組織的・実践的堅固さ強靭さを獲得することである。

更に我々は次の事を付言しておきたい。

第一に、我々の現在の努力は、一言でいえば我々の（立場）を変革することと、我々の階級の基礎を変革することという一個二重の任務に集中されている。即ち、真にプロレタリア階級の立場、プロレタリア階級の階級闘争の意識的表現者としての共産主義運動の立場を闘い、自己の共産主義的活動をプロレタリア運動の基礎の上におき、プロレタリア階級の深部に実践の基礎を築くことという。メダルの表裏のよう切り離すことのできない二つの事柄である。小ブル的な思想・政治・組織性・階級の基礎を徹底的にプロレタリア的になすことに変革することである。この（立場）の変革の確立を、何よりもまず思想的総括、マルクス主義の原則的見地の獲得・練磨として、そしてそれを実践的態度にまで買くこととして追求し、同時にそれを労働者階級の運動に献身的に参加し、その階級の自覚、政治的発達と組織化に献身的に助力する中で鍛え上げることである。我々はその中から革命的プロレタリア党としての組織を建設し、鍛え上げねばな

らない。(我々はこのことを一言で、共産主義とプロレタリア運動の結合、と呼んでいる。)

第二に、我々は思想的総括を回避し、曖昧化する傾向に強く反対する。それは連合赤軍の解体、破綻が思想的組織的解体、破綻によつて貫かれていた事、又そこに最大の根拠があること——まさにその意味で根底的なのだ——を曖昧にしその事に目をつぶり、回避することだからである。

それは又、連合赤軍解体後の我々の分解、分散化——これもまた、何よりも思想的政治的分解、分散化として生まれており、この思想的分解、分散化が一切の根拠となっている——を決して真に克服し、統合するものとはなりえないからである。そしてこのことの曖昧化は思想上、組織上の無政府性へと転落させていく危険をもっているからである。

更に、新たな実践活動の献身的、精力的遂行が我々に次々と提起している多大の課題と経験と教訓が、真に系統だったものとして蓄積され、体系化され、組織的に普遍化され、物質化され、真に意識的なものになるには、やはり、たえず思想的総括を要求し、確固た

れば、思想を實踐から切り離し、抽象性と観念性及び硬直化の墮落に導くものであり、思想的、実践的に折衷主義におちこむものであり、我々に問われているへ「革命的实践」の内実、構造、態度、形態を彼岸のものとしてしまうからである。

思想的立場は必ず具体的な現実的諸条件の中で実践的に貫かれ、体现されなければならない以上、我々が思想的総括を課題に上せる時、それは必ず同時に、我々の実践的立場、態度、姿勢、実践活動の構造を課題にしているものであり、そこに貫かれる思想をこそ問題とするのである。(たとえば我々は資本主義批判を問題にする時、それは階級闘争の経済的基礎に対する階級的批判として、必ず我々の実践全体に貫かれ、体现されるべきものとして把えるのだ。)歴史は階級闘争の歴史であり、プロレタリア独裁は、現存する労働者階級の階級闘争の発展、帰結として闘い取られるるのであり、現存する労働者階級の階級闘争を、プロレタリア独裁のための闘争として打ち鍛え、高め上げることが我々の任務なのだ。このことを真剣に誠実に

る首尾一貫した思想的、政治的立場として鍛え上げることを要求するからである。さもないと、新たな実践活動が我々にもたらす様々な課題、経験、教訓は混沌たる状態のままに消耗させられ、だいたいにされ、混沌と分解をくりかえすだけか、或いは逆に、我々の混沌、混乱、分解、内包された誤謬が新たな実践活動(それが真剣で誠実なものであるにもかかわらず)の中にくりかえし持ちこまれ、新たに再生産される結果をもたらすからである。

第三に、我々は思想的総括を実践活動から全く切り離して、そのみとして観念的に追究する傾向に反対する。総括と破綻の克服とを実践的総括、実践的克服へと頑強に貫くという努力を放棄し、対象の形態をもたない、自己の頭の中だけで、観念の上での解決として済ませてしまう傾向に反対する。思想的総括、克服を實踐の問題にまで徹底化し、貫徹し、我々の実践上の破綻の総括、克服、変革を具体的な実践活動として闘いとしていくことから退き、それを回避しおしとどめようとする傾向に強く反対する。何故ならそ

追求しえない一切の傾向に我々は反対する。

最後に我々は、この一年有余の間に明らかになったいくつかの傾向に対する、我々の態度を明らかにしておきたい。

一つはもっふる新宿派として通称されている、「再建準備委員会」多数派——最近、二分裂と共にこの名称を変更したようであるが——のグループについて。このグループは何らの思想的総括もなしに、個々人の小ブル的心情をよりどころとして、没政治的反発と無思想性と組織的無政府性を特徴としている。このグループの徒党的性格は、どのような確固たる思想的実践的基礎ももたず、無原則とデマゴギーや覚悟をことごとくしながら、多少とも堅実な運動に、無責任に混乱を持ち込むことを党派性として示している。我々はこのグループに代表される傾向と自己を別し、このような傾向と闘い、それから自己を防御することを最低限の任務としてきた。我々はこのグループとの間に断固たる一線を画し、このとるにたりないグループとの不毛な煩わしい関係に貴重な精力が、

たとえわずかでもさかれる状態から脱却し、我々の本来の任務に全精力を傾注しようとするものである。事実又そうしている。

二つは「再建準備委員会」少数派——これは最近独立したが——のグループについて。この極少数からなるサークルは、自己の立場と方向について、全くもって明確にしない。更にその非実践的性格は、同好人サークルへ純化させている。このサークルについては、我々にどって各個人について問題になりえない、サークルとしては問題になりえない。

最後に「釜ヶ崎地区委員会」のグループについて。この若い、活動的な、戦闘的な青年によって構成されているグループは、一年有余にわたって釜ヶ崎の労働者の闘いに献身的に参加し、その先頭にたって闘ってきた中で、成長し、新たな発展要素を体現してきた。我々がこのグループを統合して進みえなかったのは、我々の立ち遅れ——とくに実践な——によるものであり、我々の弱さの結果であった。我々はこのグループの主要な主張である「下層労働者に依拠し、その闘い

の中で小ブル性を変革せよ」に完全に同意する。しかし我々は、このことを同時に、思想的政治的総括の深化によって、真に階級的な思想的政治的立場を確立し、鍛え上げ、現下の階級闘争の一切の現われに対する党的立場を確立していくことと結合すべきこと。そしてこの結合によってこそ、真に厳格な組織性をもった革命的組織を建設し、鍛え上げることができると考える。我々はたとえ一時的迂回にみえても、このような方向を、道を、一歩一歩進んできた。だからそのことが我々に「遅々たる歩み」を余儀なくさせ、そのため、このグループを統合して進みえなかったとしても、やはり我々はそうせざるをえなかったし、今後そのようなに進んでいくであろう。それだけが真の党的統合を実現する道だからである。事実、釜ヶ崎の闘いの新たな発展の試練は、たとえ現在の現象的現われがどうであれ、この闘いをより広げ、深め、階級支配の構造の根幹に迫っていくより根本的課題を提起しつつある。そしてこのことは何よりも、この運動のへ意識的要素を試練にかけている。しかし、その指導的、中核的グ

ループの、厳格な思想的政治的立場、網領的戦略的立場、この立場に基づく、一層広汎な頑強な系統的活動を要求している。そのような確固たる組織、組織性を要求している。まさにこのように「釜ヶ崎地区委員会」のグループも試練に直面している。我々はこのグループと、釜ヶ崎の運動において共同行動を強化し、我々自身の立場と活動任務を鍛え上げ、実行することを通して、このグループの思想的政治的前進を援助し、統合を実現していきたいと考える。

第二章 総括の第一歩 この数年間の階級闘争と我々

具体的総括にはいる前に我々は、まずもってここ数年間（六〇年代末〜七〇年代初頭）の階級闘争の簡潔な特徴づけと評価、及び革命的左翼の出生・成長過程の概括的総括と現在地点について簡単に明らかにしておきたい。勿論これが我々自身の総括として凝縮されてこそ主体的なものになるのであるが、しかし他方では又、我々の歴史的基盤と諸条件を明らかにすることによって、我々自身の主体的総括は一層明瞭となることが出来る。とりわけこの数年間の、我々赤軍派連合赤軍の破綻が、今日の革命的階級の深部から生み出されている階級闘争の前進によって白日の下にさらされた革命的左翼の根本的な欠陥、弱、不可分の内的関連・根拠をもつて生み出され、昇底して凝縮されたものである以上、我々の総括は、これらの総括を包摂する全体性と根拠性をもたねばならぬからである。（いうまでもなくそのことは、決して我々自身の独自性、独自の位置・役割・主体性を解消

第一に、世界プロレタリア運動の最前線としての民族解放闘争——このへ最前線自身、世界階級闘争の歴史的結果として闘いとられたものであると同時に、強制された現実として我々は主体的に把え返すのだが——その一層の国際的かつプロレタリア的社會主義的前進と発展が今日の帝国主義の寄生性の基盤に革命的攻撃を加え、揺がし、革命的変革の過程へと転化し、同時にこの寄生性と一体となった国際プロレタリア運動の庄殺の系統的体系たる帝国主義の国際的な反革命体制と政治的軍事的諸力の国際的連鎖の環・最前線において、これを打ち砕き、世界革命の戦略的高地を闘い取ったこと。同時に又、現代修正主義潮流の社会帝国主義としての政治的特質への転化を暴露し抜き、現代修正主義潮流と思想的、実践的に分離し、それを国際的・社会的基盤そのものから打ち砕いていく革命的潮流を現実の力として形成したこと。まさにこのことによって、現代の世界プロレタリア共産主義革命の新たな夜明けを告げ、その世界的循環の中に帝国主義諸国をも引き入れ、国際プロレタリアートの革命的進出

するものではない。）そして連合赤軍の破綻の克服は、同時に革命的左翼のこの欠陥、弱点の克服として追求されねばならないからである。だから我々はこのことを考慮にいれて、最初にこの数年間の階級闘争の簡潔な特徴づけと革命的左翼の出生、成長過程について概括的総括を行っておかなければならない。

この数年間の階級闘争の特徴づけについて、我々は「大衆闘争の武装闘争・テロラ戦への発展」とか、それと軌を一にしての「革命戦争派の登場とその統一戦線の形成」等といった、曖昧な、主観的、一面的評価に反対する。それはこの数年間の赤軍派の闘争が、革命的階級の深部から闘い取られつつある階級闘争の前進を実際に牽引し、意識的に体現してきたかの如き誤った主観的評価を生み出す根拠でもあり、今我々が白日のもとにさらされ、試練とふるいにかけている問題を曖昧にし、回避する根拠でもある。

を押し出したのである。

第二に、日本階級闘争は、この第一のことに規定されつつ端緒的な革命的大衆闘争の昂揚を経験し——たとえそれが、その基盤と階級の性格において部分性と一面性を免かれなかったにせよ——そのことによって戦後資本主義の発展が内部に成熟させた二大階級対立とその非和解性を告知し、今日の帝国主義の腐朽化とあらゆる分野での政治的反動と暴力、政治的軋轢の深さを暴露し、国家権力の構造を端的に把える闘争へと突き進み、同時に又、その地点で敗北したので。そしてこのことによって、まずもってこの激闘過程に引きいれられたへ戦後小ブルジョア民主主義運動とその内的闘争——日和見主義的翼と急進主義的翼との闘争——の発展・成熟と共に分解し尽したのである。（勿論このことは、もはや小ブルジョア民主主義運動がなくなったりとか、以降現われ出ないとかのことを意味するものではない。）

第三に、日本階級闘争の前進的諸要素と主体的推進力はこの端緒的敗北の中から、二大階級対立の激化と

共に、明白に革命的階級の深部・本来のプロレタリアの下層から姿を現わしつつある。そしてそれは戦後小ブルジョア民主主義運動と疎遠であったものとして、又その欺瞞性と抗して前進してきたものとして、今やその根底的批判を突き出しながら増頭している。小ブルの主体、思想、政治、組織性と闘い、あばき出すものとしての前進発展過程は未だ漸進的なゆるやかなものであるが、にもかかわらずそれは過ぎ去った一時期の昂揚よりも遙かに根底的であり、全面的であり、大衆的である。それは社会生活の全ての側面、局面から噴出し、増々多くの領域を把握、差別、分断と対決し、増々政治化し、実力を蓄積し、打ち鍛えつつ確実に国家権力の構造——階級支配の構造の根幹に迫る広さと高度さを内包している。そして波状的にその発展の速度を速めつつある。そしてこの対極において、日本帝国主義の侵略反革命は単なる諸政策の追求ではなく、今や日本資本主義の再生産構造を基礎にした体制へと転化し、腐朽化と寄生性は他民族抑圧・民族差別と部落差別を二大基軸とする重層的な差別分断支配

自己の限界と欠陥、弱点を露呈し、混乱と分解・分散化に陥った。そしてへ革命的左翼が未だ革命的階級の深部から増頭している闘いの、その前進性、根底性と固く結びつき、その意識的表現者としてそれらをプロレタリア独裁樹立に組織し抜いていく指導性と統率力たりえていない点に最大の問題がある。それは戦後小ブルジョア民主主義運動の急進左翼として出発し、その大衆の昂揚、革命的前進を全力で主導しつつ、同時にそれ自身との対決・格闘を通して自己を共産主義運動へと高めあげるべく闘ってきたへ革命的左翼が、遂に小ブルジョア急進主義左翼たることを真に克服し抜き、自己を真に、プロレタリアートの階級闘争の意識的表現者たる共産主義運動として確立することに挫折したこと、そしてこの挫折が、戦後小ブルジョア民主主義運動の根底的批判をばらんで、頭している革命的階級の深部からの前進的運動によって露わにされ、批判され、鞭打たれているということである。

今や問題は、この挫折を徹底的に克服し、この前進的運動が真剣に求めている指導性・統率力へと、即ち

の構造として深まっている。更に、明白に労働者階級から分離し、ブルジョアジーの手先となりおとせられた労働貴族、排外主義たる帝国主義労働運動の潮流がはいかいし、又、その基盤としても立場としても小ブルジョアジーの側に純化しつつ、ブルジョア社会の熱烈なる擁護者になり果てている体制内反政府派・差別者集団・社会排外主義たる日共現代修正主義がばっこしてある。更に露骨な民族排外主義の反革命暴力——武装反革命が育成されている。

だが金融資本の圧迫と資本主義的荒廃によって零落と生活の不確かさを強いられている小ブルジョアの決起を拡大し、比較的上層の労働者をとらえている中間主義的な小ブルジョア民主主義派の動揺と改良主義的反政府性も強まっている。これら総体のせめぎあいには、根本的な体制的危機の端緒を發展させ、波状的に加速化しつつ、革命的昂揚と、国際階級闘争から規定される革命と反革命の激突を準備しつつある。

第四に、以上の中でへ革命的左翼は一時期の端緒的な革命的大衆闘争を主導しつつも、その敗北と共に共産主義運動へと自己を鍛えあげることであり、且つこの格闘を、現実の前進的運動に献身的に参加し、その發展のために助力し抜くべく苦闘する中で真に実践的に遂行すること、そして革命的政治の核心を明確にし、堅持し、その下に全闘争を統率し抜く、革命的組織を建設することである。

第五に、以上の中で、この数年間の赤軍派——連合赤軍の闘争とその敗北・破綻はへ革命的左翼のその革命性の基準であったへブルジョア国家権力に対する非妥協の暴力的闘争をば、一握りの非法法軍事組織による武装闘争へと徹底化し、そこにおいて最も献身的、戦闘的推進翼となつて実践し抜くことによってへ革命的左翼の根本的飛躍の課題をつき出しつつも、小ブルジョア急進主義的革命的運動の真の克服と、小ブルジョア急進主義からの分離と自己の独自性の確立を聞いておこなうことができず、かえって逆に、その戦闘性・革命性の基礎そのものにおいてそれに拝従し、融合し、その最も徹底した、最も革命的な代表者として、最後の最後の結論まで押し進めることによって、このこと

に根本的挫折をしたことを明白にしたのである。(思想的、政治的解体、破綻はこのことを示しているのだ)だから我々にとってこの徹底的克服とは、同時に又、今日の「革命的左翼」の焦眉の課題を徹底的に遂行すること、その一中核としての役割を果たすことでもあるのだ。我々はそれを頑強に遂行し抜く中から、単一の革命的プロレタリア党を闘い取るであろう。現在の我々の作業自身、この一大事業の長い行程の中に位置づけられるべきその一中核として自己を鍛えあげるものである。

第三章 「革命的左翼」の歴史と我々

我々は引き続いて、「革命的左翼」の出生と成長過程についての概括的総括に進もう。赤軍派の歴史的基盤——その登場と弱点を根拠づけている——と位置を明確にし、赤軍派——連合赤軍がつき出し、格闘した根本的飛躍の課題、そしてその敗北と破綻が暴露したこの基盤そのものゝ限界、欠陥を明らかにすること、とりわけ第二次ブンドの意義と限界を明白にすることがその眼目である。(尚こゝでは連合赤軍が日共革命左派神奈川県委との合流をもって結成されたという問題が残されるが、これについては後にその総括を明らかにしていくであらう。)

(1) 「革命的左翼」の出生と闘争

「革命的左翼」は五〇年代末に日共からの分離を通して自己を形成したのであったが、基本的にはこの分離と闘争自身、民主主義的大衆運動——しかも帝国主義に対する小ブルジョア民主主義的反対派としての

性格を色濃くもった、枠の狭い部分的な——の急進派(主に学生大衆運動と総評運動内の若干の戦闘的青年労働者グループを基盤にした)を母胎として、自己を特徴づけたのであった。そして一方ではこの急進民主主義運動の延長上に、帝国主義(権力)打倒、社会主義革命を設立してきた。一方では民主主義闘争の急進的徹底化が帝国主義(権力)打倒、社会主義革命の要求にまで行き着かざるをえないとして、他方では民主主義的要求が帝国主義(権力)打倒、社会主義革命によってしか解決、実現されえないとして、だがこのことは必然的に社会主義革命を曖昧模糊とした漠然たるものにし、又民主主義闘争をも具体性と首尾一貫性と階級的立場を欠いた、観念的抽象性におとしこめ、他方では民族解放闘争を世界プロレタリア運動から排除する見地と結びついて、世界体系としての帝国主義——国際プロレタリアートの闘争の見地から政治権力

の特質を捉ええない、政策闘争の延長上での日帝自立論を押し出した。我々の一定の同志がこのことを鋭く暴き出したのはけだし必然であった。と同時に、へ革命的左翼は自己の革命性の基準を、この民主主義闘争における日和見主義、第二次大戦後の帝國主義諸国プロレタリア運動の日和見主義の最大のものである、民族主義・国民主義（国民的な民主主義「革命」）・議会主義に対する闘争の宣言、即ち世界革命・プロレタリアート・独裁・暴力革命の旗印と、その表現たる敵権力に対する非妥協の暴力的闘争として闘ってきた。そしてこの民主主義闘争における日和見主義との闘争と、急進民主主義運動の延長上での帝國主義（権力）打倒・社会主義革命の設立とを切り結ぶ結節点、へ謀介者現在の民主主義運動の最左派ヘゲモニーとしてへプロレタリアートヘゲモニーを設定し、その体现者として党建設を追求してきた。まさにそうすることによって、共産主義運動の解体、現代修正主義の成熟、プロレタリア運動が根深く日和見主義に支配され、日和見主義が社会帝國主義に成長転化していく逆流に抗して、

このへ革命的左翼の出生と成長の一時期を特徴づけたものこそ、ブンドと革共同の闘争であった。この闘争の核心は、自己の母胎たる急進民主主義運動をどのように主導し、国家権力に対する態度をめぐって変革し、革命運動へ鍛え上げるのか、又この主導・変革・高度化をおし進める闘争において、どのように自己の出生のうちにはらんできた思想上・政治上・組織上・階級的基礎上の小ブル性を克服し、変革し抜くのかということであった。革共同革マル派が早くからの闘争から脱落し、むしろそれと反動的に敵対して小ブル日和見主義に純化し、体系化していったことはまごうことなき事実である。そしてブンド革共同中核派こそ非妥協的暴力闘争によってこれをおし進めたのであったが、この暴力闘争をどのような思想的基礎と政治的立場に基いて、どのような首尾一貫した政治的方向と階級的深さをもって組織し抜くのか、どのような組織性によって支え抜くのか、その内的闘争はあった。この内的闘争が前面に押し出したスターリン主義批判・國際主義・安保・沖繩闘争と日本革命の戦略問

小ブルジョア急進主義運動として出生した我々が自己の出生の小ブル性にもかかわらず、不断にそれを克服し、プロレタリアートの側（立場）へ移行すべく闘い、革命的前進性を保持し、自己を一個の革命的潮流へと形成しえたのであった。

しかし同時にこのことは、たえず共産主義と小ブルジョア民主主義との分界線を曖昧にし、両者を混合させ（というより当面の民主主義闘争の直接的延長上に共産主義運動を見出すという急進民主主義）、黒田哲学等の主体的唯物論や宇野経済学等の種々の小ブルイデオロギーを自己の思想的基礎に雑居させ、へプロレタリア階級とその前衛党を現存の民主主義闘争における戦闘的ヘゲモニーとして抽象化し、その手段とみなすか、「あるべきプロレタリアートなるもの」として観念化することになった。更に又観念上の世界主義・急進的コスモポリタニズムと実践上の小市民的民族主義、民族排外主義への屈服、そして組織上でのサークル主義と戦闘団主義との間の動揺に、たえずさらすこととなった。

題・暴力の戦略的位置と統一戦線党建設の路線をめぐる闘争、そこにへ革命的左翼の跳躍——革命的潮流への過渡の闘争があった。そして第二次ブンドこそ、その理論と組織と実践をこの核心に迫りつつ最も体系的に、首尾一貫しておし進めることによって、六〇年代におけるへ革命的左翼の到達水準と基調を形成し、反スタイデオロギー・政治的急進主義・戦闘的（國主義を「沖繩奪還・安保粉砕・日帝打倒」として最も誠実に実践した中核派に対する独自性を明らかにしえたのである。

(2) 第二次ブンドの到達点と限界

七回大会を画期とする第二次ブンドの、過渡期世界論——國際主義と組織された暴力をかけた闘争こそ、自己の出生の小ブル性を克服する端緒的闘争として、へ革命的左翼を真にプロレタリア的（共産主義的）革命潮流へと跳躍させる過渡を切り開き、一つの水準と基調を形成した。しかし又そこに第二次ブンドを中軸とする六〇年代へ革命的左翼の歴史的限界も烙印されていたのである。とくにそれがあらわとなった

六九年以降、この限界をいかに克服すべきかが党内一分派闘争の根底に横たわり、我々も又現実の階級闘争の到達水準・発展段階に対する自己の党的実践の立場を、この限界の克服として闘い取るべく努力したのであった。だから我々の主体的総括のために、その直接の歴史として第二次ブンドの意義と限界を明確にしておかねばならない。

第二次ブンドの闘争の核心は、現実の国家権力に対する非妥協的暴力闘争を全力で押し進めつつ、同時にその中で国際主義と権力問題をめぐって自己をプロレタリア独裁を組織し抜く潮流へどのように鍛え上げ抜くのかという一点にあった。我々は第二次ブンドの理論と実践について、①スターリン主義・「反スタ」主義批判②帝国主義・現代修正主義批判と国際階級闘争に対する立場③三プロク階級闘争・世界同時革命・反帝国第三潮流建設④日本プロレタリアートの国際的任務と権力問題⑤党建設⑥組織された暴力と反帝統一戦線⑦階級の基礎の諸点から簡単に総括しておきたい。

に意図的に方向づけられ、統率されねばならないかを提起したのである。まさにこのことによって、小ブルの批判としての「反スタ」主義の「一対一」対応的な、裏返しされた民族共産主義（多くのソ連論者が、そのソ連社会批判の立場において自己暴露している）、経済主義（法則止場論や政策論等の）、一國主義革命路線（「反スタ」主義の政治的帰結）を暴露し抜いたのである。このことによって第二次ブンドは国際共産主義運動―国際階級闘争を総括する端緒、中国プロ文革、ベトナム革命戦争を世界共産主義革命をめざすプロレタリアートの世界階級闘争の最前線として対象化し抜く端緒、国際主義とプロレタリア独裁を革命実践の核心に闘い取る端緒を獲得したのであった。

しかし又、第二次ブンドのこのスター反スタ批判は、階級闘争の根本的基礎・階級闘争を生み出さずにはおかない根拠そのものに対する原則的批判を明らかにし、それを通してこの基礎・根拠それ自身を歴絶するこの階級闘争の到達目標を明らかにするということが欠除していること。スターリン主義の網領的立場イデオロ

①日本革命的左翼の出生以来の、その最も基礎的立場を規定してきたスターリン主義批判について、第二次ブンドは民族共産主義（民族的一國的な社会主義社会―共産主義社会の実現）、経済主義（社会主義経済法則論・法則適用論・生産力理論）・一國主義革命路線（各国革命の類型化）の批判として明らかにし、その集大成された戦略立場（ソ連一國社会主義建設防衛―平和共存戦略）に対する批判として貫き、いわゆる労働者国家における階級闘争の存在、それがプロレタリア独裁をめぐる闘争であること、社会主義建設も又階級闘争の問題として把握すべきこと、そしてこの階級闘争が世界共産主義革命の勝利をめざす国際プロレタリアートの闘争の一として組織されるべきことを明確にしてきた。スターリン主義が世界プロレタリア運動に果している政治的役割をその戦略批判、即ちその戦略によって階級闘争の放棄、プロ独の放棄が戦略的に体系化されていることをあばき出し、逆にプロ独をめぐる階級闘争が世界共産主義革命の戦略・国際プロレタリアートの闘争の利益・その戦略にどのような

ギーの基礎そのものの批判にまで貫徹されていないこと、或いは戦略批判がそれによって基礎づけられていないこと、従って又プロ独をめぐる階級闘争を戦略的に方向づける自己の網領的立場・党的立場が曖昧化され、運動の方向づけ、推進方向の対置にとどまってしまうこと。又それ自身のような諸矛盾によって性格づけられているかを全体的に明らかにしえないこと。総じて共産主義運動の原則的立場の曖昧さという弱点をもっていたのである。このことは国際階級闘争に対する自己の立場を「根拠地国家」におき、直接的に実態的に実現しようとする志向（―国際根拠地建設と革命国家の進攻）や、プロレタリア独裁を民主主義闘争の直接的延長上での運動の政治的力学の問題として把握する急進主義を生み出すこととなった。

②日本共産党国際派分派の左翼として出立し、戦後小ブルジョア民主主義運動の急進的翼を母胎として成長してきた日本革命的左翼にとって、帝国主義に対する小ブルジョア民主主義的反対派からどのように分離するか、国際階級闘争と諸潮流に対してどのような

な政治的立場を確立するのには、長期にわたって中心的政治問題となってきた。第二次ブントは、過渡期世界Ⅱ世界プロレタリア共産主義革命の時代の始まり、発展と共に、帝国主義がそれと対抗して、米帝を軸に新たな反革命プロックの諸形態と諸体制をつくり出していること、現代修正主義が平和共存戦略を体系化された路線によって結託と争奪をもってそれを補完し、国際プロレタリアートに対立していること、従って世界体系としての帝国主義と平和共存、平和移行路線に対する態度によって国際階級闘争と諸潮流の評価の基準を定めるべきことを明らかにした。まさにその観点からベトナム革命戦争を国際階級闘争の環、世界革命の最前線として対象化し、民族解放闘争を世界プロレタリア運動の前線として明らかにすることを通して、民族植民地問題に対する実践的態度を確立する道を開き、「先進国労働運動の歴史的現実の窓から世界を眺める」一國主義を克服せんとしてきた。

しかし第二次ブントは次の三点の欠陥・曖昧さのため、真にそれを達成することができなかった。一つは「死滅しつづつある資本主義」であるのだ。(二つは国際共産主義運動の総括の不徹底である。それは一方では世界プロレタリア共産主義革命の発展の血路がどのような党派によって切り開かれ、世界革命の発展にどのような新たな内容課題をつくり出してきたのか、その中で貫かれてきた党派闘争に対する態度が全く曖昧であること、とりわけ今日の民族植民地問題に対する網領的対象化が欠除していること、他方では自身が創立した日本革命運動―日本階級闘争をその中に歴史的に総括し、対象化し抜くことが欠如しているため、自己の歴史的位置・到達水準・立場が曖昧化され、コモポリティニズムの偏向を生み出す。そのため、民族解放闘争を真に世界プロレタリア運動の最前線として対象化しえず、一國主義の克服が不徹底にとどまり、民族問題に具体的に接近することをおしとどめたのだ。(結局自己を、先進階級闘争を無条件に最前線の担い手、統合主体としておく見地)三つは国際階級闘争の総括との関連において、現代帝国主義の特質、世界

は帝国主義批判・現代修正主義批判の基礎に資本主義批判がおかれていないこと。更に帝国主義批判自身、帝国主義時代の階級闘争の経済的基礎に対する階級的批判として貫かれず、経済主義に陥っていること。この欠陥・欠陥は、a. 階級支配の基礎、一切の隷属と悲惨の基礎たる経済的支配・隷属とそれ自身を廃絶し、労働の経済的解放を達成する共産主義革命の完遂の立場から、全世界の階級闘争を扼え尽すことをおしとどめ(プロ文革や民族解放闘争の世界史的意義の不明確) b. 帝国主義の本性をバクロし、社会主義体制のため唯一の戦士としてそれと真に對抗する勢力たるプロレタリア階級の苦悩と呻吟、解放の力がどのように蓄積されているのか、それに真に立脚することを曖昧にし、更に民族抑圧と民族解放闘争、抑圧民族のプロレタリアの階級の態度、任務を曖昧にし、総じて帝国主義に対する小ブルジョア民主主義派との真の区別を、曖昧にし、c. 資本主義社会の諸現象・諸問題に対するプロレタリアートの最も基本的な態度を曖昧にさせる。(「帝国主義は資本主義の最高の発展段階」である。

体系としての帝国主義がどのような政治的特質をもつに到っているかが描象され、敵の分析、日本労働者階級の政治的任務が一面的であり、戦略的観点をたえず曖昧化させたのだ。

(3) 以上の上に立って、第二次ブントは、世界プロレタリア共産主義革命の時代の始まり、発展、プロレタリアートの世界階級闘争の到達地点、その歴史的現実を三プロック階級闘争として明らかにし、あわせてこの階級闘争の先頭を担っている革命的左派の国際的存在を明らかにし、三プロック階級闘争の各々の性格と特質を世界同時革命戦略の下に統合し、かつ統合する主体を国際第三潮流の建設として進めることを、自己の立場として打ち出した。だがこれは現存する運動の性格・特質の共通性を抽出して類型化し、現にある運動としての実態的結合・統合・その方向づけに一面化していく限界をもたざるをえなかった。このことは様々な性格と特質・水準・様々な形態と現われをもって闘われている現存の運動を、単一の有機的な世界革命運動として統率し、結束し抜いていく網領的立場、

敵味方一友の關係、世界的規模での諸階級勢力の相互關係と矛盾の性格と共產主義政治の核心を不明確とし、危機論や運動形態論の中に結合を求めざるをえなくし（「危機と階級闘争の國際的性格と形態」）、運動の結合自身も系統的に組織されることができず、現存の運動への一面的依拠・その一点突破・全体の統合、現存の日方の運動を、全体を統合するものとして一挙に実現する（前段階蜂起→世界革命戦争）という傾向に陥ることとなった。他方では各國の具体性・特殊性を捨象し、平板化し、日本革命の戰略問題も先進階級闘争一般の中に解消され、コスモポリタニズムの偏向を色濃くもったのである。何よりも日本革命の實踐について真に日本のプロレタリア階級人民に真に依拠することを曖昧にさせたのだ。國際第三潮流の建設も、運動における同質的傾向性、運動の戰略的方向を担う最左派ヘゲモニーとして、運動からの党建設・現存する運動の左派ヘゲモニーとしての党、そして同質的傾向性に組織形態を付与して実体化するものとして世界党―軍―戦線にとどまった。これは後にこの同

政治闘争任務を第一に掲げ、及びそれと結合した「帝國主義的統括機構への全社会的再編」に対する闘いに全闘争を統合することによって、権力獲得のための闘争に接近すべきことを主張し、権力に対する非妥協の暴力闘争を、この政治的立場の上に基礎づけようとしたことであった。（その意味でこれは政治的に無方向な自然発生的暴力闘争、小ブル的暴力闘争とは明確に區別されているのだ。）しかし又、第二次ブンドは権力問題に接近するや否や、自己の限界を露呈し、権力獲得の闘争に全闘争を系統的に組織し、統率し、準備する首尾一貫した見地と活動を確保しえず、現実の運動の自然発生性に拜跪し、その最も戦闘的表現者にとどまらざるをえなかったのだ。（前段階蜂起の方針は、この限界を同じ基礎の上で戦術的に突破しようとする試みに他ならない。）この限界とはa. 國際階級闘争の、運動、その発展形態としての結合―各國階級闘争の共通性の抽出と危機の性格と形態という観点のために、日本革命の戰略問題は先進國革命一般の中に流し込まれ、b. 原則的な資本主義批判の欠除に根拠づけ

質性を飛躍させる運動―前段階蜂起によって、一挙に世界党―赤軍に実体化するという方針、更には國際根拠地建設を生み出すものとなった。

問題はあくまで國際共產主義運動の総括を通しての自己の綱領的戰略的立場であり、國際階級闘争の中で様々な役割を担ってきた、又担っている諸党派と党派闘争に対する態度であり、日本革命運動の総括を通して自己の歴史的位置・到達点・態度を明確にすることであり、どのような立場に基いて、どのような歴史的位置と水準から、どのような党派との結束を闘い取っていき、自己の限界を止揚していくのかである。又それに支えられて、運動としての結合を、具体的な國際階級闘争の任務に沿って、系統的に組織し、築き上げていくことである。

④ 第二次ブンドの闘争の最大の核心は、日本階級闘争において一國主義と經濟主義の傾向に反対して、自己の國際主義的立場に立って、日本プロレタリアートの國際的任務をこそ明確にし、その観点から権力問題に接近すべきこと、日本プロレタリアートの國際的

られて、日本資本主義の階級的分析、日本労働者階級分析、日本労働者階級の狀態、その苦悩と要求、歴史的役割と任務が明確にされず、又日本階級闘争の総括も根本的にはなされず、國際階級闘争の総括と関連づけられた現代帝國主義の特質、戦後世界の政治的構造の中に日帝の國際権力要素とその特殊な位置と性格、民族問題と日本プロレタリアートの態度を明確にしえず、総じて國家権力の構造―階級支配の構造とその特質を明らかにすることができなかったこと。c. 従って又打ちたてるべき権力の性格と任務、組織すべき同盟、革命の指導的階級、味方と友、更にプロレタリアートに権力獲得を準備させ、その政治的自由と進出を拡大促進し、解放闘争の能力を発展させ、他の被抑圧諸階級への指導性を打ち鍛え、國際的結束の条件を拡大していくための、プロレタリアートの要求・任務―最小限綱領、及び潮流批判として明らかにしていくことができず、d. そのため権力問題を政策阻止闘争の延長上に、危機論的に、或いは運動形態論的に提起し、階級闘争の現瞬間の現われに一面的に依拠し、自然成

長性に伴隨する結果をもたらしたのであった。

このことの実践的帰結は、暴力闘争の推進、その高度化を、政治的急進主義への墮落から防衛し、資本主義が日々蓄積する労働者階級の眞の苦悩と呻吟、解放の力を組織し、彼らの闘争の上に基礎づけ、その階級闘争の一層自由な発展、政治的発達、組織化と進出、他の被抑圧階級への指導性と同盟の強化を打ち鍛え、階級闘争の一切の現われを統率し、労働者階級の解放闘争の諸条件を切り開き、前途をはき清め、ブルジョア国家権力を打倒する闘争へと労働者階級を押し出し、国家権力の構造、その根幹と非和解的対決を切り開いていく、首尾一貫した政治的組織的戦闘力として鍛え上げ抜くことをおしとどめ、たえず急進主義的動搖によってその成果と意義がけがされ、だいなしにされるという欠陥であった。(とくに党の政治的独自性を解消し、党の政治・活動・戦術の巾を狭め、当面の民主主義的闘争任務の徹底的遂行によって党を鍛え上げるよりも、それを半ば絶対化して、党をそのヘゲモニーに解消させる。)

第一に現存の階級闘争の現われを、どのような綱領的立場と、政治目的と方向、要求と任務に基いて組織し、統率し、鍛え上げ、高度化していくのかということ、運動の構造の解説と意味づけ、それを革命闘争の型として普遍化することにおきかえ、階級闘争の階級闘争の現瞬間の現われへの伴隨、一面的依拠、この運動の現実と自然成長性への追隨をもたらさずにはおかず、未来から現実を規定するのではなく、現実から未来をおしはかり、運動の狭さと部分性の克服を、政治力学の問題としてしか解決しえない立場である。第二に党の立場と任務、活動がこの運動の推進力、突出的闘争に限定され、階級支配の構造全体を把握し、それに対する自己の根本的立場・態度を確立し、鍛え上げ、その下に労働者階級を、その民主主義闘争・経済闘争・イデオロギー闘争を組織し、統率すべく闘い、そのために現情勢を利用し抜くという闘いを解消するものである。第三に戦術の側面から言えば、具体的な階級分析、階級闘争の情勢の分析から出発し、諸階級層の全体、その相互関係全体を考慮に入れるのではなく、自己が

⑤ 第二次ブンドの最大の特徴、その実践的役割、牽引力と決定的限界は、その運動論的見地にこそあった。階級闘争の一切の現われをプロレタリア独裁に向けて組織し、統率し抜くということを、たえず運動論、運動構造として設立するこの見地は、何よりもへ革命的左翼が学生大衆運動の戦闘的指導グループから出立し、長年にわたってその革命的牽引に自己の主要な任務をおき、それをテコとして社共を指導力とする運動の内部に独自の左派勢力を築き、一つの潮流へと分離し、形造ってきたこと、この急進民主主義左派とその克服としての性格に規定され、かつそれを烙印してきた。

第二次ブンドはこの過渡的な一時期の水路を、組織された暴力と反帝統一戦線ソヴエト運動、その闘争の型として中央権力闘争マッセントを掲げておし進めたのであった。とくに自己の意識性と統率力をこの「中央権力闘争」において牽引し、その基軸へ組織された暴力をおいたのである。ここにこそ第二次ブンドの特徴と弱点が鋭く現われているのだ。これは

主要な基盤をおいている当面の運動の現実から出発して、その要求する範囲内に自己の戦術と活動を限定するものである。そして闘争の任務と形態について、あらかじめ型を設定し、限定し、自己の手をしばり、狭めるものである。第四に自己の党派性と党派闘争が運動の進め方とその意味付けに限定されていること。党が統一戦線に、その左派ヘゲモニーに解消され、反帝統一戦線内でのプロレタリアートとその党の独自性が曖昧化されていること。第五にとくに「中央権力闘争」論は、政治的進出と高度化の先鋒を切り開く革命的意義をもちつつも、蜂起を闘い取る党の建設―労働者階級の正規の攻取軍を堅忍不拔の闘争を通してする組織化と、そのために全面的政治的宣伝と煽動を組織すること、階級闘争の一切の現われを政治的に統率し、組織的に系統化することを現存の民主主義闘争の急進化と高度化自身に求める、急進民主主義の戦闘性と觀念性を鋭く体現するものであり、「ソヴエト運動」論の自然成長論と一対をなしていたのである。これらは組織思想からみれば大衆運動主義であり、権力問題への

態度からみれば合法主義最左翼の立場である。

⑥ 第二次ブントは、党組織路線において、大衆運動フラクとしての産別党（下からの党建設、革命家の組織と大衆闘争組織との混同、とりわけ党建設を先進的の学生活動家組織の指導部へと転落させる傾向）を克服し、中央組織・地区組織の、上からの独自の系統性・組織陣型をもった党建設を端的に打ちたてた。まさにこのことによって暴力闘争は支え抜かれたのであり、総評運動の枠をこえた労働者階級の新たな戦闘的分子を結集し、革命的カイドルへと準備しえたのである。

しかしこの党の役割を「大衆闘争内部における反帝國主義のヘゲモニーを拡大しつつそれを指導する任務」とすることによって、現実には「全学連・反戦の反帝統一戦線」に依拠したその指導体系としての党、「反帝統一戦線内のヘゲモニー」七回大会報告集としての党組織の水準にとどまったのだ。党の立脚点を現にある運動、その傾向性の中に求め、その最左派ヘゲモニーとして党を設定するこの見地は、a. プロレタリア

の首尾一貫した立場・目的・政治的任務を明確にし、その下に系統的活動を組織し、労働者階級の全闘争を統率し抜いていくための闘いが、当面の部分的政治闘争の推進、その徹底化におきかえられ、自己を政治的急進主義と戦闘的傾向へ傾斜させざるをえず、d. 労働運動と学生運動を並列化し、へ運動として同列におき、プロレタリアートの階級闘争の戦術を買くというよりは、学生運動の戦術によって全体をおしはかるといふ傾向をもたざるをえないのである。

だが我々は以上のことからたらされている第二次ブントの党建設上の欠陥を次のように指摘しなければならぬ。第一に革命的实践の核心に党組織を対象化しえないこと、自己の思想的立場をたえず党組織と日々の党的実践として内実化し、体現し抜いていく格闘を解消してきたこと、言いかえれば第二次ブントの思想的政治的立場が、党組織・組織問題を対象化しうるものではなかったのである。だから党組織・党建設はたえず理論一般の問題と、組織機能・組織技術の問題に分解され、運動の傾向性に応じて動揺と分解を生み出

階級の立場を曖昧化させ、共産主義革命に向けて「プロレタリア階級の立場を曖昧化させ、共産主義革命に向けて」「プロレタリアートの偉大な歴史的使命を果す能力を獲得させることを任務として、プロレタリアートを全てのブルジョア政党に对立する独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級闘争の一切の現われを指導し、搾取者の利益と被搾取者の利益とが和解しえないように対立していることをプロレタリアートの前に暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要な条件とを彼らに對して明らかにする」という最も原則的な任務が解消されている。b. 従って又、現在の運動の中においても、その部分性、狭さ、偏向と闘いつつ、プロレタリアートの階級的独自性を党の独自性としてたえず保持し、鍛え上げることが、「大衆闘争内での反帝ヘゲモニーの拡大」とか「政治闘争部隊」反帝戦略部隊の形成「階級形成」七回大会報告集というように曖昧化し、帝國主義に反抗する諸勢力内でのプロレタリアートの独自性、急進的なブルジョア民主主義的反対派との区別を曖昧化させる。c. 党

しつつ、究極のところ諸個人の観念・諸個人の思想・主体的決意と主体形成に解体されていったのだ。このことが思想的統一を基礎とする、プロレタリアートの階級的団結の核心たる、堅固な中央集権的な組織者「戦闘組織への成長を阻害し、半無政府主義的で、半自由主義的な、戦闘集団化とサークル主義へと埒り崩したのだ。党の原則的立場の曖昧さ、戦略戦術主義の欠陥はここにこそ集中的に現われ出たのだ。第二にその党派性の水準が、階級闘争を生み出すにはおかない根拠に對する批判を基礎として、この階級闘争の到達目標として明らかにし、その立場を階級支配「階級対立の全ての現われに對する態度の確立を通して鍛え上げ、この立場をもって現存の一切の闘争を対象化し、支え抜き、統率し、ブルジョア国家権力との非和解的闘争へと党を軸心に組織し抜き、党派闘争を組織し、プロレタリア独裁樹立の闘争を準備し抜いていくというよりも、現にある運動の傾向性の代表者として、それをどのように論理の上で徹底化し、見直し、意味づけ、飛躍させ、この飛躍を直接に現実の飛躍として実

現すべく、自己の戦闘性を發揮する点に自己の党派性を求め、それに一切の運動を従属・動員することを指導性としてきた。その結果、左翼セクト主義・空論主義として現実の側からの反撃と罰を蒙ってきたのである。第三に労働者階級の現存の運動に真剣に参加し、徹底的に大衆に依拠し、階級のヒラメキの一つ一つを頑強に組織し、共に苦闘し、彼らの苦悩の真の内容と根拠を明らかにし、運動の階級的・政治的性格・意義・方向・目的を明確にし、この運動をたえず広め、深め、高めながら、彼らの階級的自覚と政治的発達と組織化のために献身的に助力し抜き、同時に真にそれを支え、遂行し抜く自己の思想的政治的立場を鍛え上げること、労働者階級の現存の大衆運動の利益を徹底的に擁護し、その前進発展のために闘うと同時に、それを支え、統率し、その中で労働者階級の運動全体の未来の普遍的利益を体现する自己の党的独自性を鍛え上げるべく格闘し、その下に自己の活動を系統的に組織すること、これらのことをたえず混乱させ、自己の立場と活動、政治を狭めてきたのである。

又その主要な担い手であった学生・インテリゲンチヤ、知識労働者層を分解し、動揺させ、彼らを憤激と反抗へ向わせ、動員したことであった。とくにこれは政治的には、一方では金融寡頭制の政治的支配が強まり、帝国主義の反動と暴力が汎ゆる分野で露わとなり、一時期の「平和的民主主義」が急速に過去のものとなることによつて、他方ではベトナム革命戦争―中国プロレタリア革命の政治秩序を震撼させ、「平和的民主主義」の幻想の支柱であった小ブルジョア民族主義と小市民的平和主義を動揺、互解させることによつて、帝国主義に対する急進的、戦闘的、民主主義的反对派として輩出したのである。しかしそれは一方ではその小ブルジョアの動揺性と衝撃の深さへの盲目的拜跪として、他方ではプロレタリア運動が現代修正主義・日和見主義・帝国主義潮流に長い間支配されていることへの罰としての、即自的な、「左翼主義」的反発として、無政府主義とプロレタリアートに対する不信、或いはプロレタリアートにとって代るうとする志向をも内包していたのである。このことはその戦闘性、種

⑦ 最後に、我々は第二次ブンドの闘争を、次のような社会的階級の基盤との関連において総括しておかねばならない。六〇年代後半の一時期に、急進的・戦闘的民主主義運動の大衆的昂揚の社会的基礎となったのは、戦後資本主義の発展の不可避的結果として、金融資本・金融寡頭制の支配の強化、小ブルジョアジーの大規模な分解・その大多数の没落と零落が加速度的に促進され―これ自身、ブルジョアジーとプロレタリアートとの二大階級対立の発展、階級対立の非和解性の激化の一表現であり、相対的過剰人口の拡大をテコとして労働者階級の貧困・隷属・抑圧・搾取・肉体的精神的磨滅の増大をもたらし、同時に又プロレタリアートを唯一の真に革命的階級として増々押し出し、その下への被圧迫被搾取大衆の同盟・結合を押し出すものである。―彼らの社会的地位の動揺、低下、金融資本の圧迫の強化への直面、困窮の増大、生活の不確かさを激しくし、プロレタリア階級へ接近させ、投げ入れ、それぞれ所有、小商品生産をイデオロギー的に体现する戦後小ブルジョア民主主義イデオロギー、

★の矛盾に対する鋭さ、献身性によつて労働者階級の政治的組織化と進出の条件を切り開きつつも、同時に急進民主主義と漠然たる空想的共產主義思想の下に、被抑圧階級内の相違を、その存在諸条件と利害の相違をも曖昧にし、消し去り、そうすることに自己の社会的・階級的地位を抽象化し、とびこえ、プロレタリアート・ブルジョア運動に対する自己の主導性を確保、或いはその政治的組織化を代行しようとする志向を生み出した。第二次ブンドの思想的政治的立場は、これと対決し、闘い、克服するのではなく、たえずこれに拜跪し、依拠するという致命的弱点をはらんだのである。

たとえばこのことは「全人民的政治闘争によつて諸階級の、又労働者階級内部の、個別的な利害の対立や分裂を克服する」(パンフ赤軍№1「我々の立脚すべき地点」)として主張されていることの中にも示されている。全人民的政治闘争は決して諸階級の利害対立や分裂を克服するものではない。それはただ同盟を組織するのである。だからこそプロレタリアートはその

中でも自己の階級的独自性を保持し、それを他の被抑
圧階級に烙印し、そうすることによって真に領袖と
なることができる。又労働者階級内部の「個別的な利
害対立や分裂」は、根本的に、労働者階級の共産主義
運動への組織化と、それに結合した共同闘争を通して
克服されるのであり、それは汎ゆる闘いの中で追求さ
れねばならず、又そうしてこそ全人民的政治闘争の領
袖となることができるのだ。むしろここでは、労働者
階級の闘争をどのように全人民的政治闘争—政治権力
闘争へと形成し、組織し、高め上げ抜くのが問題に
されねばならない。この主張の実際の内容は、帝国主
義に対する種々の民主主義闘争の革命的実行によって、
一方では小ブルジョアジーをプロレタリアートの政治
的利益に結合、従属させ、その先進的分子をプロレタ
リアートの側へ移り進ませていくべきこと、他方では
プロレタリアートの一層の政治的進出をおし進め、そ
の水路をはき清め、全人民的政治闘争の指導主体への
形成の条件を切り開いていくべきことである。だがま
ずもってプロレタリア階級を独自の組織し、増々苛

働者大衆から切り離す結果となる」や、民主主義闘争
にあっても、「強いのは一定の階級の意識された現実
の利害に立脚する戦士だけである。」を深くかみしめ
ねばならない。前記の、時々の種々の民主主義闘争に
よって、労働者階級の、更に被抑圧諸階級層の根本的
統一を実現しようとする見地は、一方では党を統一戦
線に解消し、他方では階級闘争の一切の現われを真に
支え抜き、統率することを不可能たらしめ、政治的力
学の問題に解消されることによって利用主義さえ生み
出し、とりわけ差別分断支配と真に闘うことができず、
自己の立場の曖昧さによって、それに追隨せざるをえ
ないのだ。（それはとくに、部落問題、民族問題によ
って余すところなく暴露されている。）

第二次ブンドはこの弱点を対権力の非妥協の暴力闘
争の高度化によって克服しようとしてきたのであるが、
それは遂に国家権力を階級支配の道具としてではなく、
階級支配の根柢と把え、国家権力対へ人民へに単色化
し、その中で戦闘的突出力それ自身を唯一の実践基
準とする戦闘的民主主義を帰結したのである。（まさ

酷となる賃金奴隷制への労働者階級の反抗を援け、指
導的思想をもった自己の歴史的役割と任務への自覚を
もった組織的闘いへ発展させ、ブルジョア社会とその
基盤の上に立つブルジョア的小ブルジョア諸党と明確
に対立する独自の政党へ、共産主義運動へと組織する
ということを基礎とし、自己の社会革命の条件と水路
を切り開き、準備する観点から、帝国主義政治体制に
対する公然たる政治闘争を組織し、この独自性に基い
て他の被抑圧諸階級層、諸勢力との政治的同盟を組織
するのでなければ、それは必然的に政治的急進主義へ
陥り、プロレタリアートを小ブル急進民主主義に従属
させていく結果に導いていく。我々はこの点について、
今日でも尙、レーニンの次のような指摘、「労働者を
社会主義体制のための唯一の戦士として見る道……こ
のときには政治的自由を労働者の闘争を容易にする一
条件として見ることになる。これが社会民主主義（共
産主義）の見方である。」や「抑圧についての抽象的
な曖昧な言葉で階級の現実の利害を隠すことは、労働
者の先進的分子を政治的急進主義の道に引き入れ、勞

ここに赤軍派と日共革命左派神奈川県委との合同の
思想的根柢がある。」だがそのことは、その戦闘性の
高度化と裏腹に、自己の社会的階級的な性格を曖昧に
し、階級支配の基礎であり、たえずその苛酷さを増大
させる根柢たる経済的支配、隷属とその深まり、それ
がもたらす労働者階級の現実の苦悩・呻吟・解放のエ
ネルギを背後に押しやり、暴力闘争の発展と共に直
面した、労働者階級の政治的自由と進出を一層広汎に
おし広げ、搾取の強化、肉体的精神的磨滅の増大と闘
い、その解放闘争の能力を高め、階級支配がたえず生
み出し、その維持強化の道具となっているブルジョア
イデオロギー・諸政党と闘争を強化し、他の被抑圧搾
取階級との同盟を拡大するといった任務が背後に追
いやられることとなったのだ。言いかえれば、その政治
的立場が同時に自己の社会的立場を対象化しうるもの
となりえず、或いはそれを不問に付し、民主主義闘争
の戦闘的発展と共に、政治的立場と社会的立場との乗
離を不断に生み、拡大し、政治的急進主義と観念化・
観念の上でのエスカレート・誇大化と、たえざる自己

矛盾、ぐらつきを生み出さざるをえなかったのである。

第二次ブントの、自己を実際にプロレタリア階級の
前衛へと鍛え上げていく上でのこのような弱点、自
己が出立した歴史的に制約された条件と基盤への押戻
は、何よりもその思想的立場の曖昧さにこそあった。
その曖昧さこそ、原則的資本主義批判を通して、階級
支配の経済的基礎を明らかにし、ブルジョア社会での
階級関係の真実の姿を暴露し、プロレタリアートの解
放の目標とその物質的諸条件を明確にすることの曖昧
さ——資本主義に対する種々の小ブル的批判への拝跪
である。このことは実践的関連で言えば、資本主義社
会における労働者階級の真実の姿、彼らの状態と運命
について、この社会の発展と共に深まるブルジョアジ
ーとプロレタリアートとの階級利害の対立の非和解性
についての事実に立脚し、資本の蓄積が不可避的に帰
結する労働者階級の側での増々苛酷となっていく奴隷
状態——貧困・抑圧・隷属・肉体的精神的磨滅・搾取
の量の増大、それと共に増大するこの奴隷状態への反
攻、これ自身の中に旧社会の変革的諸契機と新社会の

動と労働者階級の運動を同列におき、労働者も農民も
都市小ブルジョアも学生もインテリゲンチヤも、その
運動としては「プロレタリアート」として何もかもい
っしょくたにしてその階級の差異を消し去り、他方では
マルクスによって「資本制的蓄積の必然的産物である
と共に資本制的蓄積の横柄いな資本制的生産様式の
一実存条件であり、労働者を資本に釘づけにし、資本
の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づけ、労働者階級
全体における貧困労働苦奴隷状態、肉体的精神的磨滅
の増大を集中的に体现し、市民的権利を絶えず空洞化
させ、又更に現役労働者の中の絶えず増大する層の貧
困と被救恤的窮民の死重を帰結するものとして、又労働
者階級の反抗を不可避的に増大させるものとして階
級対立の非和解性の最も鋭い現われ」たる相対的過剰
人口——産業予備役労働者軍を、労働者階級から、階
級闘争の主体から排除してきたという事実が鋭く現わ
れているのだ。資本、権力とその手先によって自から
を自覚し、組織し、戦闘力として実現する条件さえ奪
い去る苛酷な搾取・抑圧・無権利状態差別的重圧にお

形成的要素を見出し、労働者階級の現実の苦悩と呻吟、
解放の力に真に立脚することをなしえなくしていたこ
と。又それを、ブルジョア階級支配の打倒、この支配
の基礎をなす経済的支配、隷属の廃絶——賃労働制度の
廃止の観点から組織し、鍛え上げ、階級の自覚・結束
力へと高め上げ、この労働者階級の経済的解放を達
成していく観点から、経済的支配、隷属を根拠にしつ
つ、同時に労働者階級の反抗を抑圧してそれを維持、
強化するブルジョア階級支配の道具——ブルジョア国家
権力を打倒する闘いへ労働者階級をおし進めていくこ
と、そして現実の種々の闘争を——民主主義闘争、経済
闘争その水路を切り開き、前途をはき清め、労働者階
級の一層力強い政治的進出をおし進め、彼らの解放闘
争の能力を發展させ、階級の自覚と政治的發達、組織
化を發展させるべく闘い、現実の階級支配の構造——国
家権力の構造との非和解的対決へ組織していくという、
首尾一貫したプロレタリアートの階級闘争の見地を曖
にし、たえざる動揺とぐらつきを生み出したことで
ある。このような弱点は、たとえば、一方では学生運

かれている労働者大衆のただ中で、頑強に組織し、彼
らの解放闘争の能力を發展させ、政治的自由を拡大し、
自覚と団結を培っていくだけの、堅固な思想性・組織
性・党派性を持ちえなかったのである。(このことは現
役労働者軍の中に党組織を頑強に建設しえなかったこ
とと照応しているのだ。)まさにそのことによって、
自己が基礎をおいている現にある運動の条件と状態に
押し、追隨し、(主に学生運動・反戦青年委運動
・総評運動)、労働者階級全体の真実の姿・状態・運
命をとらえることができず、又階級闘争の現瞬間の現
われ、しかも部分的現われ、従って階級の矛盾の部分
的現われ、その鋭さに拝跪し、その意識的代表者となっ
たのである。

以上我々は第二次ブントについて詳細に検討を加え
てきた。というのも、赤軍派はこの第二次ブントの
内から直接に生まれ出、この基盤そのものの変革のた
めに格闘しつつ、むしろそれを徹底化し、挫折したか
らである。それと共に第二次ブントも解体しつつし、

完全に過去のものとなった。「新党」の結成は、我々に第二次ブンドを根本的のりこえた革命党の建設を我々の課題として遺言した。だが「新党」がその結成と共に破綻を暴露したが故に、我々は再び第二次ブンドと赤軍派の結成にまで総括を遡らざるをえなかったのである。

最後に以上の展開と関連づけて、我々の思想的実践的立場を築いていくための、現在の我々の方向について簡単にまとめておきたい。(その一つ一つの内容については、後の総括と関連づけて述べるとして。)

① 我々が現在の階級闘争の傾向性や現瞬間の現われに一面的に依拠するのではなく、この階級闘争を生み出さずにはおかない根拠、基礎そのものに對する自己の立場によって基礎づけ、現在の階級闘争の一切の現われをその未来の利益へ統率し抜くためには、我々はまず原則的な資本主義批判に立脚しなければならぬ。それによって「運動の終局目標を規定している、現代のブルジョア社会の性格と発展行程」の基礎を明らかにし、プロレタリアートがこの社会で演じている

ばならない。

③ しかし歴史は階級闘争の歴史は、新たな発展と変化をとけてきている以上、そして現代においてこそ我々の実践的立場が問われているのである以上、我々のその総括に立って、我々の立場を確立しなければならぬ。国際共産主義運動—国際階級闘争の総括、スターリン主義批判と民族解放闘争の発展及びその中で共産主義的潮流の成長、そしてこれらと関連づけられた現代帝国主義と社会帝国主義の特徴づけ、それらをもまえて世界プロレタリア共産主義革命の新たな発展についての特徴づけと、プロレタリアートの、共産主義運動の基本的任務と、諸潮流への態度として、我々の立場を確立しなければならない。

④ しかし我々はそれに満足することはできない。以上の立場は、国際階級闘争に對する、共産主義運動としての我々の立場として、我々の実践全体の基礎に横たわり、それを規定するものではあるが、我々はその立場に立って、その立場に買かれて、当面の我々の主要な任務たる日本革命の問題に、日本におけるプロ

役割、彼らの存在諸条件、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立の非和解性の基礎、プロレタリアートの解放のための物質的その他の諸条件、彼らの歴史的作用を明らかにし、階級闘争の発展、プロレタリアートの社会革命—共産主義革命の歴史的意義と必要な条件、到達目標、プロレタリア独裁の樹立とその意義を明確にしなければならない。そうして党の原則的任務を明示しなければならない。

② そして引き続きいて資本主義の新たな発展段階、資本主義の一般的矛盾を激化させたばかりでなく、新たな諸矛盾を生起させ、国際階級闘争の大規模な革命的發展とプロレタリアートの社会革命の前夜を導いた帝国主義の基本的特徴づけと、プロレタリア運動の潮流の社会主義と帝国主義への分裂、そしてロシア十月革命によって世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まったこと、この時代の特徴づけと第三インターの結成、その歴史的任務を明示することによって、世界プロレタリア共産主義革命と我々の歴史的任務をさし示し、我々の運動の歴史的土台を明らかにしなければ、

⑤ プロレタリアートの政治的自由を拡大し、政治的進出をおし進め、搾取と貧困の増大、肉体的精神的磨滅の増大と闘い、彼らの解放闘争の能力を發展させ、他の被抑圧階級に對する指導性を強めながら、階級闘争のより自由な広汎な發展を切り開き、国際的結束の条件を拡大していくための、日本プロレタリアートの当面の要求、任務—プロレタリアートを権力獲得に向けて準備させ、教育し、鍛え上げると同時に、プロレタリア権力の下で最も徹底して実現される最小限綱領—を確立していくことである。

以上の立場と任務を実際にプロレタリア階級の中に持ち込み、自己の活動を現実にプロレタリア階級の闘争の基盤の上におき、自己の独自性を諸潮流との闘争を通して鍛え上げつつ、労働者階級の現実の運動に献

身的に参加し、彼らの階級的自覚と政治的発達、組織化のために献身的に助力し、労働者階級の階級闘争の一切の現われを指導し、統率する前衛党を、全人民の闘争の最前線に労働者階級の不拔の戦闘の塔として建設していくこと、そして労働者勤労人民の統一戦線を組織していくことである。

第四章 六九年〈安保大会戦〉と党内闘争

——戦術・政治・組織問題について——

へ一〉 六九年の情勢と党内一分派闘争

六九年へ安保大会戦は革命的左翼に鋭い試練をつきつけた。この時、革命的左翼は具体的に戦術問題、

戦術問題、組織問題に根本的に直面したのであり、それぞれ傾向を白日の下にさらし出し、革命的左翼の運動の根本的脱皮―共産主義運動、真のプロ独派への飛躍をどのように踏み出すかをめぐって、党内一分派闘争の一時代へ不可避免的に突入した。この党内一分派闘争は、革命的左翼の基本的限界・欠陥・弱点をつき出し、それをどのように克服し、急進民主主義左派から自己を明確に分離し抜き、共産主義運動としての確立を闘い取るのかをめぐる、歴史的に不可避なものであり、数々の破綻を生み出しつつ、今尚継続中である。とりわけ、これは六〇年代の革命的左翼の基軸をなし、その主導者として基調を形成しつつ、多種多様な傾向をはらんでいた第二ブンドに、最も凝縮して現われ出

た。

このことをつきつけた情勢は、次のように特徴づけうる。

① 国際的な資本主義の土台における矛盾の成熟。生産・資本の過剰の国際的累積が、戦後資本主義の発展の基礎的条件であった信用機構を動揺させ、生産・資本の過剰のびほうの解決であった信用膨張（とくにベトナム戦費を中心とする）そのものの破綻によってバクローされ、資本主義の歴史的没落と世界社会主義の必然性を明白にした。とりわけ少数の富裕な帝国主義諸国への富の集中・生産と資本の過剰の対極に、貧困・抑圧・隷属を蓄積された被圧諸民族の、国際的規模での嵐の如き解放闘争の前進と中国プロレタリア文化革命の勝利、そしてこれらによって、階級融和主義と帝国主義的民族主義の中からよびこまれ、援けられた帝国主義諸国プロレタリアートの反抗の増大、更に

成した。そうして自己を、帝国主義派労働運動・日共現代修正主義と鋭く区別され、対立する一個の政治潮流たらしめた。又これらのことよって、以上の国際的闘争、その最前線と、帶動しつつある革命的階級の深部からの決起と結合する条件を拡大し、官僚的警察の権力との根本的な対決へと進み出した。それと共に政治警察の執拗な迫害・組織破防攻撃に直面し、又漸く結集し、少数ではあれ一つの政治的隊列へと組織し始めた先進的労働者は、資本の極めて政治的なレド・ページ攻撃に直面し、更にブルジョアジーの公然の手先たる帝国主義労働運動の潮流や、日共現代修正主義の反革命的攻撃に対し、激しい党派闘争に直面した。そして又革命的左翼の隊列の増大は同時にその内部の動揺性を拡大し、その思想的曖昧さ、動揺性を暴露し、活動範囲の拡大はその政治の狭さ、抽象性と結びついて分解をつくり出し、更に前記の事態は一方での無政府的な小ブルジョアの自然発生性と、他方での組合主義的な後退傾向を生み出すこととなった。かくして、未だ確固たる思想的立場をもたず、政治的にも

急進民主主義の傾向を濃厚にもち、組織的にも余り訓練されていず、プロレタリア階級の中に未だ確たる基礎をもたず、多様な傾向をはらんだ戦術左翼主義の色彩を濃くもった革命的左翼は、そのことを闘争の前進そのものによってあばき出され、動揺と試練にさらされ、根本的な飛躍・脱皮の道をどのように踏み出すべきかを、鋭く問われることとなった。そのことは「平隠れ」ではなく、目前の「飛躍」をかけた大会戦をどのように闘い抜くのかというすぐれて実践的試練の中で要求されたのである。このことが自からを根本的にふるいにかける党内一分派闘争を不可避としたのだ。

だから目前に迫りくる大会戦をどのように闘うのかをめぐって始まった党内一分派闘争は、それ自身によってどのような立場と目的に基いて、どのような主体的飛躍を切り開き、自己の独自性を鍛え上げるべく闘うのかを押し出し、まさにこのことを党内一分派闘争によって明確にし、鍛え上げ、それを「秋の大会戦」の中に、「飛躍」の核心としていかに「押し抜くのか」という性格をもったのだ。まことに「飛躍」をかけた大

会戦」へ「飛躍」自身、革命的左翼の党的飛躍を核心とし、それに烙印され、導かれてのみ真の飛躍があったのであり、そのことを意識化し、自覚的に鍛え上げた点にこそ、自然発生性に対する真の目的意識性があったのだ。まさにそのようにして、抽象的な言葉の上での共産主義運動―プロ独派を、真に具体的、現実的なものとして鍛え上げ、確立し抜いていく闘いがあった。この要求された課題と水準からすれば、六九年党内一分派闘争は総じて限界をもったのであり、この限界が又分裂の性格をも規定した。そして我々赤軍派も又、自然発生的な限界を烙印せざるをえなかったのだ。（その総括は七〇年に根本的に問われたのであったが。）

へ二〇 党内一分派闘争の基本問題

問題は戦術問題から始まった。何故なら、問題は直接に、自己が主導してきかねない秋の大会戦をどのような戦術として闘うのかとして、容赦なく突き出されていたからである。そして又ここに実践的環があった。秋の戦術問題が登場したのは六九年四・二八闘争後で

あった。その根拠は五派共同声明―四・二八闘争が、秋に更に大規模な昂揚―革命化しつつある一部分の小ブルジョアジーを主要な勢力とする、戦術的急進的民主主義闘争の昂揚―を呼び起すに違いないこと、しかし又旧来の立場・見地・方向のままに自然成長的に進むならば、その限界も既に四・二八で明白であること、（即ち四・二八闘争は「中央権力闘争」の大衆的実現として革命的意義を確保した。しかし又、一たびこの「中央権力闘争」が実現されるや否や、それを軸とし、それを目的として全闘争を導いてきたことの急進民主主義的性格と限界も又暴露され、安保粉砕・沖縄闘争勝利、日常打倒のスローガンの、漠然とした抽象性も又暴露されたのであった。）更に敵警察力との戦闘の高度化を不可避の要求として突き出したことであつた。そしてこれを革命的に牽引しつつかつこれとの格闘を通して、未だ萌芽的で未熟で、混沌状態ではあれ、漸く隊列を形造り始めたプロレタリア党のための基礎が、この昂揚の最前線に立って導きつつ、同時にこの大波にのみ尽され、解体されることなく、逆

にどのように自己の隊列の独自性を鍛え上げ、烙印し抜くのが問われたことであった。

革命的左翼にとって、既にその戦列から明確に脱落していた——東大闘争での敵前逃亡をみよ——革マル派の純然たる日和見主義・敵前逃亡は全く問題外であった。と同時に又、我々にとっては、中核派を相対的左派・中心とし、ブンド内右派を含む部分の、この大波の一般的水準に自己を溶解し、「大衆叛乱」として終止しようとする傾向も、へ飛躍なき大会戦・革命的左翼としての墮落・自然成長性として反対し、徹底的に克服すべきものであった。更にブンド中間派の優柔不断・無方針・「左翼的」装いに隠された受動的追随主義的態度も断固として排除されるべきものであった。(この派の部分の、このような態度は、七一年秋に到るまでまことに一貫している。)そして我々は、世界革命戦争・世界赤軍・世界革命戦線への飛躍を切り開く、前段階蜂起・蜂起軍・臨時革命政府を、我々の戦術として掲げた。この前段階蜂起は、機動隊を減し、首相官廷を占拠し、安保軍を引き出し、内戦—

命的な限界、弱点と誤りがあった。第一にそれは「中央権力闘争」論の急進民主主義的観念の限界の克服が焦眉の課題となった時、それを論理的或いは主観的飛躍によって「克服」し、それに現実をあてはめ、即座の実現を要求・期待するという仕方、この限界を徹底化し、その矛盾の解決を、空論的な急進的コスモポリタニズムの徹底化に求めたものである。第二にそれは、我々の階級的立場の曖昧さ、及び我々が立脚してきた一時期の運動の性格と限界、我々が主要に依拠してきた階級的基礎を真に対象化し、克服していくものではなく、逆にそれに拜跪し、徹底化するものであること。第三にその情勢認識(及びその観念)、戦術思想が、自己の思想的政治的立場を曖昧にした、即ち階級的観念、階級分析の観念の曖昧な、従って戦術の土台となるべき「一定の社会の、例外なく全ての階級の相互関係の総体を客観的につかむこと、従ってその社会の客観的な発展段階をつかむこと、又この社会と他の諸社会の相互関係をつかむこと……しかも全ての階級と全ての国が静態においてではなく動態において、

世界革命戦争を開始するというものであった。その政治的任務、それが何を組織するかについては、当初、全共闘、反戦を臨時革命政府へと組織し、ソヴェトをつくり出すとして、後には全共闘・反戦を(世界)革命戦線に組織すると主張し、蜂起の部隊は当初は共産主義突撃隊として、後には赤軍であり、それは前段階蜂起によって世界赤軍に成長すると規定した。国際的には日米同時前段階蜂起として闘うことによって、民族解放革命戦争を統合すると展望された。これらは「革命的昂揚から革命的情勢へ」、「フアンズム」——「休制間」戦争かプロ独——世界革命戦争か」という情勢認識と、「攻防の弁証法」、「攻撃型階級闘争」の戦術思想に裏打ちされていた。

我々のこのような戦術方針について、我々は今次の様にいうことができる。我々が秋の大会戦において断固として最前線に立って戦い抜こうとし、かつへ飛躍を徹底的に追求し、組織し、実現しようとしたことは全く正しかった。しかし、そのことを以上のような前段階蜂起として実現しようとしたところに、我々の致即ち静止の状態においてではなく、運動において、観察される」ことのないものであること、そして現実の階級闘争の一面を他から切り離して純化した、主観主義と力学主義・類型的見地に彩られたものであること。第四にこれらのことから自然発生的戦術の克服をめざしつつ、逆に自然発生的性を徹底化し、それに溶解していること。そのために小ブルジョアの革命性の自然発生的に融合する仕方で最前線に立とうとした。第五に以上から、我々を真にプロ独派として鍛え上げ、その独自性を明らかにしていくよりも、それを曖昧にするものだったのである。

問題は急激な政治的分解と革命化を生み出しつつある一部分の小ブルジョアジーのを主要勢力とする、戦線的急進的民主主義闘争の昂揚——飛躍をかけた大会戦に対する、プロレタリアートの戦術、プロレタリア党の戦術の問題であり、だから又そのことは、革命的左翼のプロレタリア党への飛躍を要求し、かつそれを核心としてこそ大会戦における夏の飛躍を烙印しえたのである。この昂揚の広さと深さ、そこには生まれ特徴

づけている階級的の政治的性格と諸傾向と意識性の状態を明確にし、又この昂揚に対する努力、諸階級・諸政党的態度、相互關係を分析し、プロレタリアートの任務を明確にし、プロレタリアートのどのような政治的進出をどのように闘い取るのかを鮮明にし、その上で直面する戦闘の性格と目標・軍事上の眼目、その政治的意義を明らかにすること。そして四・二八に既に萌芽として存在した精鋭部隊、強固な少数精鋭の戦闘部隊・非公然軍事組織を断固として組織すること（これが決してそれに過大な幻想と役割を付与することなく、そのバルチザン戦闘と堅固に組織された大衆的暴力闘争を結合してこの昂揚の最前線に立ち、敵警察力を一点において撃滅し、決起している大衆の進軍を援助し、導くこと。先進的労働者を確固たる思想性と組織性によって武装した強固な部隊へと鍛え上げ、その思想性と組織性・規律性・献身性・剛毅と堅忍さに裏付けられた戦闘性によって、先進的學生に対する指導的權威と統率力、教育者的役割を打ちたてること（しかし又将来の任務、進出すべき方向を見失わせることなく）。

性格をも正体不明のものにしかねないのだ。まさに党内闘争は、このへプロレタリアートの階級闘争の戦術として貫き実行しうる、自己の思想・政治・組織を徹底的に鍛え上げ、その課題に上せたのであり、この意味で秋の戦術問題は、思想・政治・組織問題と不可分であり、相互に規定しあっていた。

戦術問題から始まった党内闘争は、不可避的に組織問題を課題に上せることになった。秋の大会戦を真に結束してその最前線に立って闘い抜き、非合法党的基礎を打ち固め、強固な思想的武装と中央集権的組織性をもった戦闘組織へと高め上げ、同時に一層広汎な革命的諸活動を一層系統的に、一層頑強に、精力的に実行し、独自の組織陣型を、労働者階級を組織化していく真の組織者へと高め上げることが課題となった。これは既に六八年十・二一闘争以来、党活動の全体を統率し、責任を負う固く結束した指導の中核の強固な中央組織の建設、軍事委員会の組織化、破防法に耐えうる非合法的基礎の確立、更に権力の攻撃、資本のレッドパージ、諸政党的による攻撃の全重圧と闘い抜き、

決起している學生に、敵権力の暴圧に一層断固として闘うよう、その中に準備と計画性を持ち込み、かつ革命的労働者の戦列に自己の将来を見出させ、彼らの積極的創意性をこの戦列に結合させていくこと。この昂揚を利用して労働者大衆に精力的に働きかけ、組織し、帝国主義労働運動・現代修正主義・臍病な小ブルジョア民主主義潮流を徹底的に暴露し、闘争し抜き、労働者大衆の自己教育・成長を促進すること。と同時に又この昂揚にどんな過大な幻想もたず、小ブルジョア急進主義的革新傾向と自己を徹底的に分離し、それに伴陥することなく、自己の独自性を守り抜き鍛え上げること、と共に統一戦線戦術によって共同の勢力を強化し、彼らのプロレタリアートの側への移行を促進すること。これらを統一して、単一の体系だった戦術として実行すること、そのようにしてこそ、それはへプロレタリアートの階級闘争の戦術たりえたのであり、この観点なき戦術論議は、必然的に自己の階級的政治的立場を曖昧にし、又主観主義や政治目的の曖昧な力学主義に陥らざるをえず、遂にはその社会的階級的

ブルジョア社会―国家権力とその基盤の上に立つ諸政党的の非和解的対立を、革命的組織・革命活動として組織し、鍛え上げ、労働者大衆を系統的に組織し抜き、革命活動の拠点の戦闘のとしての地区組織―細胞の建設等々として日程に上っていた。これは強固に思想的政治的に統合された、中央集権的な堅忍不拔の組織者―戦闘組織の建設を軸とした正規の攻囲軍を組織することを、中央権力闘争―マッセンストの運動の型におきかえ、或いは解消してきた、従って戦闘団主義とサークル主義との動搖をたえずはらんできた。自然発生的、大衆運動主義的組織思想からの根本的転換を要求されていた。（かのソヴェト運動論の根本的弱点も又、的組織へ鍛え上げる、党建設、党的結束のための思想的組織的闘争を、運動の問題に解消していた点にあつた。）そしてこれは四・二八党争後にはさし迫った問題となり、このままではもはや秋の闘いとそれ以後に耐ええないという矛盾は、党内闘争として顕在化した。言うまでもなく党内闘争は党を統える泉であり、党内

闘争の回避は、党の曖昧模糊たる混沌状態と墮落をもたらす。だがしかし他方では、党内闘争が、党組織を、組織問題を、又その基底にある思想問題を、組織思想を對象化しえないならば、やはり又混乱と分解（真の分裂ではなく）をもたらすであろう。この時期の党内闘争は、秋をどのような立場からどのように闘い抜き、どのような飛躍と前進を闘い取るのかをめぐって、その一環に、それを一丸となって実行し抜く組織へとどのように鍛え上げるのか、旧来の組織をどのように変革し、高め上げるのかを押し出したのである。それは非公然軍事組織の組織化を直接の要にしつつも、決してそれにとどまらず、又組織機能や組織形態の問題に解消されない、党組織全体の変革の問題であり、組織的団結・組織生活・組織観の変革の問題であり、共産主義運動としての結末の問題であった。そしてこのことは党組織を革命の実践の核心に對象化し抜くこと、組織問題それ自身を根本的な思想・政治問題として對象化し抜くことを要求していた。ブンドのこの点での致命的弱点・欠陥——本質的には、大衆運動主義・小

の性格と内容の全体をつくりかえ、鍛え上げることと結びつきえないで、又そのような頑強な思想工作・思想闘争を組織的自覚的に組織し抜くことができないうで、又問題をたえず形態の問題として解決しようとする急進主義によって、水平主義と戦闘団主義に傾斜したのであった。そしてこれは更にパンフレット4において、世界武装プロレタリアートと、国際階級闘争の一切の赤軍建設への一元的集中・統合として理論的基礎を与えられ、後に水平主義と戦闘団主義の徹底化・組織的無政府主義への道を開いたのであった。

この戦術問題と組織問題と併行して、党内闘争は又政治的立場を根底から問い直し、ふるいにかけていさざるをえなかった。何故な闘争が真剣なものになると共に、一層明瞭な首尾一貫した政治的立場を要求するからである。革命的左翼にとって、革マル派の小ブル民族主義・平和主義の反戦反安保闘争の立場は問題外であったが、その大部分は安保粉砕・日帝打倒の曖昧な、漠然たる抽象的立場に終止し、沖縄奪還か日米共同前線基地化阻止かを争った。そして政府打倒は単な

ブルジョア個人主義・自由主義であり、それが一方ではサークル主義、他方では戦闘団主義として表現され、これに講壇的な理論主義が対応していた——は、党内闘争によって克服されるのではなく、逆に党内闘争に反映した。そして一方にブンド中間派の党内闘争の圧殺や回避と、経験主義的自己防衛と理論作業一般への解消としての、官僚主義とサークル主義・認識集団化を又ブンド右派のサークル主義的、自由主義的な解党主義を、他方に自然発生的力学と戦闘的気分に伴走した「紅衛兵型党内闘争」と、頑強な組織的な思想工作・思想闘争を曖昧化して戦闘への意志と、戦闘団形成に収れんした。半ば無政府主義的な戦闘団主義を生み出した。我々は地下軍事組織・戦闘突撃隊の組織化を軸にして秋の戦闘態勢を確立することを環にたへた革命——革命を何か遠い将来の漠然たるものとしてではなく、日々の党的実践の問題へと引き寄せ、革命的組織へと変革する——の追求という積極さと正当性をもちつつも、この環が、党の組織と活動の全般において、その思想・政治・組織生活全体を、その結果

お題目としてのスローガンか、現在の運動の延長上に漠然たる危機の展望として願望されるスローガンであった。それらは結局のところ、現存の体制の地盤の上で、種々の政策阻止闘争・個々の政治的要求闘争の徹底化の延長上に政府の崩壊・危機を展望し、革命を願望するものでしかなく、その意味で現体制の枠内での種々の反政府運動の急進主義的翼にとどまっていたのである。しかし六九年の闘争はその限界を踏みこえることを自然発生的に要求していたのであるが、革命的左翼の大部分は観念的な大言壮語や抽象的な解釈学か、政治危機への願望によってしか、自己の態度をあらわすことができず、この自然発生的性の中に溶解していた。

ブンドは六八年以降、これら種々の政策阻止闘争・個々の政治的要求闘争を、帝国主義の侵略・抑圧・反革命に対する抵抗闘争として特徴づけつつ、それらははらんでいる前進的攻勢的要素を、攻撃的政治闘争として政府打倒の闘いへと組織し、牽引し、高め上げること、その政治的立場をこれらの運動の頂点として「中

「中央権力闘争」の戦術でもって実現することを追求してきた。しかしそれも又最も急進的な反政府派にとどまっている限界が、四・二八闘争で明白となり、根本的な飛躍―脱皮が問われることとなった。現に安保粉砕をにかけて決起している大衆的反政府運動に、その最も戦闘的―革命的翼として参加し、闘いつつ、同時に自己の思想的政治的独自性を明確にし、急進民主主義的反政府潮流から自己を分離し抜くことが要求されたのである。その中でブント右派は再び政策阻止、個々の要求闘争の水準に自己を押し下げ、大衆の自然発生的意識に同化しつつ、それを空想的な、経済主義的なロマン主義によって意味づけ、小ブル民主主義へ純化した。ブント中間派は「反政府打倒・中央権力闘争」の立場に終止し、急進主義的反政府派にすぎないことを明白にした。

我々は「帝國主義政府打倒・臨時革命政府樹立―世界革命戦争」のヌローガンを押し出し、前段階蜂起の革命的戦術を主張したのである。それは巨大な転換、脱皮の始まりであった。何故なら、それは階級闘争が

と組織する原則的立場を確立すること。何故ならこのような階級の自覚し、組織された運動のみが、現存の体制そのものと真に対決しうるからであり、新たな革命権力を組織しうるからである。革命党は実際にその指導的の中核となつてこそ、その名にふさわしいものとなるからである。

第二に現実の階級支配の構造―国家権力の構造即ち現実の階級分析―国家権力と諸階級層の相互関係を明確にし、そこから我々が立脚し、おし進めてきた運動を対象化し、そのへ国際主義と組織された暴力を継承しつつ、同時にその部分性・抽象性を克服していき、労働者階級人民の階級闘争の一切の現われを、権力問題に統率し抜いていく立場へと鍛え上げていくこと。言いかえれば、原則的立場にふまえた日本革命の戦略問題―最小限綱領の観点を闘い取っていくこと。何故ならプロレタリアートの権力樹立は、情勢の危機や大衆の叛乱一般や単純な反権力主義ではなく、プロレタリア階級を権力主体へと組織し、高め上げることだからである。(そこに革命党の任務がある。)プロレタ

国家権力の構造を端緒的に把え始めたこと、そして我々がプロレタリア独裁樹立に向けて、確固たる戦略的立場に立って全ての闘いを系統的に組織し、統率し、統合し抜いていく潮流、自からプロレタリア権力を組織し、その中核となる革命党へと自己を鍛え上げねばならないこと、今やその一步を断固として踏み出すべきことを鮮明につき出したからである。しかし問題はまさにもなくここから始まったのだ。(これに対して「ソグエト運動」を対置して批判した部分は、自己が自己権力論の見地に立つ、自然成長的なサンデイカリストたることを暴露した。)

第一は、現存の体制、経済的政治的体制、現存の社会組織―国家権力と非和解的に対立し、それを打倒し、革命する使命と能力をもっている唯一の真に革命的階級を、現存の社会体制によって生み出されている社会的勢力そのものの中に見出し、この階級の真実の姿と運動を明らかにし、その運動がどのように新たに生まれつつあるかを対象化し、彼らの解放闘争の見地と立場にしっかりと立つこと。この階級を共産主義運動へ

リア権力の政治的中心たる革命政府を樹立することは、単なる政府の交代でない以上、どのような構造と実体をもつ現存の権力を打倒し、労働者階級人民大衆をどのように組織し、何を革命的に実現し、実行し抜くのかを離れてはありえない。

第三は国際主義について、反スタ主義の経済主義的な一國主義と、観念的な急進的コスモポリタニズムを克服し、アジアの革命国家―民族解放闘争とその指導政党を、国際共産主義運動―世界階級闘争の最前線として対象化し抜き、それとの結合を要におき、又日帝自立論を克服し、帝國主義・社会帝國主義に対する国際的運動の一部分として、国際主義的立場―日本プロレタリアートの国際的任務に基いて、自力更生の日本革命の実践に踏み出すこと。そして国際主義を具体的民族問題において鍛え上げること。このことはベトナム革命戦争に援けられて成長した日本の革命的左翼が、一方では世界の最前線の闘いを歪曲、過少評価することによって観念的な左翼日和見主義に陥ったり、国際主義を実際には否定し、自己を誇大視し、他方では日

本の労働者階級人民に真に依拠することを妨げ、外国の運動への依存と利用、それをもっての宣言と危殆待望論を横行せしめ、そしてまさに歴史的に具体的な民族問題において排外主義に事実上屈服し、総じて真に日本革命の實踐をおし進める障害となってきたからである。

事実、これら全ての問題は、革命的左翼の運動が、革命的階級の深部から、動しつづつある運動と、端緒的自然発生的に結合し始め、国際階級闘争との結びつきをつくり始めた中で、具体的に安保―沖繩問題、在日朝中人民―朝鮮中国「問題」、部落問題等としてつきつけられていたのである。これらは全て日本階級闘争の根幹に関わるものであり、又歴史的にもそうであった。国際主義と権力問題―党、階級の根幹に関わる問題である。

何故なら、これらは①決して帝国主義の政策の問題や一時的問題であるのではなく、その基礎に関わるもの、階級支配の構造―国家権力の構造の要に位置するものであり、②決して純然たる民主主義的要求―そ

期の運動、その階級性格、基礎、政治的性格の延長上にはなく、その根本的変革の問題であり、⑦日共現代修正主義、左右の小ブルジョア民主主義派から真に根本的に分離し抜き、それと対決する核心的問題だからであり、総じて真にプロ独派として自から鍛え上げる試金石の問題だからである。

以上からみれば、六九年における我々の「臨時革命政府樹立―世界革命戦争」は、その実現のために我々がどのような立場に立って、何を対象化し、どのような方向に進み出し、鍛え上げるべきかを曖昧にし、革命的左翼の現存の運動に拜跪し、その延長上に直接に実現しようとする事によって、真に我々の飛躍、脱皮を促進し、プロ独派として鍛え上げ、前進させていく道を開きえず、逆に政治的急進主義の徹底化に向かわせるものとなったのである。(この矛盾は七〇年代初頭に全面的に現われ出るものとなった。)

これらの事柄は、階級支配の基礎としての経済的支配・隷属に対する原則的批判を貫き、鍛え上げ、それからの労働者階級の解放―この経済的支配・隷属その

れも部分的な―に限定しうるものではなく、根本的に共産主義革命の問題であり、その条件を切り開き、官僚的警察的独裁との対決を鍛え上げるより根本的な民主主義的要求の問題であり、③決して一国の階級闘争の見地、日本労働者階級の民族的条件に拜した見地から抱えられうるものではなく、国際的階級闘争の見地、国際プロレタリアートの利益―日本労働者階級の国際的任務と社会排外主義との闘争の見地から抱えられるものであり、④抽象的なプロレタリアート一般、観念的なプロレタリアートなるものからは決して抱えることができず、労働者階級の具体的な状態、諸条件、支配の構造を把えて区別を明らかにし、その上で革命的融合・統一を闘い取る立場から抱えられるものであり、⑤運動の政治力学の観点、「敵は同じ」や単純な反権力の観点、或いは単なる運動の広がり、領域の広がり観点では決してなく、革命的左翼の根本的立場、思想的政治的立場、運動の根本内容―革命の主体、階級闘争主体に関わる問題であり、⑥従って革命的左翼が立脚してきた、歴史的に制約された一時

ものの麁絶の立場を、これに根拠をおきつつ同時に労働者階級の反抗を抑圧してそれを維持強化する階級支配の道具たるブルジョア独裁権力を打倒し、プロレタリア独裁を樹立する闘争へ、階級支配の一切の現われに對する闘争―階級闘争の一切の現われを統率し抜き、非合法党とそれを中核とする統一戦線として物質化・組織化し、鍛え上げ、蜂起・革命戦争を準備し抜く闘いへ踏み出すべきこと、そのような立場と結束と革命活動を鍛え上げるべきことを押し出したのである。その意味で我々は、問題を旧来の基礎の延長上に自然発生的に提起し、おし進めようとした点で党内党争に半ば勝利し、しかしこの基礎そのものを根本的に変革し、自からが提起した問題を自覚的に対象化し、鍛え上げる道を進みえなかつた点で、党内党争に半ば敗北したのである。このことが我々の分派結成の性格を特徴づけた。そしてこれは六九年の闘争の後に再度をいかにけられることとなったのであるが、我々は次に、我々の分派の基礎におかれた立場、我々の基本思想・政治的立場・戦術思想・組織思想を基礎づけたパンフレットの検討に移らねばならない。

第五章 パンフNO四について

自然成長論と主観主義の理論的基礎

我々には以上の前提をふまえて、赤軍派結成の思想的基礎におかれた、パンフ「赤軍NO4」の総括に入る。このパンフNO四は、一面では六九年秋前段階蜂起の方針に当初の漠然と表明されていた赤軍派の基本思想・政治的立場、戦術思想、組織思想をより明確にし、この方針に基礎を与えようとしたものである。従って六九年秋前段階蜂起の方針の総括は、その基本思想、政治的立場、戦術思想、組織思想の総括として、何よりもこのパンフNO四の総括となされねばならない。同時に又パンフNO四はこのような性格によって、以降の赤軍派の全実践活動の出発点、基礎をすえたのである。だから我々赤軍派の数年間の全歴史を総括することは、何よりもこのパンフNO四の総括を基礎としてなされねばならず、そこに我々の総括の立場、新たな出発点が打ちたてられねばならない。

思想に基づいて一つの立場を打ち出したのである。だから我々は次のように言わねばならない。この誤った基礎から出発しては、決して綱領を確立することも、党を建設することもできない。パンフNO四の見地は観念論であり、半ば無政府主義的な、自然成長論と主観主義の理論である。この理論に導かれた実践は破綻を約束されていると。そして我々の実践的な敗北と破綻は、この理論の破綻をも徹底的に暴露したのであった。従って我々はこのパンフNO四の基本思想・基礎的立場そのものから克服しなければならぬのである。

△一▽ パンフNO四の積極性について
パンフNO四は何を対象化し、何を明確にしようとしたのか、その積極性はどこにあるのか。我々はそれを次の三点に要約して把える。第一は、世界プロレタリア共産主義革命の始まり、発展、その現在の時徴である「ブロック階級闘争を単一の有機的左世界プロレタリア運動として統一的に把え、その到達点の特質として明らかにし、実践的立場を確立すること、或いはそのように把え、明らかにする自己の立場を確立する

事実、パンフNO四は「綱領確立のために(1)」と題されている。それは我々の運動、党建設に綱領的基礎をすえ、確固たる党的立場を確立しようとしたものである。第二次ブンドがもっていた、最も原則的基礎的立場の曖昧さ、共産主義運動の原則的立場、党的立場の曖昧さ、現存する階級闘争の傾向性を抽出し、その推進力として、従って現存の運動の枠内でのその最左派へゲモノーとしてしか党建設を進めることのできなかった弱点が、現実の階級闘争の発展自身によってつき出され、暴露された時、それを克服し、確固たる基礎と立場をすえるものとして、このパンフNO四は提起されたのである。

しかし結論から言えば、このパンフNO四はその積極的意図にかかわらず、まさにその最も原則的問題において誤っており、その根本的基礎を根本的に誤ったものとして「確立」したのである。誤った基礎、基本ことである。第二は、この時期にプロレタリア運動の内部から登場し、それを支配している最大のプロレタリア的潮流であるスターリン主義―現代修正主義と、それに対する反対派としての反スター・トロツキズムに対する批判の立場を確立することである。第三に、国際階級闘争の総括と現代帝国主義の経済的・政治的特徴、つげによって、今日の国際的な大戦争と権力闘争の性格を明らかにし、今日の全ての革命闘争が単一の世界プロレタリアート独裁をめざす世界革命戦争の実現へ統率・統合されていかねばならないことを明らかにしようとしたのである。ブンド七回大会との関連で言えば、第一の点は「三ブロック階級闘争と国際第三潮流の建設」がもっていた自己的立脚点の曖昧さが、現実の世界階級闘争の発展自身によって暴露された弱点を世界党建設への立場として克服しようとしたものである。第二の点は、スター反スター「過度期社会論」とそれに表明される立場を「民族共産主義―経済主義―一國主義革命路線」として批判し抜く観点を、第一の観点との結合によって発展させようとしたものであ

る。第三の点は「世界同時革命」の内容の無規定性、抽象性、そこからする危機論（危機と階級闘争の國際的性格と形態）波及結合形態論への傾斜を、戰略目標の明確化によって克服しようとするものであった。

我々はこれらの志向性の積極性を承認することができ。しかしにもかゝらず、それはブンド七回大会路線の弱点・限界を真に克服するのではなく、むしろそれを徹底化する仕方になされていること、そしてその中に七回大会路線がもっていた具体性をも押し流してしまったことである。その根拠は、ブンド七回大会路線がもっていたその根本的基礎の曖昧さ、不明確、弱点が明白にされ、その克服が要求された時、パンフNO四はその根本的基礎を確立しようとしたにもかゝらず、まさにそれ自身を、かの弱点を一層徹底化して、非マルクス主義的觀念論として、根本的に誤ったものとして「確立」したことである。だから、このことを根本的に総括し、克服し抜くことなしには、積極性一般の継承はありえない。パンフNO四の誤りはその基本思想にこそあり、我々はその克服から始めねば

であり、この運動の諸条件を「現に存在している前提」すなわち資本主義そのものの中に見出し、共産主義運動の到達目標を明らかにするのである。そして「現実の運動」とは、資本主義的奴隷制の下に隷屬させられ呻吟するプロレタリアートが、不可避的に資本主義社会への反抗を増大させ共産主義革命の不可避性を明らかにしていくこと、共産主義運動は、このプロレタリアートそのものからする資本主義批判||現実の階級闘争から離れてはありえないこと、ただそれは「資本論」によって確立された科学的な原則的資本主義批判に基礎づけられることによって、労働者階級の苦悩、呻吟の眞の内容と根柢を、階級対立の眞の内容、彼らの自己解放のための物質的その他の諸条件を、彼らの歴史的使命と役割を、この階級闘争の目標を明らかにし、現存の階級闘争そのものの中にあって、この目標に向けた闘いとして目的意識的に組織し、系統づけ、統率し抜き、「運動の未来を代表する」科学的共産主義運動となることである。（そしてこれは実践的には権力問題に対する態度を核心にして鍛え上げられる

ならない。

△二√ パンフNO四の誤りについて①

パンフNO四の誤りの第一は、現代世界の歴史的||具体的階級闘争を、史的「唯物論」として「原理」的に体系化・哲学化しようとする觀念論である。パンフNO四は、その思想を「共産主義とは、実在としてのプロレタリア人民が、資本主義の否定的矛盾的契機||階級闘争において、歴史的（過程期）場所的実践の弁証法を通して展開し続けプロレタリアとその党が世界プロレタリアートに成長し続ける過程として把握され、実践されるのである。」（五頁）と述べている。これが、ドイツ・イデオロギーの「共産主義とは我々にとって確立されるべき何らかの状態・現実をそれに適合させるべき何らかの理想ではない。我々が共産主義と名づけるのは今の状態を廃棄する現実の運動である。この運動の諸条件は現に存在している前提から生まれてくる」の「把握直し」として主張されている。だがド・イデで「今の状態」というのは、経済制度とその土台の上にそびえ立つ政治的イデオロギーの上部構造

のだ。||眞の意味での階級闘争としての、プロレタリアートによる政治権力の獲得に向けた政治闘争）

だがNO四のこの思想は、プロレタリアートの組織形態・闘争形態・イデオロギー形態、総じて團結形態が、何か一つの原理（歴史的实践の弁証法）に沿って、自立的に発展していくかの如く主張されている。いや、現実の階級闘争自身は、この原理の自立的発展・展開に買かれ、むしろこの発展・展開の場として把握されている。この見地は第二章「世界武装プロレタリアートへの歴史的成熟」の中でも、更に第四章で「一層体系的に買われている。これは藤本進路「革命の哲学」に依拠したものであるが、プロレタリアートの階級闘争を何かプロレタリアートの「内的矛盾の原理」の展開（プロレタリアートの本質と形式の矛盾の自己展開・自己疎外・自己止揚を通して本質を実現していく過程）と、いやプロレタリアートを現存の社会関係・階級関係、その基礎部分である物質的關係・生産様式から抽象してそのように指定すること自身、さか立ちした觀念論であり、唯物史観と反対のものである。我々は歴

史的に実存する階級・階級関係・階級対立とプロレタリアートの階級闘争を、ただそれを基礎づけている経済的基礎からその真実の内容を明らかにし、その目標とそのために必要な条件を明らかにするのであり、階級闘争の発展について具体的に総括しようとするものであり、そして目的に向けて、労働者階級の闘争の一切の現われを統率し、その道を切り開くために、何をなすべきかとして問題をたてるのである。パンフNO四のこの見地は小ブルジョア的な「主体的唯物論」の一形態であり、結局のところ時々の階級闘争の傾向性を抽出して、それを「原理的・哲学的に」意味づけ、それに組織形態を付与して実体化し、そこに共産主義の過程の実現・成長を見出そうとするものとして、自然成長論・主観主義と母胎論の根拠である。(こゝではそもそも「プロレタリアートの社会革命」という見地がないのである。)

第二に、パンフNO四のこの見地は、何よりも以下の点に理論的に基礎づけられ、表明されている。

とに存在する。にもかゝらず、資本制生産とその諸関係が国民経済に基礎をおき、かつ市民社会がブルジョア国家権力に総括されることにおいて、プロレタリアートはその別の側面として擬制的に国民的、民族的であり、同時にそれ故に、被支配的階級なのである。」

(2)「プロレタリア世界革命の歴史的、経済的基礎は以下である。母体たる資本制生産から形成される過剰な生産力が、自らの生成そのものである国民経済の生産過程と生産・流通諸関係を、及び私有財産制度を維持する国家とその権力に総括される上部構造の諸関係をこえ自律的に打ち壊さんとする要求をもっていくのに対して、ブルジョアジーは自からの支配階級としての存立の基礎を国民経済―私有財産制度―これを総括する国家権力に置くが故に、かゝる資本の世界性に対して擬制的にしか応えられない。それ故、ブルジョアジーは資本―資本制生産―過剰生産力の要求に対して、擬制的に世界的たらし、一時的に解決せんとする。即ち、他国の国民経済と国家への侵略を通じた世界市場の占有と世界の政治的支配を、プロレタリアート

(1)「この唯物弁証法的な階級闘争の歴史的法制関係を貫く前提とは、資本主義時代以降においては、ブルジョアジーとプロレタリアートが、世界市場成立と一体をなす国民経済を基礎とする市民社会(ブルジョア社会)の内、資本制的生産過程―流通過程の関係を基礎とする分業諸関係を基底にもつ二律背反的關係の土俵の内で闘争することである。更に、この二律背反的關係の特質は、ブルジョアジーが世界市場を前提としつゝも、これは国民経済―市民社会の総括としての国家を媒介とした世界性でしかありえない。(その限りではブルジョアジーは経済的範ちゅうの人格的表現としては世界的でありながら、経済―政治の実践総体においては一国的であり、それは別の側面、即ち支配階級としてあることを意味する。)という限界性を有するのに対して、プロレタリアートは国民経済が世界市場成立と一体となって成立し、かつ、世界市場を前提として成立することにおいて、もともとその物的姿態としての労働力商品が世界的であり、世界性をもつことにおいても自由で普遍的で、世界的であるというこ

の世界性を一層擬制的、一国的・民族的・国民的枠内におしとどめることを、この両者を一体的に貫徹し、世界支配民族(国家)たらしとするのである。かゝる一時的・擬制的解決こそが反革命なのである。かゝる資本と資本制生産関係との根本的矛盾の擬制的な外延的世界化(経済的、政治的な他民族、他階級抑圧、その最大なものとしての植民地化、領土占有)が生成する矛盾は、これら諸矛盾に対して、プロレタリアートのその擬制的な国民性、民族性、被支配性をこえたその普遍的な姿として結合されたプロレタリアートとして登場させ、成長させる。……それ故プロレタリア革命はただ唯一の世界革命である。又社会主義・共産主義も、ただ世界的存在としてのみ成長するのである。」

(以上パンフNO四、P三―五)

これは、いわば共産主義運動の最も原則的立場・観点として主張されている。第二次ブンドにおける帝國主義論争から発展した過度期世界論が、多分に三プロク階級闘争としての世界階級闘争の現実把握と、(現代)帝國主義論と危機論―運動論に終止し、階級闘

争の経済的基礎に対する階級的批判と共産主義革命についての原則的見地に基礎づけられていないこと、そのことがたえず党的立脚点を曖昧にし、思想的動揺と過渡期世界論自身のぐらつき——一方で観念的体系化の傾向と、他方で自然成長的な戦術主義的傾向を生み出してきたこと、まさにこれらの弱点を克服して、原則的基礎をすえるべく、これは主張されている。

(このことは第二節④—P 6 上段—でとくに強調されている。)

この混乱とスコラの様相をおびた主張を整理すれば、次のようなことである。(1)ブルジョアジーは一国籍・民族性を本質的屬性とし(国民経済と市民社会の総括としての国家)、擬制的に世界的であり(世界市場)、プロレタリアートは世界性を本質的屬性とし(世界市場と労働力商品の世界性)、擬制的に一国的・民族的である。そしてブルジョアジーの本質||一国籍・民族性が、プロレタリアートを擬制的一国籍・民族性へと制約し、その本質の実現を制約している点で、ブルジョアジーはプロレタリアートを支配している。このブ

あろうか。いかにもマルクスマレーニン主義の「止揚」ではある。こゝには資本主義とブルジョア社会の発展行程、その本性を暴露し、ブルジョア階級とプロレタリア階級の歴史的地位・存在諸条件・演じている役割、階級支配と階級対立の非和解性、その発展を示し、プロレタリアートの社会革命の基本的内容的歴史的意義とその物質的等の諸条件、そのためのプロレタリアート独裁の不可避性と意義を明らかにすること、そして共産主義者の原則的任務を明示する、といった事柄は何一つ含まれていない。これは小ブルジョアの眼からみた、プロレタリアートの階級闘争の観念的解釈に他ならない。

たとえばこれとポリシエヴィキ綱領を対比してみると、一目瞭然であろう。

プロレタリアートの解放運動はずっと前から国際的な運動になっていること、我々はこの運動の一部隊であり、全世界の共産主義者は同一の終局目標を追求すること、運動の終局目標は、ブルジョア社会の発展行程によって規定されていることをふまえて、資本主義

ルジョアジーの内部矛盾とプロレタリアートの内部矛盾、両者の展開と相互二律背反的關係、被制約の關係が階級闘争である。(2)しかし資本制生産から形成される過剰な生産力が、ブルジョアジーをして世界市場の占有と世界の政治支配、すなわち擬制的世界性へと向かわせ、この擬制的外延的世界化が、プロレタリアートの擬制的一国籍・民族性をこえた世界性を登場させ、成長させる。これがプロレタリア世界革命の歴史的、経済的基礎であり、プロレタリア革命とは、この制約—被制約關係を逆転させ、自己の本質的世界性を實現することであり、だからそれはただ唯一の世界革命である。(尚第二章のテーゼも又こゝから導かれていたのであるが、それは又後で検討する。)これが「唯物史観の領域で指定される階級闘争の性格、革命と共産主義の成長の在り方」||「原理」、「共産主義とは……プロレタリアとその党が……世界プロレタリアートに成長し続ける過程」という歴史的场所的実践の弁証法の基礎として主張されているのである。

これは又何という「階級闘争史観」「唯物史観」でブルジョア社会との本性を次のように特徴づけている。

(一)このような社会の主要な特質をなすものは、資本主義的生産關係にもとづく商品生産である。この生産關係のもとでは、商品の生産及び流通の手段の最も重要な、著しい部分が少数の人間からなる階級に属しているのに、他方、住民の圧倒的多数は、プロレタリアと半プロレタリアからなっており、彼らは、その経済状態にせまられて、常時或いは定期的に自分の労働力を販売することをよぎなくされている。即ち資本家の雇い人となって、自分の労働で社会の上層階級の所得をつくり出すことをよぎなくされている。

(二)技術の不断の改善が、大企業の経済的意義を増大させる一方、独立の小生産者を駆逐し、彼らの一部分をプロレタリアに転化し、残りの部分についてもその社会||経済生活に占める役割を縮少し、そこゝで彼らを資本に対する、多かれ少なかれ完全な、多かれ少なかれ明白な、多かれ少なかれ重臣的な従属に陥し入れるにつれて、資本主義的生産關係の支配分野は増々拡大する。

(三)この同じ技術上の進歩は、その上、商品の生産及び流通の過程に婦人労働と児童労働を増々大規模に使用する可能性を、企業家に与える。しかも他方では、それは、労働者の生きた労働に対する企業家の需要を相対的に減少させるので、労働力に対する需要は必然的にその供給に立ち遅れる。その結果、資本に対する賃労働の従属が増大し、その搾取の度合いがたかまる。

(四)ブルジョア諸国の内部におけるこのような事態と、世界市場におけるそれらの諸国相互のたえず激化していく競争とは、たえず増大する数量で生産される商品の販売を、増々困難にする。過剰生産は、多かれ少なかれ鋭い産業恐慌となつて現れ、恐慌のあとには多かれ少なかれ長びく産業沈滞期が続くが、この過剰生産は、ブルジョア社会において生産力が発展していくことの不可避の結果である。恐慌と産業沈滞期は、それはそれで、小生産業を更に一層零落させ、資本に対する賃労働の従属を更に一層深め、労働者階級の状態の相対的悪化に、時には又その絶対的悪化にも、一層急速に導いていく。

の計画的組織化を実施することによって、諸階級への社会の分裂をなくし、こうして、抑圧されている人類全体を解放するであろう。なぜなら、それは社会の一部分による他の部分の搾取の汎ゆる形態を終らせるからである。

(八)この社会革命の不可欠の条件をなすものは、プロレタリアートの独裁である。即ち、プロレタリアートに搾取者の汎ゆる反抗の鎮圧を可能にする政治権力を、プロレタリアートが闘い取ることである。

(九)プロレタリアートにその偉大な歴史的使命を果す能力を獲得させることを自己の任務とする国際共産党は、プロレタリアートを全てのブルジョア政党に對立する独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級闘争の一切の現われを指導し、搾取者の利益と被搾取者の利益とが和解しえないように對立していることをプロレタリアートの前に暴露し、きたるべき社会革命の歴史的意義と必要な諸条件とを彼らに對して明らかにする。それと同時に、国際共産党は、その他の勤労被搾取大衆の全体にむかつて、資本主義社会では彼らの

(五)こうして、労働生産性の増大と社会的富の増加とを意味する技術の改善が、ブルジョア社会では、社会的不平等の増大、有産者と無産者との隔たりの拡大、勤労大衆の増々広汎な層にとつての生活の不確かさ、失業と様々な種類の困窮との増大の条件となる。

(六)しかし、ブルジョア社会に固有なこれら全ての矛盾が増大し発展していくにつれて、現存の秩序に対する勤労被搾取大衆の不満も又増大し、プロレタリアの敵と結束が増大し、自分達の搾取者に対する彼らの闘争が激しくなる。それと同時に、技術の改善は、生産及び流通の手段を集積させ、資本主義企業における労働過程を社会化することによって、資本主義的生産関係を共産主義的生産関係に代える物質的可能性—即ち、プロレタリアートの階級運動の意識的表現者である国際共産党の全活動の終局目標である、あの社会革命の物質的可能性を、増々急速につくり出していく。

(七)プロレタリアートの社会革命は、生産及び流通の手段の私的所有を社会的所有に代え、社会の全成員の福祉と全面的発展とを保障するために社会的生産過程の地位は絶望的であり、彼ら自身を資本の圧制から解放するには社会革命が必要であることを、明らかにする。労働者階級の党である共産党は、勤労被搾取住民のすべての層を、彼らがプロレタリアートの立場にうつってくるかぎり、自分の隊列に呼びいれる。

そしてこの綱領では続いて、パンフNO四では先の引用の(2)において混乱して一面的に提起されている、資本主義の最高の発展段階としての帝国主義と、社会革命の時代への直接の移行とが、正確に、首尾一貫して、簡潔に特徴づけられている。我々がどちらの見地に立ち、堅持しなければならぬかは全く明瞭である。

パンフNO四のこの一節ではこの最も基礎的の原則的内容をなす事柄が、「資本制的生産過程—流通過程の関係を基軸とする分業諸関係を基底にもつ二律背反的關係の土俵の内で闘争する。」というような一言で片付けられている。資本主義的生産関係にもとづく商品生産が「資本的生産過程の関係を基軸とする分業諸関係」と述べられていることの意味は、生産関係を分業

一般に解消してしまうことである。こゝでは分業諸關係に力点がおかれ、その中に貫かれてある所有—生産關係を軸にして、生産様式として扱えられるのではなく、分業—一般の告発となっており、資本主義的所有—賃労働制をぼやかしてしまっている。だからそこから階級支配を明らかにすることはできない。(階級支配の最深の根柢は何よりも所有の問題にこそある。だからこそプロレタリアートの階級独裁について、レーニンは次のように言っているのだ。「勝利したプロレタリアートは所有(—資本主義的所有と地主的所有)を廃止し、これを徹底的に破壊したが、こゝにこそ(プロレタリアートの)階級支配があるのである。何よりもまず所有の問題にこそあるのだ。所有の問題が実際に解決された時、そのことによって階級支配が保証されたのである。」「ただ階級支配によってのみ、所有の關係と、どの階級が上位にたつかの關係がきまるのである。」「階級が互いに交替してきた時、それらは所有に對する關係を変えてきた。」「次に「二律背反的關係の土儀」とはブルジョア社会のこととして述

会の内にプロレタリアートの社会革命の物質的諸条件がつくり出されていること等々が全く背後におしやられている。ブルジョア社会は、「土儀」として、超階級化されているのだ。

これは又「市民社会の総括としての国家」と一対にになっている。国家が階級対立の非和解性の産物・表現であり、搾取階級が被搾取階級をその鎖の下につなぎとめておく暴力手段であること、資本制生産様式の成立過程である本源的蓄積過程自身、絶対主義権力の暴力を根本的楨杆・契機としておし進められたこと、そしてブルジョア国家権力が、資本家階級に對する経済的支配・隷屬化に根ざしながら、資本の蓄積と共に増大する非和解性の激化・労働者階級の反抗の増大を抑止し、この支配・隷屬化を維持・強化する暴力手段であること、このことを「資本性分業社会の総括としての国家」という曖昧な概念でおきかえることは、国家の階級性・暴力的本質を曖昧化し、プロレタリア階級がブルジョア階級・その支配を打倒し、自己の解放を闘い取るには、まずもってブルジョア国家への隷屬を

べられているが、問題はブルジョア社会の本性を暴露することなのだ。(一体何が二律背反的關係なのか?)

更に「二律背反的關係の土儀の内でも闘争する」というのは、何かまず抽象的にブルジョアジーなるもの、プロレタリアートなるものがあって、それが「二律背反的關係の土儀の内でも闘争する」というように述べられている。だが事柄は逆に、資本主義的生産關係に基づいて、ブルジョアジーとプロレタリアートを、彼らの歴史的地位・役割・前者の後者に對する支配を明らかにし、資本主義的蓄積と共に激しくなる後者の前者への隷屬の深まり、両者の間の深淵の拡大、階級対立の非和解性の激化、プロレタリアの反抗の増大を示すことなのだ。にもかゝらずこゝでは、ブルジョア社会が国民経済を基礎とする市民社会と一言で片付けられており、それが諸階級—とくに二大階級に分裂しており、ブルジョアジーがプロレタリアートを賃金奴隷として支配しており、両者の階級利害の対立は非和解的であり、プロレタリアの闘争の激化が不可避であり、「かくされた内乱の体系」であり、と同時に又この社

たちきり、自己の独裁を樹立し、それをテロとして、その経済的基礎そのもの、廃絶へ進めねばならないことを曖昧にするものである。

最後にパンフNO四のこの一節での、労働力商品とということにプロレタリアートの基本的特徴をみることは、資本家の眼から労働者を眺めることであり、(だからその世界性とは労働力移入のこともあろうか)、商品の物神性に幻惑されて真の階級關係を見失うものである。労働者と資本家の關係を平等の商品とみなし、生産過程を資本と労働力商品の二商品間の価値關係とみなし、所有と労働の分離のたえざる再生産を、そこからする流通の仮象を、資本關係とその拡大再生産を、資本の蓄積の発展と共に深まる労働者階級の貧困、隷屬、抑圧、磨滅、搾取の量の増大を陰弊し、まさにそうすることによってブルジョアジーとプロレタリアートの階級矛盾を、「世界性」と「国性」なる観念的抽象物の中に見出さざるをえなくなるのだ。

第三にパンフNO四のこの一節は、NO四の思想の

核心たる「世界性」「一國性」なる二大階級の形而上学的分類をスコラの解釈学として展開しているのだが、その主要な誤りを指摘し、この思想が自らの論理によって自己矛盾しており、もろくもついでえさることを指摘しておこう。

「ブルジョアジーは経済的範ちゅうの人格的表現としては世界的でありながら、経済—政治の実践総体においては一國のであり、その別の側面即ち支配階級であること」

ブルジョア階級の国際的性格は、その経済的支配が国際的であるからであり、それは、資本主義的生産様式の世界的地位・意義、文明諸國でのこの生産様式の支配・その国際的性格、そして交換の発展が民族的障壁を打ちこわし、諸民族相互間の全面的交易と全面的依存を生じさせ、世界市場の下に緊密な結びつき、従属をつくり出し、それら全てからの搾取を可能ならしめたこと等によっている。しかし資本主義的生産の無政府性、個別性、たえざる競争と発展の不均等性は、ブルジョア階級内部にたえず、競争・対立・抗争をつ

る。なぜならこゝでいう商品の「世界性」とは、人間の諸労働の抽象的人間的労働としての共通の性格の反映、対象的仮象であって、その本質においてもプロレタリアートの特殊性を示すものではないからである。商品の「世界性」を根拠にプロレタリアートに「世界性」なる属性をおしつけるならば、商品集積としての資本にもかゝる属性を付与せねばならず、そうなればこの一節（いやNO四）の思想の核心はもろくもついでえさることになってしまう。又プロレタリアートが被支配階級であるのは、「自分の労働力以外に何の財産ももたないプロレタリアートが、対象的労働条件の所有者となつてブルジョアジーの奴隷（賃労働者はある時間無報酬で資本家のために従つて又剰余価値にたかる資本家の伴食者達のために）働く限りで、自分の生活のために働くこと、即ち生きることが許されているということ」として経済的に支配され、隷属せしめられていること、更にブルジョア国家に隷属せしめられ、それによって打ち固められているからである。

くり出す。と同時にブルジョア階級は国家権力を手中にすることによって、自己を階級として組織し、政治的にも支配する階級となり、この政治的支配によって、自己の経済的支配を維持・強化し、打ち固めているのである。（だから前記のブルジョア階級内でのたえざる競争・対立・抗争は、この国家権力内部でのブルジョア階級の諸集団間のそれとして反映せざるをえず、更に又ブルジョア諸國間のそれをつくり出す。）

「プロレタリアートは、国民経済が世界市場成立と一体となつて成立し、かつ世界市場を前提として成立することにおいて、もともとその物的姿態としての労働力商品が世界的であり、世界性をもつことにおいても自由で普遍的で、世界的である。……プロレタリアートは……暴制的に国民的・民族的であり、同時にそれ故に被支配階級なのである。」

世界市場のみからプロレタリアートの「世界性」を根拠づけるのは全く一面的であり、現象論的である。更に（労働力）商品の「世界性」をもってプロレタリアートの「世界性」を根拠づけることは全く誤つてい

プロレタリアートが国際的階級であるのは先に上げた事柄によって根拠づけられている。そしてそのことからプロレタリアートがどこにおいてもブルジョアジーに経済的に支配隷属せしめられ、彼らの地位・状態と利害はどこにおいても本質的に同一であり、相互の間に対立する必然性を何一つもたず、根本的利益の実現は全く緊密に相互に依存しあつており、たえず共通の敵と闘わねばならない。更にプロレタリアートは、資本主義的生産関係が必然的にそれにとって代わられる、未来のより発展した生産関係、より高度な型の社会経済制度を代表する階級であり、一切の搾取・隷属・支配・抑圧を廃絶し、人類全体の解放としてのみ自己を解放する階級であり、従つて又世界の諸國家への分割及び國家そのものを廢絶・死滅しうる階級であり、そのような社会的力能が大工業に最も特有な産物として培われている。

以上から出てくる結論は、プロレタリアートがブルジョアジーを、彼らの支配をその根底から打倒し、廢絶し、一切の隷属の基礎である経済的隷属からの解放

を達成するのは、ただ世界的にのみ実現されるということである。そしてプロレタリアートの闘争がこれに向けて前進するためには、彼らはまずもってブルジョア国家への隷属を打ち切り、ブルジョアジーの政治的支配・階級独裁を打倒し、自己の権力を打ちたて、自己の独裁をテコとして資本主義的所有を廃止し、徹底的に破壊しなければならぬ。権力獲得に向けた闘争となつてこそ、真に階級闘争となるのである。しかし更に、プロレタリアートの闘争がその真の解放を実現していくには、全世界に自己の独裁を打ちたて、単一の権力に組織し、そうして真に私的所有を廃絶し、搾取をなくし、社会的生産過程と分配の意識的計画的組織化、世界的生産力として組織しなければならぬ。万国のプロレタリア団結せよ!!

パンフNO四の引用文は、一貫して、個々のプロレタリアに「世界性」なる属性が生来そなわっているかの如き観点にたっている。だからこそ「共産主義とは……プロレタリアとその党が世界プロレタリアートに成長し続ける過程」とか「プロレタリアートは自己の

析(小歴史)をたて、それを過渡期世界にも適用すべきことを主張している。

だがこれまで明らかにしてきたように、唯物史観の領域―「世界史的段階におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの闘争、その関係の性格、革命と社会主義・共産主義の成長の歴史的在り方の措定」とは、何か階級闘争の発展の「原理」「原理的法則」を史的唯物論として措定し、この「原理」に泊つて、或いはこの「原理的法則の実現」として、階級闘争の「世界史的段階を措定」しようとするものである。言いかえれば、「世界の本質規定」として、プロレタリアートの「本質と擬制の内的矛盾」の自己疎外態―本質の実現がどのような段階にあるかを措定しようということである。(そこからこの自己疎外態の自己止揚―本質の更なる実現という「変革的立場」が導き出される。従つて(四)の「より特定の歴史的現実的な資本主義と資本主義国家の分析を通したブルジョアジーとプロレタリアートの関係||現実形態的分析」が、(一)とは無関係を全く外的なものとして、原理が展開するための外

矛盾(本来的世界性と擬制的一国性との矛盾)を深化せしめ、普遍的世界プロレタリアートへの止揚の芽を獲得する」(P7)といった、この生来的属性の開花として共産主義を把える深淵な思想が生まれてくる。「労働の社会的形態・労働の社会的組織・又は別の言葉でいえば社会的労働に参加するにあつたての人々の間の関係」(レーニン)ではなく、まさにそれが商品生産社会にあつては商品交換の形式を通して現象するが故に、この商品の物神性に幻惑されて、労働生産物そのものうちに在る属性があるかの如く把えられ、更に個々の労働者の肉体のうちにそれを発見するのである。(ここから、世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まつたということも、「世界プロレタリアートが現実形態的にプロレタリアートとして登場し」(P5)というように把えられる。)

第四に、パンフNO四は、一般に革命論のための前提内容と接近方法の叙述の仕方として、(一)唯物史観の領域(大歴史)(二)現実形態的分析(中歴史)(三)現状分析的条件・制約条件として把えられる。そして(四)の「特定の場所におけるブルジョアジーの攻撃の在り方、プロレタリアートの対応の在り方の措定||現状分析」は具体的な階級分析、諸階級相互関係、現実の階級闘争の総括・権力問題、そして階級闘争の情勢として明らかにされるのではなく、現象的な権力と「人民」の力学的関係としてしかなされぬ。(そしてここまではプロレタリアートは世界性を意識した戦闘性ということに解消される。)

以上のことからこの(八)方法論体系√は一つの形而上学的体系、パラパラの積木細工たることを暴露する。(しかもこれはいつの時代にも適用され、この方法による一時代の単一的な包括的な特徴づけ、というより論理体系をもって綱領とすべきことが主張される。)これは結局のところ、首尾一貫した階級の立場に立つて、世界の歴史の唯物論的な理解と、現代の経済・政治状態の唯物論的な評価を下し、現実の具体的な階級分析・階級闘争の情勢の分析によって、我々の目的と任務と具体的な実践の指針を導くことは決してでき

す、たえざる内的矛盾とぐらつき、動搖に導き、自然成長性と主観主義に彩られた方針・戦術、そのための組織形態へと一面化してきたのである。というより六九年秋以降の、一定の運動の一時期の傾向性を抽出して意味づけし、それに組織形態を与えて実体化し、闘争戦術でそれを発展展開するという我々の実践に、この原理の発展・実現としての意味を与え、情勢としての根拠を付与し、そうすることによってこの実践を規定づけてきたのである。この「原理」・方法論と具体的実践を切り結ぶところに、第二章の二つのテーゼがあった。

△三V バンフNO四の誤まり②

第五にバンフNO四は以上の観点から、過渡期世界の階級闘争の歴史的普遍性(普遍的原理)として三つのテーゼを与えている。この三つのテーゼは、△二Vで我々が検討したところからふえんして要約すれば、次の様なことである。第一次帝国主義戦争とロシア革命は、ブルジョアジーの擬制的外延的世界化の矛盾に媒介されて、プロレタリアートの本質的世界性が現実

過渡期世界とは、プロレタリアートの本質の自己疎外態(対象的形態)であり——これが唯物史観的領域での「本質規定」というわけだ——、そこでの本質と擬制との矛盾——「現実形態」的分析を、「現代過渡期社会」と「現代帝国主義」の、各々の一國性と世界性の矛盾として行ない、その相互関係の分析——現状分析として、「ブルジョアジーの攻撃の在り方——局地的永続反革命侵略戦争」と、「プロレタリアートの対応の在り方——この自己疎外態を自己止揚し、本質の完全な実現へ到らしめる形態としての、世界党——世界赤軍——世界革命戦線——この実現が共産主義の実現なのだ——と、それを実現していく運動形態としての世界革命戦争」という結論が導かれる。

何という唯物弁証法・唯物史観・階級闘争史観的領域での把握であろうか——何という観念論的・スコラ的・解釈学——

これは第二次ブンドの、根拠地国家出現→攻撃型階級闘争、帝国主義の侵略と反革命の矛盾、プロレタリアートの高次な自然発生性、世界党——世界赤軍——世界

化され始めたものであり(受動型革命)、ロシア革命によって始まった過渡期世界は、プロレタリアートの本質——世界性が「現実形態」化し始めた(世界武装プロレタリアート)ものとして、制約——被制約関係が部分的に逆転し(逆制約)、プロレタリアートの能動性・攻撃性が現われ出(攻撃型革命)、プロレタリアートとブルジョアジーの両者の内的矛盾の性格は変化した。プロレタリアートの場合はその本質——世界性の「現実形態」化自身が、擬制的な一國的民族的形態を強制されていることであり、ブルジョアジーの場合はその本質の一國性・民族性が、(プロレタリアートの世界性の「現実形態」化のために)擬制的世界的世界性を増々強めざるをえないことである。(それはそれでプロレタリアートの世界性を増々強める条件として。)——から「世界武装プロレタリアートの高次の自然発生性」はたえず生み出され、このプロレタリアートの内的矛盾を展開せしめ、その展開を通して世界武装プロレタリアートの成長を実現していく団結形態・組織形態が世界党——世界赤軍——世界革命戦線である。

反帝統一戦線を、プロレタリアートの「本質」の展開、プロレタリアートの階級闘争の「原理的法則」の実現として、「史的唯物論」体系として、一つの論理的、歴史的体系にまとめ上げたものである。まことに首尾一貫した形而上学的体系ではある。

①「世界武装プロレタリアート」について

我々は既に、これが根本的に誤った基礎から導かれた一つの観念上の産物であることを明らかにしたが、その現実的役割をいくつか総括しておかねばならない。第一にこれが現実の意味しているものは、国際的規模での革命戦争の発展、暴力闘争の昂揚であるが、世界革命の新たな前進と発展を具体的に把握、分析し、どのような諸矛盾が世界階級闘争を規定しているのか、敵——味方——友の相互関係、又世界革命を構成している様々な革命闘争の性格、プロレタリアートと他の諸階級との相互関係、又その闘争を代表している諸党派についての評価等々を明らかにし、我々がどのような立場にたち、どのような任務をかゝって闘うべきかという具体的・実践的問題を彼岸に追いやったのである。

具体的な内容と性格をもつ革命闘争が「プロレタリアートの存在形態・歴史的成熟形態」なるものに観念的に転倒されている。

第二に、こゝでは反戦全共闘の反帝統一戦線の暴力闘争の中にプロレタリアの武装をみ、他方でそれをベトナム・中国・朝鮮の革命国家及び民族解放革命戦争とを重ねあわせ、「高次の自然発生性の質」として傾向性を抽出し、それをロシア革命を根拠とする「プロレタリアートの歴史的成熟」によって、世界武装プロレタリアートへと実体化されている。だがそこから現実の階級分析・階級闘争の情勢の分析、それを前進させるべき具体的任務、統率し抜く自己の立場が曖昧化され、コスモポリタニズムを徹底化させる。国際主義的立場が、根拠地国家にわが身をおいて攻勢を組織するという、のり移りと力学主義におきかえられる。

(↓国際根拠地建設の方針を帰結) (あたかも単一の世界武装プロレタリアートとして現に存在しているか、或いは今すぐ実現しうるか、更には今すぐ実現しなれば一切の展望はないというように。まさにこの三重った。

第五に、世界武装プロレタリアートの概念によって、現に存在している諸国家権力とその特質、諸階級とその相互関係、民族植民地問題等が、今日の世界階級闘争の内容を規定している諸矛盾―階級闘争の経済的基礎の分析が無視され、とびこえられ、空想的な、平板化された一挙的世界単一同時革命―例えば、日米同時蜂起等―と、日本革命としてはなしえないという日和見主義に陥み、コスモポリタニズムを極限にまで徹底化したのである。

行動している現実の諸階級、歴史によってある相互関係におかれている現実の諸階級、社会の客観的な発展段階と、この社会と他の諸社会との相互関係を考慮に入れるのではなく、世界武装プロレタリアートという抽象的観念に基づいて、綱領と活動計画、戦術を立

の要素から「前段階蜂起↓単一の世界革命戦争」という方針・主張が根拠づけられている。()

第三に、世界プロレタリアートと、プロレタリアートの武装という、次元の異なる二つの概念をいっしょにして、原理的に意味づけることによって、このプロレタリアートの武装が歴史法則として自然成長的に実現されていくかの如く描き出し、他方では全ての武装(闘争)が無条件にプロレタリア的として、その中に買かれるべき階級性を消失させている。武装を、権力の獲得と世界革命をめざすプロレタリアートの主要な政治的任務としてどのように組織し、鍛え上げ、プロレタリア的に純化するのか、又それをどのような諸条件と全般的諸任務と結合して組織するののかとしてではなく、全く抽象的の主観主義的に提起されている。

第四に、プロレタリアートをこのように、一個の抽象物にすることによって、現実のプロレタリア階級を、階級関係を、具体的に把握することができず、自己の政治的立場が同時にその社会的立場を対象化し抜くものとなりえず、プロレタリアートをその他の被抑圧階級としようとしているのである。

② 制約―被制約―逆制約とプロレタリアートの能動性と攻撃性について

我々は既に、この制約―被制約―逆制約が、階級支配の問題として、即ち国際的なブルジョア階級支配と、それを打倒し、自己の独裁を樹立し、資本主義的所有―賃労働制を廃絶するプロレタリアートの社会革命と、この革命的転化をおし進めるプロレタリアート独裁の意義と役割を基礎にして、世界プロレタリア共産主義革命の始まり、その発展についての具体的総括、今日の世界階級闘争の具体的な分析と特徴づけ、帝国主義と社会帝国主義に対するプロレタリアートの態度、世界革命の戦略として確立するのではなく、抽象的・観念的なプロレタリアートの世界性とブルジョアジーの一国性との制約関係なるものを論理づけ、そこに階級支配を基礎づけ、又攻防の弁証法として観念的に力学関係として導くことの、根本的誤まりを指摘してきた。それをふまえる時、こゝでのプロレタリアートの能動性・攻撃性の問題も又明瞭である。

我々は一般に、プロレタリアートの階級闘争は、能動的要素と受動的要素、攻撃的要素と防衛的要素をもっていること、階級闘争の発展はプロレタリアートの能動性、攻撃性を増大させること、我々はプロレタリアートの階級的自覚、政治的発達、組織性を鍛え、高め、革命的積極性と英雄主義を培い、階級闘争の一切の現われを統率して、この能動性、攻撃性を高めねばならないと考える。又我々は、世界プロレタリア共産主義革命の始まり、発展と共に、一般的にいつてプロレタリアートの世界階級闘争が増々世界的に、大規模に、激烈になり、増々多く戦線で敵を追撃し、打ち破り、その支配をくつがえし、増々広く、深く自己の進路を開き、多くの諸条件・諸手段を闘い取り、社会の主人公となり、増々緊密に結合し、その力量を高め、より多くの、より進んだ、より深い領域と任務へと進んでいることから、この能動性と攻撃性は増大し、より深く、より大規模に、より多くの領域で発揮される条件をもっていると考え。しかし我々は、プロレタリアートの能動性、攻撃性を抽象的に問題にした

し、世界階級闘争の具体的・歴史的総括を通して発展させようと思う。

ボルシェヴィキ綱領は、資本主義と帝国主義の特徴づけに続いて、社会革命の時代への直接的移行を特徴づけているが、それは次のように要約できる。(冒頭のロシア十月革命の意義と、それによって切り開かれた時代の特徴づけも含めて)

(一) 資本主義が到達したこのような発展段階においては、帝国主義戦争は不可避的に、プロレタリアートを先頭とする被搾取労働大衆の、ブルジョアジーに対する内乱に転化した。ロシアの十月革命はその最初の勝利を闘い取り、プロレタリアートの独裁を実現し、プロレタリアートは貧農すなわち半プロレタリアートの支持を受けて、共産主義社会の基礎を創設し始めた。世界プロレタリア共産主義革命の時代は始まった。

(二) プロレタリアートの攻撃が増大し、とくに個々の国でプロレタリアートが勝利したことは、搾取者の反抗を強めている。その結果、搾取者の側でも、資本家の国際的統合の新しい諸形態をつくり出した。資本家は、

ところで何事も明らかにすることはできない。むしろ、それを何か特別なものと神秘化して実践の基礎に意義づけるのは、自然成長論や主観主義だと言わねばならない。問題は常に具体的である。今日の世界階級闘争の到達点・その構成部分の特徴づけ、諸勢力・敵・味方・友の相互関係を明確にし、プロレタリアートの歴史的作用と任務を鮮明し、戦略的観点を堅持し、プロレタリアートの前進を妨げている種々のイデオロギー・傾向・潮流と闘い、彼らの一層深い、確固たる自覚と団結の力、その組織性・意識性を鍛え上げ、具体的な階級闘争の情勢の分析をふまえて、行動の指針を明示し、堅忍不拔の活動を組織していくことである。能動性、攻撃性を、このことから離れて、抽象的に普遍化し、絶対化することは、空想的な神秘化に陥り、人間の位相転換や、人間一般の主観的能動性を強調して、不可避的に自然成長論や主観主義・無政府主義に転落せざるをえない。

我々は以上の概念論的見地よりも、次の見地を継承

地上の全ての国の人民の系統的な搾取を世界的規模で組織すると共に、全ての国のプロレタリアートの革命運動を直接に鎮圧することに当面の任務を注いでいる。全てこうしたことのため、個々の国家内の内乱と、自己を防衛するプロレタリア諸国及び被搾取諸国民の帝国主義列強に対する革命戦争とが結びつくことは、避けられない。(三) 帝国主義と帝国主義戦争がつくり出す袋小路から人類を脱出させることができるのは、プロレタリア共産主義革命だけである。革命の困難がどんなであろうと、革命が一時失敗することがあろうと、又反革命の波がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利は避けられない。(四) 帝国主義と共に、社会主義のブルジョアの歪曲—プロレタリアートの直接の階級敵である日和見主義と社会排外主義の潮流、及びそれに追従する潮流が、国際社会主義運動の上層に発生した。(及びその経済的・階級的基礎) ロシア共産党を初めとする革命的潮流は、これらの潮流・社会主義のブルジョアの歪曲と断固として手を切り、それと仮借なく闘うことによって、第三共産主義インテナ

ショナルを創設した。それは世界プロレタリア革命の勝利の不可欠の条件たる、国際プロレタリアートの間の完全な信頼と、最も緊密な兄弟的同盟と、彼らの革命的行動のできるだけ大きな統一を實現することを直接の任務として創設された。(それは共産主義革命の勝利のために、世界プロレタリアート独裁を闘い取ることを、国際プロレタリアートの任務として宣言した。

—我々—我々はこれにもう一つ、(四)世界プロレタリア共産主義革命の時代が始まったことは、多くの植民地・半植民地・従属国の民族解放運動を發展させ、国際共産党・国際プロレタリアートの革命運動に結合させ、世界プロレタリア革命の一環に転化した。多くの植民地・半植民地・従属国に共産党が誕生し、民族解放運動を指導することによって、プロレタリアートの闘争は真に世界的となり、地上の大多数の住民・被搾取労働大衆を引き寄せるものとなった。とつけ加えておきた。

この上から立って、以降の世界階級闘争について、我々は主要に三つの点をあげねばならない。第一は民族と、その背骨であったソ連共産党の中に、帝国主義の反革命包囲・圧迫に屈服し、ソ連の中に生まれ出た特権的官僚と労働者の上層の一部特権的層と小ブルジョアジーの圧力におされて、共産主義を歪曲し、世界プロレタリア共産主義革命の道を放棄する潮流が生み出された。この潮流はプロレタリアートの世界階級闘争の利益を、一国社会主義建設の防衛に従属させ、コミンテルンをその道具にかえ、プロレタリアートの闘争を分断し更にプロレタリアートの階級闘争とプロレタリアート独裁を放棄し、第二次大戦の後には、帝国主義への公然たる屈服と中着に進み出し、全世界でのプロレタリアートの階級闘争の前進を抑圧することになった。国際主義を民族主義に、世界革命を平和共存に、プロレタリアート独裁を全人民國家に、暴力革命を平和移行に歪曲し、公然たる裏切者となったこの潮流は、全ての資本主義諸国共産党の中で制覇した。そして民族解放闘争の發展と世界プロレタリア共産主義革命の前進に直面して、プロレタリアートの階級敵たる社会帝国主義へ移行し、プロレタリアートの世界革命運動に対抗

解放闘争の發展である。中国共産党・朝鮮労働党・ベトナム労働党に指導されたアジアの被圧迫諸民族の解放運動は、第二次世界強盗戦争に反対する革命戦争によって、大戦後、中国革命を先頭に巨大な勝利を闘い取った。そして引き続き帝国主義の朝鮮・中国(台湾)・ベトナムに対する侵略・反革命(戦争)と断固闘い、プロレタリアート独裁を強化し、共産主義革命の道に進み出した。とくにキューバ革命(一九六〇)、ベトナム革命戦争(一九六〇)、インドシナ革命戦争(一九七〇)、中国プロレタリア文化革命(一九六六)は、国際ブルジョアジーの存命の最も根深い源泉、その支配の最前線・寄生性の基礎を打ち砕き、世界プロレタリア共産主義革命の新たな前進をつくり出し、全ての被圧迫民族の中に、プロレタリア的貧農的解放運動、革命戦争を發展させ、強め、資本主義諸国のプロレタリアートの中に新たな革命的潮流を生み出し、プロレタリアートの世界的攻撃を増大させている。第二は、国際主義運動の中に生じた新たな修正主義潮流の発生・成長である。第三インタナショナルの中心部

して、一方で帝国主義と同盟し、他方で世界制覇のために争奪をくり返している。第三は帝国主義の新たな特徴である。搾取者・帝国主義列強は、プロレタリアートの革命運動を直接に鎮圧し、又新たな修正主義潮流を利用して分断・各個撃破し、新たな強盗戦争に世界を引きずり込んだ後、米帝を支柱として、資本家の国際的統合の新しい諸形態(NATO・日米安保・国連・IMF・世銀・OECD等々)をつくり出した。そして全ての国のプロレタリアートの革命運動、民族解放闘争を共同して鎮圧して、全ての国の人民の系統的搾取を世界的規模で組織すること、又プロレタリア諸国を国際プロレタリアートの闘争から引き離し、屈服させ、変質させること、これらにソ連修正主義集団を最大限利用することに力を注いできた。しかしそれはそれで、トラスト間の地球の経済的再分割と、資本主義諸国家間及び社会帝国主義との間の闘争を不可避的に激化させている。

そして最後に、次のことをつけ加えておかねばならない。ベトナム革命戦争と中国プロレタリア文化革命

は、その帝国主義の侵略反革命戦争と現代修正主義潮流——走資実権派に対する闘争において勝利を獲得し、全世界でのプロレタリアートの共産主義革命運動を飛躍的に強め、資本主義の没落を速め、世界プロレタリア共産主義革命の新たな前進と発展をつくり出した。帝国主義と社会帝国主義の包囲圧迫に対抗して自己の独裁をより堅固にするプロレタリア諸国の革命運動、そして社会帝国主義と同盟し抗争する帝国主義の侵略・民族抑圧・武力鎮圧に反対する被圧迫民族の民族解放革命戦争・資本主義諸国内でのプロレタリアートの内乱を準備する反抗は増々増大し、緊密に結合し、列強間の同盟をたえず動揺させる、その内部の対立・抗争の激化は、この過程を一層促進させている。これに対抗して組織される反革命の波がどんなであろうと、革命の困難がどんなであろうと、プロレタリアートの最後の勝利は避けられない。世界プロレタリア革命のこの勝利のためには、全世界における労働者階級の間の完全な信頼と、最も緊密な兄弟的同盟と、彼らの革命的行動のできるだけ大きな統一が必要である。これらの

してなされ、そこから帝国主義の永続侵略・抑圧⇨反革命戦争の必然性が述べられ、そこに世界革命戦争の根拠を基礎づけている。だがこれは次の三点の欠陥をもっている。第一にそれは帝国主義の侵略反革命戦争の説明ではありえても、今日の階級闘争の経済闘争の経済的基礎の暴露たりえていないこと（もしそうであれば民族解放闘争が、パンフNO四からすっぽりと抜落ちることも、独占の強化—金融寡頭制の重圧・腐朽化に対する、労働者階級人民大衆の闘争の発展が抜け落ちることもなかったであろう。たとえば、レーニンが資本輸出⇨世界の再分割を分析することは、少数の富裕な抑圧民族と大多数の被抑圧民族への分裂を帝国主義の本質的屬性と捉え、そこから一方での民族解放闘争の発展、他方での社会排外主義の社会的⇨階級的内容を明らかにし、民族解放闘争に対するプロレタリアートの態度と社会排外主義に対する闘争を、プロレタリア革命の根本問題としてさし示しているのだ。）

第二に資本の強蓄積—独占体の発展—金融寡頭制の強化と資本の過剰と資本輸出との相互的関連、内的構造

条件はあの共産主義からの背叛、現代修正主義潮流と、原則的に断固として手を切り、それと仮借なく闘い、これら一切の革命運動を、帝国主義と社会帝国主義打倒・世界革命の勝利に向けて組織し、プロレタリアート独裁の旗を堅持し、搾取者の武装解除とプロレタリアート・被搾取者武装を擁護することが必要である。新たなインタナショナルは、中国共産党・ベトナム労働党・朝鮮労働党の緊密な結合によって事実上半ば実現されているが、全世界の革命的潮流の結束によって、共産主義第三インタナショナルの真の継承者たる新たなインタナショナルの創設を實現しなければならぬ。我々はその一部隊として、日本におけるプロレタリアートの前衛党の建設を押し進める。（こうして、次に我々は、日本プロレタリアートの具体的な諸任務を定めるであろう。）

第六にパンフNO四の第三章、現代帝国主義の特徴づけでは、過剰資本の累積、その資本輸出と管理通貨制—軍事スベンディング—経済の軍事化による処理と

が明らかでなく、万年戦争の危機感の吐露に終わっていること。（たとえばレーニンの帝国主義論では、独占体の発展—金融資本の支配が、労働者勤労大衆に対する未曾有の搾取・収奪・隷属の強化・資本主義の腐朽化として、現われること、資本の過剰が同時に彼らの間での甚大な貧困の蓄積であること、そして資本の輸出が腐朽化と共に寄生性を増大させることを明らかにし、一方での労働貴族の発生と共に、他方での本来のプロレタリアの下層の貧困・隷属の強化、更に甚大な勤労大衆の零落と呻吟を、そして彼らの闘争の増大を明らかにしている。）

第三に権力問題が捉えられないこと、階級支配の構造・国家権力の特質が捉えられないことである。経済上の独占から政治的独占へ、そして民主主義の全般的破壊、官僚的⇨警察的抑圧と差別分断支配と排外主義、そして侵略反革命、これらと諸階級との相互関係等々が完全に抜け落ちている。

第六にパンフNO四の第四章は階級闘争の歴史的総括を、自己の原則的立場の欠除の故に具体的に⇨階級

闘争の歴史の総括、及び階級闘争の情勢として明らかにしえず、何か特別の主体的原理におきかえている。観念的転倒、

△四▽パンフNO四総括のまとめ

以上パンフNO四の基本的論点について批判的に総括してきたが、最後に理論的立場としてのパンフNO四と、実践的方针としての六九年秋前段階蜂起—世界革命戦争—世界△党—軍—革命戦線▽創出の、基本思想・政治的立場・戦術思想・組織思想についての概括的な特徴づけをしておこう。

第一にそれは観念的な、半ば無政府主義的な共産主義である。民族共産主義と経済主義の批判から出発しつつ、それを資本主義の原則的批判として貫くのではなく、特別の主体的原理を対置することによって、自己の立場の基礎にすえたのである。まさにこの自然成長論と主観主義の根拠がある。これは後の共産主義化論や、プロレタリアート独裁の観念化・空語化の出発点である。第二にそれは階級支配・階級対立の非和解性をその経済的基礎から全一的に明らかにし、ブルジョア

客観的な願慮、従って又この社会の客観的な発展段階の願慮、並びにこの社会と他の社会との間の相互的諸関連の願慮」の上に立って、又政治的力関係・運動の発展状態を考慮し、日和見主義との闘争を貫き、権力獲得に向けてプロレタリアートの政治的進出を組織し、全被搾階級を引き寄せ、彼らを指導し、敵の弱点を利用し技巧、プロレタリアートの階級闘争の戦術とは程遠い、抽象的観念に基いて活動計画をたて、戦闘的ではあるが、小ブルジョア急進主義化に対して自己の独自性を持ちえない戦術思想、自然成長（というものは闘争戦術に一面化し、他の諸連関から切り離す）と主観主義（世界武装プロレタリアートの能動性・攻撃性の無条件的な、無規定的な、原理としての主張を根拠とする）の戦術思想である。第五にその組織思想は、確固たる思想的統合と政治的結束と組織的規律を曖昧にし、諸個人の世界武装プロレタリアートの自覚に基いて、政治活動と個々の戦闘の実現に狭め、それを唯一の内容とする戦闘団主義であり、党と階級の関係は後者に一面化されるか、たちきられている。（プロレ

ジー独裁を暴露するのではなく、逆に曖昧にし、プロレタリア階級を唯一の真に革命的階級とするところの彼らの存在諸条件、その歴史的使命、彼らの闘争の発展とプロレタリア独裁の意義と役割、プロレタリア階級独自の政治的統率・組織化を不明にすることによって、プロレタリア階級の階級の独自性を解消する、小ブルジョア戦闘左翼と融合する思想である。第三に革命の実践の核心をなす国際主義と権力問題に関して、一国主義路線の批判から出発しつつ、階級支配の観点を曖昧にすることによって、階級闘争の総括と階級支配の構造から特徴づけられる政治権力と諸潮流に対する実践的態度、どのような潮流へとプロレタリアートを組織し、どのような性格と任務をもつ権力を樹立するのか、それに向けてプロレタリアートを鍛え上げていく要求と任務を打ちたてることができず、抽象的世界主義と戦闘的民主主義を、力学的に表明した思想である。第四にその戦術思想は、プロレタリアートの階級闘争の立場に立って、「ある与えられた社会の全ての階級の相互的諸関連をいっしょにしな全体

タリアートの階級的自覚と政治的発達と組織化に助力し、彼らを独自の政党に組織し、プロレタリアートの階級闘争の一切の現われを統率するという任務の放棄。これは一方で党の独自性を解消し、無党派性にゆきつくものであり、他方では母胎論にゆきつくものである。更に又建軍から建党へと、軍事を政治の上に、軍を党の上におく思想に道を開くものである。

第六章 六九年秋の敗北と国際根拠地論・七〇年前蜂方針・H J 闘争

八一〇 六九年秋の敗北とその総括の破綻

我々は既に六九年秋の情勢とその飛躍をかけた大会戦について、それに対する我々の立場と戦術について、それらに貫かれていた思想―政治―組織上の欠陥、弱点について明らかにし、敗北の基本的性格と根拠を明らかにしてきた。ここではそれを更に具体的に細部について明らかにし、同時にこの時の実践経験の教訓のいくつかを汲みとり、又我々が当時この敗北をどのように総括し、次の出発点を定めたのか、そしてその中から導き出された国際根拠地建設―H J 闘争と七〇年秋前蜂方針の完膚なき破綻を総括していきたい。

六九年秋、我々は非公然軍事組織―戦闘突撃隊を組織し（これを建軍と主張していた）、全力で戦闘態勢を築き、終始一貫して最前線にたとうとした。そして我々の八前段階蜂起Vの闘争は、大阪戦争―東京戦争と二〇・二一の完全な敗北と大菩薩峠での一斉逮捕と

いう軌跡をたどった。

我々の六九年秋の敗北は、その全局の環となるべき戦闘、それによって全ての闘争がひとつの有機構成部分として真に意義を与えられるような核心的闘争を実現しえなかったこと―まさにそれをこそ唯一の目的とし、一切の党派性であったにもかかわらずここに凝縮された。我々のこの敗北は、頂点・環に向けてくり返される様々な部分的、前哨的な大衆の諸衝突そのものの中にあつて、そこに準備と組織性、計画性を持ち込み、同時に環たるべき戦闘に向けて組織の全活動を系統的、計画的に集中し、独自の組織的準備を遂行し抜くという、かかる準備と計画性―意識性・組織性の欠如であつた。

我々が「首相官邸攻撃」の戦闘目的をもつた大衆的進撃を、機動隊撃破殲滅をかねめとした独自の組織的準備と部隊をもつて援助・牽引しようとしたためにと組織化を進めたのであるが、既に決定的な時機を逸し、大きな立遅れと後退、局面の急速な変化の中で当初の意図を貫徹すべく玉碎的戦術の道を選んだのであつた。しかし我々の組織的訓練の欠如、活動技術の未熟さ、志気の衰退と解体傾向のために、政治警察への完全な敗北をもつて終つた。

「ゲリラ」に徹し切れなかつたから敗北したのでなく、この独自の組織的準備を系統的になしえず、独自の組織的隊列と活動を堅固に組織しえず、大衆が現実の諸戦闘の中で生みだしている様々な積極性と創意、工夫―軍事上、組織上、技術上の―を汲み尽して自己の組織と活動に意識的に組織化し、結びつけ、系統化することができず、一貫した具体的な見通しと戦術方針をもたず、従つて独自の立場と独自の組織され準備された力をもつて真に援助、牽引し抜くことができなかつたから敗北はあつたのだ。あるべき蜂起の想定からの演繹や大言壮語、書齋の中であみだされた空想的類型はあつたが、徹底したりアリリズムはなかつたのだ。大阪戦争―東京戦争も全局の中で、局部的役割を果しつつも、闘争戦術の硬直化の打破と戦闘精神の高揚が全局の環に向けた首尾一貫した準備と計画的、系統的活動に結びついて組織化され、実行されることなく、精力と勢力を消耗させ、だいなしにしたのである。我々がこうした欠陥に気づいたのは一〇・二一の完膚なき敗北後であり、そこから全組織総力を集中した準備

我々の六九年秋の戦闘の全局における敗北には、我々の非組織性、非計画性、一貫性の欠如と概念性、半ば無政府主義的な戦闘方針、個々の戦闘局面へのブラグマチックな追隨の態度（たとえそれが戦闘的であつたにせよ）の敗北であつた。又その意味で、大衆の積極性、創意・工夫に依拠しえず、それを組織化し集中することができなかったことの敗北である。そしてそれは「前段階蜂起」の観念性と深く結びついていた。もう一つ我々は組織上の欠陥を総括しておかねばならない。それは我々が地下軍事組織―戦闘突撃隊を組織しようとしてつき出された問題であり、特に指導内容と指導方法に集約される問題である。

第一に我々は運動の一定の時期に生み山され、又要

請される運動形態、組織と活動の形態、それをもたらしめている諸条件、情勢、運動の歴史的發展過程、他の諸形態から切り離して、即座に革命の型と形態等として抽象化し、觀念的に類型化し、絶対化し、逆に現存の階級闘争の現われをそれにあてはめ一元的に実態化しようとする傾向をもっていた。

我々が地下軍事組織―戦闘突撃隊を組織しようとしたときも、これを現実の諸条件、階級情勢、運動の發展段階、他の諸形態から切り離して、世界赤軍の正規軍建設としてこの蜂起軍を觀念化し、過渡期世界の革命の普遍的型へと類型化し絶対化し、そのことを根拠にして階級闘争の一切の現われ、組織と活動の一切を戦闘突撃隊に一元化し集中しようとしたのである。

六九年秋に地下軍事組織―戦闘突撃隊の組織化に、組織の主要な精力・努力を集中することの正しさというものはそれが秋を闘い抜くための環であり、未経験な領域であり、更に思想的政治的組織の厳格さが要求されるから―にもかかわらずこれは後に、中央軍一元主義へ道を開くこととなった。

を組織活動・地下組織機構として組織し、系統的に蓄積しなければならぬからである。これなしには真に成算ある地下活動も持続しえないからである。特に地下活動にとって不可欠な秘密的な一つひとつの細々とした、目立たない、更には無味乾燥な活動を厳格に堅忍不拔に実行するという活動態度の歴史的欠如、成算がすぐ眼の前にみえる華々しさが約束される方向に眼を奪われるという傾向、そして活動のルーズさは更にこれを増巾させたのである。そのため、「中央軍」を軍事的諸準備と地下組織機構の組織者として組織しえず、戦闘集団としてしか組織しえなかったのである。

第三は指導の決定的弱点である。それは、指導内容の狭さ、基本的な思想工作の欠如、集団指導と民主集中制の弱さ（指導部内の意志統一の不十分さ）、そして何よりも、最大の重点、主要点をつかみとり、そこに知恵と精力を集中し、全力で組織工作を実行し抜くことの弱さであった。とりわけ技術問題・武器の準備を組織問題、地下組織機構、組織活動―訓練の系統的蓄積として解決しえなかつたことは戦闘の敗北と直接

問題は逆なのである。現実の中の發展要素を意識化し、組織化し、組織化し、集中化し、高め上げること、それをたえず具体的な諸条件・情勢、運動の發展段階、他の諸形態と関連づけること、そして厳格な思想的、組織的観点・全般的活動計画と結びつけて、確固たる党組織機構として築きあげることである。更にこれを實際の闘争―活動経験によって組織的に鍛えあげ、教訓化し、蓄積し、系統化していくことである。

第二に、我々のこのような觀念論と類型主義及び戦闘主義は確固たる地下軍事組織―戦闘突撃隊をも組織しえなかつた。なぜならそのような組織が真に確固たるものになるには、日々の頑強な思想・政治工作によって固く結束し、確固たる計画に基いて一つひとつの目立たない活動を粘り強く実行し、自覚的に組織性と規律を強め、組織と活動における他の諸形態と緊密に結びつき、現実の中の發展要素の凝縮された表現者として現実の経験の到達段階を組織として集中し、かつ大衆の積極性、創意・工夫と深く結合し、引き寄せ、系統付け、首尾一貫した全般的活動計画の下に、技術

に結びついた。まさにリアルに、實際的に解決すべき事柄が、大言壮語とお喋りに、又中途半端な戦闘計画に解消されていたのだ。

第四に以上のことから、我々の組織は厳格さ、組織性、堅忍さの欠如したルーズな組織へと転落し、組織的無政府性と浮動性をもたらし、政治警察につけ入るスキを与え、指導部及び中堅カードルの次々の大量逮捕を許し、更には大量の自供を結束したのである。これらは組織・組織生活を団結、革命的实践の問題として把えず、単なる機能として把えてきた欠陥と深く結びついている。

六九年秋の敗北をどのように総括するかは八革命的左翼Vにとって自己の新たな出発点を定めるものであった。なぜなら六九年四・二八〇秋にはいまだ端緒的萌芽的にか現われず、意識されなかつた問題は、六九年秋の闘争とその敗北を通して全面的に現われ出、それをどのように総括するかが、この時突きつけられていた八飛躍の課題Vをどのように明確にし、全組織

的に内実化し、どのような立場と方向に進み出すかを決定したからである。逆にいえば、総括を通して六九年秋をどのような立場からどのように闘い、どのような飛躍と前進のために闘おうとしたのか、そしてそれをどのように現実の實踐と経験として鍛えあげ、橋頭堡を築いたのが一切の曖昧なベールを取り去って白日の下にさらしたのである。

当時の我々の総括について、ここでは詳しく述べる必要がないであろう。その総括は、七〇年秋前段階蜂起！国際根拠地、国際地下活動・蜂起の軍隊建設として明白にされているからである。六九年秋前段階蜂起を掲げて登場した我々の党的敗北、破綻を技術的未熟と、大衆運動に依拠しようとしたことと、世界革命戦争としての実態的結合の欠如として総括し、国際根拠地を建設し、そこに蜂起の軍隊を組織することによって日本の前段階蜂起を労働者国家と結びつけて世界革命戦争の実態的結合を実現すること、及び大衆運動から徹底的に召還して地下の蜂起軍建設とその技術的習熟に全てを集中すること、八派を暴力的に解体するこ

明確にして、それを六九年秋の闘いの立場として具体的に貫きえなかつた我々の内的欠陥、弱点のために、それは挫折したのである。

又、六九年秋の闘争も、たとえそれが中途半端に終わったにせよ、まさにそのことによって革命的左翼の内的欠陥、弱点を明らかにし、その根本的転換・脱皮・変革に進み出すことを緊要の任務として出して、その特殊な歴史的時期を終えたのである。だからこそ、全体的な根本的な総括が要求されていたのであり、そして我々の敗北・挫折・破綻を克服して進む以外になかつたのだ。だがこの時期の我々の総括は、自己の自然発生性への拝跪に満ちていた。だから七〇年秋前蜂の方針は当初から破綻が予定されていた——むしろ二度目の茶番として。

この矛盾の解決とは、徹底的に召還主義化し、技術的に習熟しつくすことと急進的コスモポリタニズムを徹底化して一層觀念化し、国外に、革命国家に期待をわけ、引きずりこむことであつた。その意味で最も冒險主義的な見地であり、当初から破産を宣告された道

と、そして七〇年一〇・二一前後に武装して電撃的に政府機関中枢を占拠し、革命的敗北をとけて革命戦争を切り開くこと、これらが新たな方向として打ち出されたのであつた。

もし我々が六九年秋をできるだけ全体的に、根本的に正しく総括しえていたならば、我々は六九年秋の敗北と経験、党的破綻を総括、教訓化して新たな飛躍・前進！党的な一歩踏み出すことができたであろう。六九年秋にはそれだけの積極性をもっていた。

しかし我々の総括は逆に、自己がはらんでいた欠陥・弱点を、それ故の党的敗北・破綻をより徹底化し、拡大し、純化し、全面化するものとなつた。なぜなら我々は六九年秋に前段階蜂起によって、革命的左翼の運動の或る確かな根本的転換・脱皮・変革をつくり出そうと追求していた。それは一〇・八羽田以降の闘争が急進民主主義的な八中央 権力闘争Vを目標にして発展し、実際六九年秋の闘争がまさにその大衆的實現の方向で頂点に登りつめていたが故に一定の正当性をもっていた。しかし、この根本的転換・脱皮・変革を

であつた。

△二V HJ闘争と国際主義

淀号H・J闘争は、赤軍派結成以来遂に貫徹した最初の闘争であつたが、まさにその實現と共に我々の破綻は明瞭となり、解体を結果したのであつた。我々はこの淀号H・J闘争に示された勇敢さ、組織性・技術的完べきさについて高く評価するが、にもかかわらずこの闘争は明白に一つの政治的冒險主義の現われであつた。それは当時の国際的諸關係と国際情勢の評価・中国・朝鮮民主主義人民共和国と中国共産党・朝鮮労働党に対する評価、この闘争の立場と目的、民族問題に対する観点と態度等々からして明らかである。むしろそこには急進的コスモポリタニズムと義腹の小ブル民族主義の傾向、左翼「同化」主義の傾向をはらんでいた。我々はこれをそのまま国際主義的行為として決して評価することができない。何故ならこの闘争への立場と観点が、自国の帝国主義によって抑圧・圧迫されている民族の解放闘争を、自身の政治的冒險に利用するという傾向、又真剣に国際的團結と信頼を打ちた

てる努力なしに、國際的支援—革命國家の進攻を引き出すことに自己の展望を託すという傾向、朝鮮民族の解放闘争の歴史と現状、その利益について、在日朝鮮人民の民族的民主主義的権利について何らの考慮を払うことなしに、抑圧民族のプロレタリアートとしての態度を曖昧にし、その任務を回避して、朝鮮階級闘争・党派闘争に直接的に介入しようという傾向をもって来たからである。とりわけ、日常の朝鮮侵略・民族抑圧・反革命が一段と強められ、公然と宣言され、在日朝鮮人民に対する一層の差別、抑圧、「同化」・分断・追放の攻撃が強められ、入管闘争が日本労働者階級を、とくに革命的左翼を徹しくふるいにかけて始め、歴史的・具体的な「在日」の重みをもってつきつけられている民族問題と國際主義をめぐって、革命的左翼の—更には日本革命運動の—無自覚と弱点、排他主義と真に対決し得ない小ブル民族主義—小ブル民主主義と帝國主義的經濟主義が暴露され、その克服が死活の問題としてつきつけられたまさにその時に、これら一切を背後に追いやって、この淀号H・Jはあったのだ。

る契機を支え、民族開放闘争が世界階級闘争の最前線として存在していることを事実をもって示し、それに対する態度を日本の革命的左翼の政治的基準として押し出した。そのことによつて、それまで日本の革命的左翼にとつてたえず外在化されてきたベトナム—中国—朝鮮等を、単一の有機的な世界革命運動の内的構成部分として把え—従つて又我々自身をも—、觀念的世界観から脱却させる端緒となつた。第二に単純な日帝自立論を克服し、世界体系としての帝國主義—現代帝國主義の政治的等質を正しく把え、自國帝國主義打倒を世界戦略におきかえてきた欠陥・狭さを克服する契機を与えた。第三に世界の革命的潮流との結合を、真剣な実践的課題に上せる端緒となつた。

いづれにせよ、淀号H・J闘争の貫徹は、皮肉にもその当初の意図と観点とは反対に、インドシナ—中国—北部朝鮮の國際統一戦線形成、世界革命の戰略的高地と、我々の觀念・その欠陥・弱点の全面的露呈と破壊・解体という現実を明白にし、掃蕩したのである。淀号H・J闘争は我々自身の否定性を明らかにする仕

(在日朝鮮人民が当初敵の謀略と受け取り、その後「侵略者が行ったのだ」という糾弾を我々は真剣に受け取ればならない。)—「國際根拠地建設」方針は、日本革命の実践からみれば敗北主義であり、日本の労働者階級と人民への不信である。國際共産党と國際統一戦線を組織する観点から見れば、その立場と観点は一國主義的で転倒しており、世界階級闘争における我々の実践任務からすればのり移りである。これは結局のところ中国、朝鮮民主主義人民共和國が、國際階級闘争において現実に果している革命的役割を追認するものでしかなかった。

にもかゝらず、淀号H・J闘争はその結果として多大の積極的役割を果すことゝなつた。それは第一に、長年にわたつて反スターリン主義に影響・支配されて、アジアの諸國共産党・労働党を敵よばわりし、少くとも過少評価し、又帝國主義諸國階級闘争を無条件に上位においてきた日本の革命的左翼の中に、國際共産主義運動を正しく総括し、ベトナム・中国・朝鮮人民の革命闘争とその指導的党及び革命國家を正当に評価する方での意義を明らかにしたのである。

最後に、國際主義についての、我々の現在の立場を簡単に示しておこう。

第一にマルクス・レーニン主義の原則的立場を堅持し、現代修正主義と徹底的に分離し、ロシア十月革命から始まつた世界プロレタリア共産主義革命を勝利に導くべく、世界プロレタリアート独裁を組織し、抜く任務に基いて、中国共産党、朝鮮労働党、ベトナム労働党との結束を固め取ること。この結束こそ國際共産党再建の眼目として押し出すこと。何故ならこれらの諸党こそ、①三十年代以来、世界革命の新たな前進の血路を最前線で切り開き、②世界革命の新たな発展の内容と課題を固めとり、③現代修正主義との党派闘争を貫き、④帝國主義、社会帝國主義に対する闘いの最前線を堅持し、⑤今日の國際共産主義運動の背骨をなしていること。⑥そして又とくに我々にとつて、民族解放闘争を導いてきたこれら諸党との結束を固め取ることの中に、國際主義の試金石があり、我々自身の飛躍があるからである。

第二に万国の労働者、被抑圧民族、国際社会主義運動・民族解放闘争と団結して、帝国主義、社会帝国主义打倒のために闘争すること。そのためには、被抑圧民族の解放闘争を實際に支持し、支援し、助力し抜くことが必要である。

第三に排外主義との闘争を非妥協的におし進め、日本の労働者階級を抑圧民族のプロレタリアートとしての国際主義的立場と任務に基いて組織し、真に日本の労働者階級・人民大衆に依拠して、自力更生の日本革命の實踐をおし進め、日本革命の戦略問題として確定すること。

これらの凝縮された試練こそ、在日朝鮮、中国人民に対する民族的抑圧、圧迫、差別とどのように闘い抜き、彼らの解放闘争との連帯をどのように築き上げ、単一の党的結束をどのように組織し抜くのかということである。

第七章 第二次綱領論争

八一〇 第二次綱領論争の根拠と内容

七〇年前段階蜂起の方針の破産が否応なく明らかになり、その転換が不可避となり、相次ぐ幹部の逮捕を含めて組織的解体が進行すると共に、同盟の内外から新たな論争が必然的に生み出されることとなった。(第二次綱領論争)

この第二次綱領論争は赤軍派結成時以来の立場の総括、深化として追求され、新たに実践目標を確立する模索として展開されたのであり、その基本的観点と方向は機関終「赤軍」七号と「赤軍」特別号にまとめられている。そこでの出発点は「昨秋敗北によって、七〇年代の世界革命戦争が六〇年代のそれとはどのように異った特殊性、攻防関係の変化を、とりわけ我々に対する主体的変革を迫るのか。」ということであった。それは「戦略論の再検討は、実は我々の構築してきた革命論、革命観そのものを根底的に探る地点に到りつ」

(新聞七号) かける根本性をもったものであった。

そのような論争を必然的なものとした客観的、主体的根拠と条件は次のようなものであ

第一に、ベトナムから全インドシナへの革命戦争の拡大。中国、北部ベトナム・朝鮮の世界革命の根拠地への進出と社会主義革命の前進。中朝インドシナの反米反日本帝国主义統一戦線の形成。これらのことが帝国主义諸国、特に日本への階級闘争を世界革命闘争の一環へと組織し、浮きぼりにし、かつそれとの結合を一層要求し始めたこと。

第二に、日米共同声明の実質化が、反革命同盟再編、日帝の侵略反革命の本格化、国家権力構造の再編として明瞭に進み始め、特にその中で八革命的左翼に對する政治警察の弾圧が強化されたこと。

第三に、日本階級闘争が六九年秋の敗北後、後退戦を余儀なくされ、一方で帝国主义労働運動の制覇と、

日共現代修正主義の成熟、伸張が全面化し、他方で十八以降の勢力の分散化と混乱が顕在化したこと。

第四に、それらの対極に、それらの批判をばらんで沖繩全軍労ゼネストー、コザ暴動決起、七・七華青闘告発、狭山闘争の前進・発展、自衛隊内政治的叛乱の拡大等々が明瞭に姿を現わしたこと。

第五に、これらの諸条件の下で「革命的左翼」の根本的な質的飛躍によって、後退戦における分散、混乱と闘い、新たな前進的要素と結合し、より広く、より深く、より強固に将来を準備することが問われ、まさにこの根本的な質的飛躍の緊要性に規定され、にもかかわらず主体的弱点と自然成長性によって核心的分界線と敵、味方の関係を明確にしえないまま、分派闘争、分裂、内ゲバの自然成長的激化に陥ったこと。

第六に、この中で我々の思想的組織的弱点、立場の曖昧さ、その自然発生的傾向が鋭くあばき出され、その克服なしには一歩も進みえないことであった。

であるが故に、第二次綱領論争は、共産主義運動としての我々の立場を明確にすることから始った。それ

は、パンフ160四に対する批判的総括として、党建設

「共産主義運動を核心として戦略」戦術を打ち立てるべきこと。階級社会の発展ープロレタリアートの階級闘争ー共産主義者の能動的実践は後者に領導された歴史的發展をとげるといふ見地を押し出した。そして又、パンフ160四は共産主義者の能動的実践を指定しえず「プロレタリアートの高次の自然発生性」を共産主義運動の歴史の総括を通して扱えていないこと、「革命的敗北主義」による党建設（前段階蜂起→党建設）という、党を自然発生性にたえず溶解させる下からの党建設に陥っていること、等をも明らかにした。

（以上新聞七号。特別号では歴史的な日本の反共産主義運動「トロツキズムの伝統の下に、戦略」戦術論、というより単に戦術論にとどまっていること、自からの自然発生性・経験主義と闘う武器をもたない、戦略なき戦術主義」「党建設なき戦術主義」と総括してゐる。）

さて、第二次綱領論争は以下の点を確立した。

①、第二次綱領論争は共産主義運動としての自己の

立場の確立を十七年以降の国際共産主義運動の総括を通してなすとげようとし、とりわけコミンテルンの挫折、分解と毛沢東ー中国共産党の対象化によって、過渡期世界の共産主義運動として革命戦争を措定しよるとした。（尚、新聞七号での「レーニン主義の歴史的境界とその止揚」は、特別号で二〇年以降のレーニン主義の新たな発展とその継承・発展として、より正確に言われている。しかし基本的観点は同じであり、ここでは特に区別して考慮はしない。）それは、

a、現代修正主義打倒を内包した世界帝国主義打倒ー世界社会主義建設の同時一体性をもった世界革命戦争としての現代共産主義運動。従って、この革命戦争は党ー軍一体化の組織構造の下に、軍事（戦争）ー政治ー建設（生産）の一体的組織化、党ー軍ー革命戦線への全人民の組織化を内包する持久戦でありこの陣形のプロレタリアの秩序、規律として共産主義が実現されていく。

b、過渡期世界は世界革命戦争を内包し、侵略抑圧反革命戦争ーなし崩しファシズム、権力再編を展

開する帝国主義段階であり、プロレタリアートの戦略的反攻を準備する世界戦略的持久戦の時代である。これらを切り開き、体現してきたものとして毛沢東ー中国共産党の世界的普遍性（「マルクス。経済闘争ー党・労働組合」ー「レーニン。政治闘争ーソウヴェト・党」ー「毛沢東。革命戦争ー党・軍」の発展）を継承すること。

以上の革命戦争の措定にたつて、

②、党建設を、

a、反スタ・トロキズムの克服、世界的左派（反スタトロキズム、左翼スターリン主義の内在的克服過程）の統合ー止揚としての世界党建設。この世界党ー軍建設を全ての主導的核におく。

b、党が軍を創り、軍が党を創る「党ー軍一体化の組織構造の確立を軸とする党ー軍ー戦線陣型、その内部の規律として共産主義を過程的に実現していくものとして推し進める。

以上の共産主義論の上に立って、戦略ー戦術論として世界革命戦争の戦略問題の中心としての持久戦。

1、自然発生的な速決戦戦略。速決→攻勢戦略(前段階蜂起戦略)の克服。

ロ、党一軍一戦線の主導権を基軸におくこと。(世界党一世界赤軍の下にプロレタリアートを戦争一社会主義建設に組織する陣型)

ハ、戦術的攻勢、速勝。

次に

③ 情勢分析として、世界革命戦争の即目的対峙段階への移行、自然発生的な世界的持久戦の昂まり。

a、大陸持久戦陣型—根拠地国家化。

b、先進国、中進国内人民の戦術的戦闘と戦略的統合への前進過程。

c、帝国主義(特に米一帝)は七二年環とする戦略的攻勢の準備前段。

d、ソ連修正主義の防禦的・戦略的障地戦—大祖国防衛戦争

④ そして以上から帰結される任務として、

a、対峙段階のメルクマールとなる、世界八党一軍一戦線V確立へと一切の闘争を戦略的に統合してい

e、日本における党一軍一戦線建設、統一戦線と党派闘争について、党一軍一体化の組織構造をもって独立戦闘隊を組織し、それを支えるUG革命戦線を組織していく。そして八派共闘の解体を、中核派、戦旗派との党派闘争を軸に進め、革命左派・プント連合派内左派。ML派を革命戦争派へと統合していく。ほほ以上が、第二次綱領論争を通して確立された基本骨格であった。

△二V 第二次綱領論争の問題点

我々が今ここで第二次綱領論争について総括すべき問題は次のような事柄であろう。

第一は、第二次綱領論争がパンフレットの最大の弱点を、共産主義運動としての原則的立場の欠除、自然成長論として批判したことは全く正しい。そして国際共産主義運動の総括を通して、毛沢東一中国共産党がレーニン以後の共産主義運動の新たな血路を切り開きその背骨を形造ってきたこと。そして中国・ベトナム・朝鮮の革命闘争を世界階級闘争の歴史的な最前線として対象化し、反スタロツキズムの克服を通してそ

くこと。(国際ゲリラ闘争、国際旅団の組織化、国際会議等世界党を準備する過渡的統一戦線)

b、特にその不可欠の環、主要な任務として、日本における建党一建軍を主導的に切り開き、推し進めていく武装闘争の開始。

c、この武装闘争をとくに、七二年沖繩返還を環とする米・日帝国主義の大規模な戦略的攻勢に対する戦術的攻勢、反革命軍事体制一帝国主義軍隊解体をめざす連統蜂起として闘う。(尚、この点は一時期にわたって、連統蜂起かゲリラか、として論争されたのであるが、ここで言われている連統蜂起とは以前の前段階蜂起とはちがって、集中的なゲリラ戦、ゲリラ的蜂起として、闘争戦術の問題として提起されている。)

d、この連統蜂起をもって帝国主義ブルジョアを国際反革命においやり、プロレタリア多数派の獲得。先進国革命戦争の主導権をうちたて、プロレタリア国家の一層の根拠地国家化と後進国革命戦争の先行した反攻、との戦略的呼応・統一戦線と世界党建設の道を開く。

れとの結合・世界党への前進の道を開くべきことを明らかにしたのは全く正しい。むしろ画期的でさえあった。しかしにもかかわらず、その基本的観点が依然としてパンフレットの基盤の上におかれていること、言いかえれば、その共産主義運動としての原則的立場が、立場としてではなく、運動構造、過程的な運動一組織論としてたてられていることである。だから結果的にはパンフレットの「世界武装プロレタリアートVが八世界党一軍Vにおきかえられたにすぎないのであり、その意味では一層主観主義的でさえある。(例えば、新聞七号では、先験に措定される「世界党一軍建設を全ての中軸においた共産主義の実践」の開始の地平から、初めてマルクス・レーニンの再把握・過渡期世界論・共産主義運動の概念把握がなされる。と述べられている。)だから党が社会、社会発展の基礎・母胎・階級闘争の根拠の如く描き出され、歴史が党の歴史に切り縮められ、党と階級が混同され—第二次ブンドの裏返し—、世界党一軍建設とその発展の延長上に共産主義社会の実現が展望され、現実の社会・階級・階

級闘争はそのための外的条件、場として扱えられるのである。(この観点から、レーニンの「社会主義を党の手で導入することはできない。社会主義を導入することは、幾千万人が自分でそうすることを学びとった時に、彼らだけがなしうることである。我々は彼らが自分でただちにこの仕事に着手するのをたすけることを目標にしている」という見地が批判されている。)

世界党一軍対世界ブルジョアジーの闘争、他はそのいずれかに動員される対象として、一群の大衆をなしている。そしてまず世界党一軍の闘争を開始せよ！これがその呼びかけである。

こゝでは「プロレタリアートの階級闘争の意識的表現者としての共産主義運動」という見地が捨て去られている。共産主義運動の原則的立場を確立するというこゝ、現存の労働者階級の階級闘争を發展させ、その利益を擁護し、同時にそれをこの原則的立場のもとに統率し抜くことによって、労働者運動全体の未来の利益を体現するということが、一緒くたに混同混乱されている。(これは綱領改正をめぐるブハーリンの見

していくために当面の敵を打倒し、当面の革命任務を実行していく闘いを、プロレタリア階級の前衛部隊として最前線に闘い、彼らをそれに組織し、動員し、教育して、団結と解放闘争の能力を高め、鍛え上げ、革命を闘い取り、前進させてきたのである。

第二に中国共産党と民族解放闘争の対象化を、国際共産主義運動の総括の中心問題として押し出したことは、パンフレットの欠落・弱点、もしくは歪曲からして必然的であった。パンフレットが、ロシア革命一根据地国家の出現を根拠として、世界武装プロレタリアートへの成長とその高次な自然発生性を中心内容として、その「根拠地国家」が、とくに三十年代、第二次大戦の大反動・後方への呼び戻しを転回点として、スターリン主義一現代修正主義として成長転化してきた中で、どのような潮流と闘争によって世界革命の發展の血路が切り開かれてきたのかを明らかにしえないという根本的弱点をもっていた。第二次綱領論争は、それを共産主義運動の側から、中国共産党と民族解放闘争として明確にすることによって、克服しようとし

地の一層の極端化であろう。」「階級社会の發展一プロレタリアートの階級闘争一共産主義者の能動的実践は、後者から領導されて歴史的發展をとげる」とはどういうことであろうか。「全世界で交換と商品生産の發展が支配的な歴史的現象となったということ、それが資本主義に導き、この資本主義が帝国主義に成長転化したということ」、そして資本主義の発生と共に、賃金奴隷制の輻に対する労働者階級の闘争も始まり、資本主義の成長と共にその闘争は増大し、帝国主義への移行はこの闘争を直接に社会革命の時代へ導いた。たとえこの過程に様々なジグザグ、曲折があったとしても、これが一般的に世界史的見通しである。共産主義者の実践は、この階級闘争の目的意識的実践は、この階級闘争の経済的基礎に対する階級的批判によって、階級利害の対立の非和解性の核心を明らかにし、この闘争の到達目標とその現実的諸条件をさし示し、労働者階級にその偉大な使命を果す能力を獲得させることを任務として、彼らの闘争を、この目的に向けて目的意識的に組織化し、統率し、系統付けて推進し、この目的を達成

たのである。

しかし中国共産党の対象化が、民族解放闘争一プロレタリア文化革命、国際共産主義運動の総路線一九全大会の闘いと、思想的政治的立場一綱領的戦略的立場及び党派闘争、それらの發展、その中で培われ發展させられてきた革命思想と実践経験の教訓として汲み取られるのではなく、革命闘争と組織の形態一陣型形態に一面化されている。又民族解放闘争についても、民族解放闘争の發展内容とそれがもたらしたプロレタリアートの解放闘争・世界プロレタリア革命の發展、その内容、それが国際共産主義運動に投げ与えている課題と任務、又民族解放闘争がつくり出した、帝国主義社会帝国主義を打倒するプロレタリアートの世界階級闘争の相互関係と性格、国際的な諸努力の相互関係と党派闘争等の観点からではなく、運動構造一陣型の形態の問題に一面化され、かつそれが直接的に普遍化されている。

いままでもなく、革命闘争の形態と組織の形態は、歴史的経験の具体的総括を通して教訓化され、その中

から主要なもの・普遍的なものを汲みとり、自己のものとしていかねばならず、それは現在のためばかりではなく、将来に備え、準備するために重要である。しかしそれを共産主義論とすることはできないし、又革命闘争と組織の形態を、革命の性格と内容、具体的な社会政治的条件、闘いの歴史的發展過程から切り離して類型化し、普遍化することはできない。革命闘争の形態をどこでも一樣のものとして一律化し、あらかじめ定まった道を歩むと予定し、その実現を内容におきかえること、又それを平板に世界化すること、そうした機械的唯物論は、真に労働者人民大衆に依拠しえず、自己を書斎の中で空想的計画を編み出す革命の錬金術師や、コスモポリタンの戦闘団に転落させてしまいかねない。

第二次綱領論争は、この第一と第二の欠陥から、自己の実践的立場を、中国共産党の歴史的实践の立場にのり移させてしまった。八世界武装プロレタリアートの綱領が六九年の敗北と共に国際根拠地建設の方針を生み

主義の実現に求め、その大衆への浸透を党の指導性にかきかえ、又規律を現在の階級闘争の最前線にあって敵と対峙し、かつ労働者階級を権力主体へと高め上げ鍛え上げ抜くべく組織し、活動する戦闘組織の規律・党の政治的任務の実行・ブルジョアイデオロギーとの闘争、組織の防衛のための闘争、党の政策・戦術の実行と検証等々によって規定され、鍛えられる規律から絶対的な抽象的な規律へと転落させ、組織上の極左無政府主義へ、更に思想的にも人間主義や無政府主義に城を明け渡す結果に導いていく。そして更に戦争―政治―生産の一体的組織化が、独立戦闘団の共同生活、イデオロギー・戦闘―労働の一体化へと類似される規律が共産主義として、革命的实践の根拠・核心にまでロマン化されるのである。

第四に、第二次綱領論争が八持久戦の観点をもち、七〇年前鋒の一揆主義の傾向を批判したのは全く正当なことであった。だがそれが階級闘争・革命闘争にとって基本的事柄として、その総体の発展の問題として扱えられず、もっぱら軍事的観点から扱えられ、

出し、この総括が実践的立場ののり移りを帰結し、それは後には、ベトナムからの先遣隊として一握りのゲリラとして実践に移されることとなる。こののり移りは、国際階級闘争に対する自己の政治的立場を根拠地国家においた時から一貫し、労働者人民大衆から分離すればするだけ完成されていったのである。(そしてそれが目的意識性と錯誤されたのだ。)この欠陥は、共産主義運動としての自己の原則的立場をもたないこと、国際プロレタリアートの団結と共産主義の勝利への不確信、プロレタリア階級に対する不信であり、日本革命運動―日方階級闘争の真剣な総括の欠陥、そして具体的に階級分本・階級闘争の情勢を分析できないこと、あるべき理念や自己の気分と願望に基いて頭の中でねり上げられた計画の実現を階級闘争と考える観念論、総じて小ブルジョアの浮動性に根拠をもっている。

第三に以上から空想的な共産主義論、党母胎論が導かれる。即ち党―軍一体化の組織構造の中の規律として共産主義が過程的に実現されていく見地がそれである。それは革命的实践の核心・根拠を党内―隊内共産「レーニン主義」速決戦戦略」との対比において主張される時、持久戦の内容が曖昧模糊とならざるを得ない。レーニンが述べているのは、「全線にわたる頑強で、持久的で、ひたむきな闘争によって敵を追撃し」「どの爆発や沈静の時期にも自己の基本的任務を一瞬間も見失うことなくそれに適応し」、「長期にわたる堅忍不拔の闘争によって組織され、教育され、訓練されたプロレタリアート」によって革命は闘い取られること。革命的戦術としての蜂起は内乱の過程の中にそり立つ環であり、それは歴史の圧縮された特異な―決して例外的ではない―一時期、革命的情勢の、それも危機が頂点に達した瞬間に闘い取られるべきでありそれは徹底的に速決で攻撃的でなければならぬということである。まさに破綻したのは、わずかの戦線しかわがものとしえず、余り訓練も教育もされていない政治的急進主義者たる我々の、主観的願望に彩られた自然発生的戦術である。(言うまでもなく、今日の国際階級闘争―帝国主義・社会帝国主義を打倒し、世界革命の勝利を闘い取っていく闘争は、一層大規模で、

激烈で、複雑で、広範囲にわたり、一層持久的である。)だから持久戦を階級闘争の全般的な内容として明らかにし、戦略的観点に立って党—階級—大衆の相互関係を堅忍不拔の闘争によって歩一歩でのように鍛え上げるのか、その下で現時期の階級闘争の情勢に対して、どのような戦術を打ちたてるべきかとして問題にされない限り、無意味でさえある。(持久戦√の観点から、どのような分析に基いて七一—七二年連続蜂起の戦術が打ち出されるかである。)

第五に、第二次綱領論争のもう一つの欠陥は、現実の階級闘争の情勢が力学的にしか把握されていないこと。全てが軍事の況態的側面から分析・評価されていること。というよりも、階級分析・階級闘争の情勢の分析がないことである。だから自分達がどのような階級の運動に立脚して闘争をおし進めているのか、全く曖昧化され、消し去られさえしている。こゝでは「国内で行動している現実の諸階級、歴史によってある相互関係におかれている現実の諸階級を考慮することに基づかないで、抽象的な観念(日帝や革命戦争につ

対する立場の主観主義的な軍事第一・軍事一点張りの観点を継承し、一層徹底化したのである。

そして「党—軍一体化の組織構造」は、確固たる思想的統合の下に軍事活動を党活動として、政治的組織的に統率し抜き、非合法党建設をおし進めるというよりも、戦闘団をいかに建設するかと軍団長会議(中央委員会等として、戦闘団主義へ純化することとなった。そのため自己を政治的に表現し、組織的結びつきを保持するには、軍事作戦以外にはなく、従ってそのために軍事作戦を遂行するということに行き着かざるをえなくならなかった。そしてこのことが「建党・建军—遊撃戦√として体系されるのである。

いての抽象的な観念——筆者)に基づいて綱領や活動計画を立てる」(レーニン全集二巻)ことになっていく。だから自己の活動任務も、抽象的側面だけが抽出されている。要するに武装闘争についての主観的な意味付けと正当化・決意の論理と、どういう形態で行なうかが全てである。

赤軍派の解体を引きおこし、第二次綱領論争を「根本的総括と論争」として生み出した根拠を汎ゆる側面から総括すること、又日本階級闘争の総体を具体的に総括し、分析すること、現在の情勢及び党—階級—大衆の相互関係を明確にすること等が捨象され、力学主義・軍事一点張り・武装闘争形態論に徹底化されているのである。その意味で第二次綱領論争は基本的、パンフ四と六九年秋の敗北の敗北に関する七〇年初頭の総括(パンフ五七)の枠内において、その欠陥を毛沢東—中国共産党の対象化と党(①軍)の強調、党(①軍)母胎論によって補完し、七〇年前蜂の破産を持久戦と連続蜂起もしくはゲリラ戦へと修正し、そうすることによって、七〇年初頭の総括の、階級闘争総体に

第八章 「建党・建軍」遊撃戦」路線

八一〇 七一年階級闘争と武装闘争

第二次綱領論争に一定の終止符が打たれると共に、具体的を戦闘行動の開始への要求と熱望が強まり、それと共に連続蜂起かギリギリ戦かの論争が激化し、とくにM作戦を経て、「建党・建軍」遊撃戦」路線としてまとめ上げられることとなった。その背景・根拠・契機となつていたのは、米帝のラオス侵攻にインドシナ革命戦争の反攻が勝利的に進撃し、インドシナ中国朝鮮の国際統一戦線が、その戦略的高地・最前線の力を浮きぼりにし、米帝の敗退が誰の眼にも明らかになつたこと、そしてこのことが帝国主義の世界体制の再編——とくにアジアでの——と、日帝のアジア侵略反革命を一段と切迫したものと、欺瞞的沖繩返還を強行突破せんとする佐藤政府の△反動と暴力▽がその重圧を更に強めたこと。他方、六九年秋敗北以後の日本階級闘争の構造的な再編がその深部から徐々に、しかし不可抗の力をもつて進み、これを表現し、かつおし

革命的積極性の多くは、労働者運動との結びつきが少なく、理論的にも実践的にも余り経験と訓練を積んでいない。多分に自己の熱烈な憤激と熱情に拜跪した。浮動性をもはらんだ若い闘士達であつた。そしてその戦闘行動と活動計画は、足場をしつかりと築き上げることのないままに、サークル的な基盤の上に開始され、多少とも長期的全般的な計画と展望に統率されないままに進められた。この戦闘行動への気運を突撃への行動は、日共革命左派神奈川県委の統率取闘争と交番襲撃・統率店襲撃によつて具体的に切迫したものととなりまさにそれが第二次綱領論争を「建党・建軍」遊撃戦」へと転化させたのであつた。(その意味ではこの実践化の過程自身、これに突き動かされてなし崩し的になされていつたのであつた。)この「建党・建軍」遊撃戦」は、このよりの欲求を最も徹底して、意識的に押し進めたものであつた。しかし、問題はこの革命的積極性をもつた欲求を、厳格な思想的組織的条件を付与して、政治的組織的に鍛え上げ抜くこと、その内部にはらまれてゐる浮浪人的傾向と闘い、その影響から防

進める新たな前進への力と要素が、沖繩コサ暴動決起全島ゼネスト、三里塚強制収容阻止闘争の火花、狭山差別裁判糾弾の高裁包囲の闘い、或いは平和台闘争・日産車体の季節工の闘い等を初めとする下層労働者プロレタリアートの闘い、軍事的・官僚的警察の抑圧との対峙を深めたこと。六九年秋を闘い、敗北を経験した勢力の中に、一時的打撃から回復すると共に、更に前進しようという欲求、もう一步突き進もうという欲求がみなぎり始めたこと。しかし、この欲求がその前進の内容と根本方向を意識化しえず、又とりわけこの前進を培い、意識化し、組織化し、鍛え上げるべき、△指導▽革命的左翼の無自覚、墮落の進行の下で、何よりもまずこの欲求は、警察力の重圧を突破する戦闘行動への自然発生的要求として、闘争手段、闘争形態の尖锐化と高度化への自然発生的要求として現われ出たことであつた。しかし、この真剣な戦闘行動への

衝しつ、階級闘争の深部からの構造的再編を意識化しそれと結びつき、自己の階級的立場を打ち鍛えつつそれを押し進める力として鍛え上げ、前進的力、要素を汲み尽しその燃え上りと結合し、それを力強くするものとして、かつ全般的火事を執拗に準備し、その全般的活動と計画に統率され、系統付けされたものとして貫くこと、そして何よりも革命党建設を前進させ鍛え上げていく闘いを押し上げ、その意識性に統率された闘いとして貫いていくという点にあつた。この点からみれば「建党・建軍」遊撃戦」路線は、戦闘的な自然発生的傾向の最も徹底した代表者であつたが、同時にそれへの拜跪として内的に矛盾したその弱点をも徹底化したものとして、真にプロレタリアートの階級闘争の側への移行、その推進力、その意識的表現者、プロレタリア階級の前衛党へと自らを鍛え上げていくものになりえなかつたのである。そして内的矛盾と分解自己の階級的立場、思想的政治的立場の曖昧化を拡大していかざるをえなかつた。九・一六 三里塚はそれをこえて、真に革命的闘争として燃え上つたのであ

る。

我々は今、この路線を①綱領―戦略問題②戦術問題③組織問題の観点から総括しておこう。

△二▽ 「建党・建軍―遊撃戦」路線

① 綱領―戦略問題

「建党・建軍―遊撃戦」路線は第二次綱領論争を継承しつつ、更に次の方向で徹底化具体化されている。

a 武装闘争 共産主義とし、それとプロレタリアートとの結合を追求する。(新聞赤軍八号) b 武装闘争―共産主義の実践者たる党―軍としての「一握りのゲリラ」は、ベトナムを先頭とする民族解放―社会主義革命戦争を世界革命戦争の進攻へとおし広げる。世界赤軍の日本先遣隊であること。この「一握りのゲリラ」の独立した権力闘争が人民戦争に発展していく過程を、日本革命戦争論、その戦略として確立するということであつた。

第一に、我々は、先遣的に武装闘争の実践を即共産主義運動とすることはできない。武装闘争は階級闘争

それを打ちたて、更にそれを打ち固める武装闘争である。(たとえ自衛的闘争であつてもそうなのである。)

その意味で単純な反権力主義とは異なる。

だが全ての武装闘争があらかじめ無条件的にこのことを保障されているのではない。レーニンは「共産主義運動は小ブルジョアの戦闘力を組織するのではなく、ただプロレタリアートの戦闘力を組織すること」そしてこのプロレタリアートの戦闘力の独自性を守り抜き、そのもとに小ブルジョアの戦闘力を従属させ、統率し、教育すべきことを強調し、そのために闘争手段、闘争形態の問題に際して、必ずそれに激格な思想的、条件を付与し、「ブルジョア社会における汎ゆる闘争手段、闘争方法について、それをたえず社会主義の啓蒙し、組織化する影響力によつて純化」し、階級性を保持純化することを要求したのである。(それなしには、プロレタリアートをその上、又はその下の非プロレタリア層に近づけ、消耗され、けがされ、だいなしにされてしまふのだ。)(又そもそも政治的急進主義者や経済主義者のテロリズムに、暴力とテロルを決し

の一定の発展段階において行使される闘争手段、闘争形態であり、マルクス主義の国家学説は、強大な暴力機構を中軸とするブルジョア国家権力は革命的暴力によつて打倒され、プロレタリア権力はこの革命的暴力に直接に立脚すること、搾取者の武装解除と被搾取の武装はプロレタリア革命の根本問題たることを教えている。そしてこれを実現する武装闘争を最も偉大な革命行為として無条件に承認する。又直接にそれをめざすものでなくても、闘いの種々の発展段階における武装闘争を断固として承認する。だがそのことは、敵権力に対する全ての武装闘争が無条件に共産主義運動であることを決して意味しない。共産主義者がめざす武装闘争は、ただ単に敵に対する武器をもつての闘争というだけではなく、搾取され、抑圧された大衆の、自覚し、団結し、組織された力、その革命的積極性と英雄主義に立脚し、それを鍛え上げ、プロレタリア階級を支配階級へと高め、鍛え上げ、組織していくことに系統づけられた武装闘争である。プロレタリア階級の権力樹立への道を開き、それに向けて進出させ、又

て否定することなく、何故反対したのか。)問題は同時にこの武装闘争を組織し、統率する思想―政治―組織であり、又それをたえずどのように鍛え上げていくのかであるのだ。だから先験的に武装闘争を即、無条件に共産主義運動とすることによつて、それを組織し、統率する自己の思想的立場政治目的、党建設を解消し、軍事第一の観点へ、自然発生的論の見地に転落し、遂にこの闘争に買かれ、保持されるべき階級性をも曖昧模糊とってしまったのである。だからそこからは軍事作戦の遂行が唯一の政治活動、思想的―政治的基準、組織的結びつきとさえなつていき、又そのためのために軍事作戦が追求されることになつていくのだ。

第二に、bの見地は空想的なコスモポリタニズムである。問題は民族解放―社会主義革命戦争との結束を闘い取ろうとする。自己の国際共産主義運動―国際階級闘争に対する立場であり、又この立場を日本革命運動の総括を通して鍛え上げることであり、更にこの立場に支えられて、日本労働者階級を抑圧民族のプロレタリアートとしての国際主義的任務に基いて組織する

こと。そして日本革命の戦略問題 権力問題を確立しつつ、労働者階級人民大衆に徹底的に依拠して、自力更生の日本革命の実践をおし進めることである。bの観点では日本階級闘争・権力問題は全く無視され、そもそも、プロレタリアートが自己を解放するためには、先ずもつてブルジョア国家への隷属を打ち切るべく闘わねばならないという意味も見失われるのであり、更には革命主体としてのプロレタリアート、彼らの現実の苦悩・呻吟・解放の力も又消し去られてしまうのだ。

「革命の錬金術師」の観点に転落してしまいかねないのだ。これは階級闘争の経済的基礎に対する階級的批判を基礎にして、今日の世界階級闘争を具体的な諸層階に則して特徴づけ、それを土台として日本の階級分析、日本階級闘争を特徴づけている諸矛盾、国家権力の構造―国家権力と諸階級層の相互関係を明らかにして、自己の実践的立場―プロレタリアートの任務を打ちたてていくのではなく、一側面・一面的現われだけを取り出して、「世界革命戦争」についての抽象的観点から出発して頭の中で組み合わせ、それに現実をお

わせようとする傾向の行きついた地点であつた。闘争形態の世界的拡大過程として世界階級闘争の発展を把握する見地であり、更には自己の実践の立場・拠点・根拠、根拠地国家や、中国革命戦争や、そしてベトナム革命戦争に求めてきた。我々の過渡期世界論―攻撃型階級闘争論ののり移りの論理―これは民族問題をめぐつて、破産が徹底的に暴露されているのであるがの行きついた地点であつた。そして「一握りのゲリラ」の現実性はそこにこそ求められているのだ。

第三にこの「一握りのゲリラ」の闘争が「独立した権力闘争」として位置づけられた点について、この「独立した権力闘争」とは、全ての大衆運動、現実の労働者階級から△独立した権力闘争、ゲリラたる党によつてのみ実行される権力闘争ということである。これはまぎれもなく、かつての「中央権力闘争」↓「前段階蜂起」の自然発生的性格を克服せんとして、その観点・論理を一層徹底化したものである。だが一切の大衆闘争、現実の労働者階級から独立した権力闘争はそれ自身論理矛盾であり、プロレタリア革命・プロレ

タリアートの権力獲得のための闘争から背理するものであり、政治闘争を政治的陰謀にかえ、自己を労働者運動に立脚する革命党ではなく陰謀家にかえ、少数のインテリゲンチヤのテロリズムに道を開けるものである。そしてそれ自身の内容と目的、階級的性格を曖昧模糊としたものへ導いていかざるをえない。問題は共産主義運動としての確固たる思想的政治的立場に立脚して、自己の共産主義的活動を労働者階級の闘争の基礎の上に置き、共産主義的活動と民主主義的活動を結びつけて、プロレタリアートの単一の階級闘争として組織し、階級闘争の一切の現われを権力問題へ、革命的政治へと統率し抜いていくこと。言いかえれば労働者階級の現実の運動・大衆的労働者運動に献身的に参加し、それを発展させ、その一切の内容を汲み取つて共産主義運動の側から対象化し、権力問題へと統合していくこと。まさにこのことを労働者階級の前衛的の中核 党組織として物質化し、鍛え上げ、党―階級―大衆の相互関係を権力闘争の陣型へと鍛え上げていくことである。△独立した権力闘争√は、権力闘争を準備

し、組織する党の独自性、党建設と、この党をそれに向けてたえず高め上げていく闘いの独自性へと克服されねばならない。

第四に、日本革命の戦略問題とは、革命闘争の形態の発展過程を前もつて予測し、描き出すことでは決してありえない。そうすることは、「この国で行動し、歴史によつてある相互関係におかれてある現実の諸階級を考慮することをもととせず、（「革命戦争」といふ、或いはいつの）抽象的觀念にもとづいて綱領や活動計画をたてることであり、「前もつて予知することは不可能でもあり無益でもあるような幾千の条件に依存する」ような問題について、未だ検討を加え、判断を下す材料も生み出されていないような問題について、前もつて論議し、あらかじめ決定し、現実の運動をその観点から解釈し、その方向に沿つて進むように型にはめ、手をしばり、労働者階級とその運動から自己を切り離すものである。そしてeで指摘した問題と結びついて、最もまずい闘争方法を選ぶことになるのだ。

革命の戦略問題は、何よりもまず、当該社会の種々な階級について、それらの階級の相互関係について、それらの階級相互の闘争について、この闘争における労働者階級の役割について明らかにし、当面する革命の性格、革命の敵―主体―友の相互関係、革命の諸任務、言いかえれば打倒すべき権力の性格と構造、特質、社会―階級の基礎、打ちたてるべき権力の性格と任務、指導的階級と主要な友と組織されるべき同盟を明らかにすることである。革命戦略問題を闘争形態の発展過程についての、頭の中で考案された主観的願望の図式におきかえること、これは又階級闘争をたえず力学の問題におきかえてきた力学主義の帰結である。

② 戦術問題について

「建党・建軍―遊撃戦」路線は、前段階蜂起及びそれは多少異なるとはいえ連続蜂起の戦術の、非現実性、急進主義的一掃主義の克服、リアリズムへの接近、頑強な持久的闘争の観点に立とうとするものであつた。しかし、それがプロレタリアートの階級闘争の戦術としてではなく、単純な軍事的見地、軍事的技術的見地から

把えられ、戦術の問題が軍事的技術的準則の問題に解消されてしまつたのである。

確かに我々が真剣に武装闘争を敢行する時、軍事的技術的準則をふまえ、それをわがものとし、軍事的合目的性に合致することは極めて重要である。しかしそれ自身、常にプロレタリアートの階級闘争とその戦術の基礎におかれ、その実行方法となるべきであり、決してこの技術的準則が、階級闘争を、その戦術を規定するのではないのだ。それは階級闘争を軍事力学に解消することを帰結し、又冒険主義へ導いていくのだ。

次に闘争手段・闘争形態の問題について、我々は、「汎ゆる人民運動はたえず新しい諸形態をつくり上げ古い諸形態を捨て、いろいろの変種や古い諸形態と新しい諸形態の新しい組み合わせをつくり出して、無限に多様な形態をとるということ……我々の責務は闘争の方法、手段をつくりあげるこの過程に積極的に参加することである。」「マルクス主義は多種多様な闘争形態を認めるものであるが、その際それらの形態を『思ふつ』ではなく、運動の過程で自ら生ずる、革

命的諸階級の闘争形態を普遍化し、組織化し、それに意識性を与えるにすぎない。」というレーニンの指摘を完全に承認する。即ちゲリラ戦は何かそれ自身独立してあるのではなく、人民運動の一形態として、他の様々の諸形態との絡まりあい、組み合わせにおいてこそ存在するということ（又その中でこそ政治的意義を明らかにするものだ）だからゲリラ戦だけを取り出し、抽象化し、他の一切を否定し、ゲリラ戦の自立的発展を抽象的に展望してあれこれ『思ひつく』ということ

は、自身が人民運動に立脚しよとしていないことを意味し、又人民運動から自己を切り離す結果に導き、他方ではゲリラ戦であれば一切正しいという観点に導く。だが一定の闘争手段、闘争方法が正しいか否かは、技術―軍事的観点からのみ評価することはできない。

（たとえどんなに熟練された完べきな戦闘であつても、そのみでその政治的意義、革命的意義を保障しない）それは常に具体的な歴史的情勢の下で、進行中の大衆闘争の具体的な発展段階において、その発展の利益から具体的に判断されねばならない。ここでは我々は特

に次の事を導きの糸として強調しておきたい。「マルクス主義的戦術は、様々な闘争方法を結合し、ある方法から他の方法へたぐみに移行し、大衆の意義をたえず高め、その集団行動の巾をたえず広めていくことにある。この集団行動は、その一つ一つを別にとり出せば、あるいは攻撃的であり、あるいは防衛的であるが全体として益々深刻な、益々断固たる構突へ導いていく。」

ここでは、我々はむしろ次の事を指摘しておかねばならない。「現在我々は、国際共産主義の立場からみて、極めて堅固な、極めて強い、極めて強力な活動内容をもつてゐる。だからこの内容は、新しい形態であれ古い形態であれ任意の形態でもつて現われることができるし、又そうでなければならぬ。又この内容は汎ゆる形態を、新しい形態ばかりでなく、古い形態をも再生させ、征服し、従属させることができるし、又そうしなければならぬが、それは古い形態と調和をはかるためではなく、新しいものも古いものもありと汎ゆる形態を、共産主義の完全な最後の、決定的な、永

久の勝利のための武器とするためである。……右翼的な空理空論は頑固に古い形態だけを認めて、新しい内容に目をつけなかつたため徹底的に破産してしまつた。左翼的な空理空論は、一定の古い形態を無条件に否定することを固執しており、新しい内容がありと汎ゆる形態を通じて自分の道を切り開いていくことがわからず、共産主義者としての我々の義務は、全ての形態を自分のものにし、最大限に早く一つの形態で補い、一つの形態を他の形態に代え、我々の階級又は我々の努力によらないで引きおこされる、こうした一切の變化に自分の戦術を適応させる仕方を学ぶことだということがわからない。(共産主義内の「左翼主義」小児病)我々は、自分が新しい内容と考えたもの しかし、これは全く曖昧で漠然としており、明確にされていかずたえず形態の問題として取り上げられたのだ。

とありと汎ゆる形態を通じて実現し、全ての形態をこの新しい内容によつて統率することを追求せず、新しい内容を一定の形態に限定し、一方では一定の形態から新しい内容が必ず生まれるといふ自然成長論に陥

のとして闘われるべき武装闘争が、建軍―革命戦争として全般的路線として提出されうるには、それは既に階級闘争の一定の発展段階、即ち労働者階級を先頭とする人民大衆の大衆闘争の、全般的な一定の発展段階を前提とする。即ち階級矛盾が極度にまで激化し、階級闘争が頂点に達し、権力獲得の問題が直接さし迫つた問題となり、敵階級・反革命との軍事的諸衝突が端的に開始され、様々な遊撃隊や戦闘自衛組織を生み出しつつある(或いは客観的にみて大衆の緊急の要求となつてゐる)という情勢・革命の始まり、内乱の始まりを。危機の発展、革命の大衆運動の発展が内乱に転化しつつあるという情勢を。その時には、建軍―武装闘争は、全階級闘争を規定する全般的な、かつ中抽的課題として精力的に実行に移されねばならず、軍事的目的性は決定的な要求となるであろう。(ザッパヤレスアンも述べてゐるように、その際にも種々の発展段階を考慮に入れ、武装勢力と政治勢力、軍事闘争の重点・結合正しい相互関係をつくり出さねばならぬ) 建軍や革命戦争は決して主観的決意や願望のみ

つてこの内容を不明確にし、他方では新しい内容を非常に狭め、それが階級闘争全体の中に浸透し、豊富化し、発展していくことを否定してしまつたのである。

最後に我々は次の事を述べておきたい。我々は武装闘争一般を抽象的に問題にすることはできない。戦闘を一定の具体的な歴史的情勢、現実の階級闘争の具体的情勢、労働者階級人民大衆の運動の発展状態から切り離し、抽象的に論じ、その発展の展望を描き、行動の指針としていくことは、プロレタリアートの階級闘争と無縁な、階級―階級闘争の観点なき、軍事力学主義と革命的冒険主義をもたらず。我々は、具体的な行動の指針は、革命の諸原則を堅持し、具体的な階級分析・階級闘争の情勢の分析・一定の運動の状態の分析に立つて導かれるべきだと考える。我々は武装闘争を常に具体的情勢における具体的戦術の問題として、プロレタリアートの権力獲得に向けられた全般的攻囲・攻撃の中に位置づけられ、具体的な攻防の環につきささり総体の前進と進攻 何よりもまず政治的な を導引する闘いとして闘われねばならない。そのようにも

によつていつても実現されうるといふのではない。それは運動の歴史的發展として生み出されるものであり又その基盤の上で主体的に組織されるものである。革命への献身、熱意、犠牲的英雄精神、強固な自覚と組織性と決断力、実行力をもつた党が、革命的階級の大衆の、自覚し、団結し、組織された力、その革命的エネルギー、英雄主義、革命的積極性と創意・創造力に立脚し、結びつき、組織するのである。時期尚早の、これに立脚しえない、主観的願望にのみ導かれたそうした試み、軍事的熱中は決して長続きすることができず、成算ある成果も生み出しえないものである。七一―二年の情勢にあつても、まずもつての重心は、革命的階級の大衆の部隊を結集し動員すること、その革命的積極性と英雄主義を培い、それと固く結合すること、革命の政治軍を創設し拡大すること、その実力を蓄積し、高め上げること、大衆を「武装して敵を攻撃しよう」といふ燃えるような欲求で自己武装させ、この欲求を自覚的な政治的組織的なものとして鍛え上げること、大衆的諸衝突の中に準備と組織性、計画性を精力

的に持ち込むこと、及び真の意味での党建設と固く結びつき、その一環として軍事の技術機構を組織していくこと、そして最前線を形造っている運動において具体的に要求される環において、大衆の積極性・英雄主義・創意性に立脚し、かつ厳格な思想的組織的条件を保持して断固たる武装闘争を貫徹することにあつたのである。この基本骨格は現在も尚変わっていない。一層真剣に、一層精力的に、一層堅忍不拔に、一層確固たる階級的立場に立つておし進めることが要求されているのである。

③ 組織問題について

我々は一般に、より強力な闘争手段・闘争方法は、より強力な、より堅固な組織を要求し、既存の組織を試練にかけるものであることを確認できる。又組織形態が革命闘争の任務と形態に応じて変化し、それに適応できる柔軟さをもつべきことも確認できる。しかし又我々は、どのような闘争手段・闘争方法を用いるべきかという点と、△組織▽建設とは別の事柄だと考える。何故ならどのような闘争手段・闘争方法を用い

るべきかという問題は、あくまで階級闘争の発展の見地、ある運動の一定の発展段階における戦術の問題として把握されるべきであり、他方△組織▽建設は、闘争手段・闘争方法の問題に解消されない、独自の思想的組織的闘争を不可欠とするからである。(勿論組織は闘争を通して成長し、鍛えられる。しかしそれは増独自の思想的組織的闘争の強化を要求する。他方では限りに満ちた、失敗に終らざるをえない闘いは組織に打撃を与え、誤解をひき起す。)

△建党・建軍▽遊撃戦は、旧来の組織観点なき、革命的実践の核心に△党組織▽を対象化しえない戦術主義を克服せんとして、裏返された誤りに陥つたのである。即ち建党、建軍のために遊撃戦によつて建党・建軍を進める△建党・建軍としての遊撃戦という観点は、一方ではこの遊撃戦を現実の情勢・運動の状態とは無関係に、プロレタリアートの階級闘争と無関係に、主観的、意欲的に設定され、選びとられるものとし、その大衆的点検、検証をも不可能とし、他方で独自の頑強な思想的組織的闘争なしに、遊撃によつて

自然成長的に建党・建軍が進むかの如き、自然成長的組織観点に陥つたのである。それは不可避免的に思想的結束を弱め、政治活動の中を狭め、主観的義にし、組織の強化、発展を闘争手段・闘争方法のエスカレートに委ね、階級闘争全体に対する観点・立場を喪失し、戦闘団主義と決意主義と技術上の尖鋭化に向わせ、技術的熟練—これ自身は重要であるが—と尖鋭化に組織全命運を委ねることとなつた。

この「建党・建軍—遊撃戦」路線の主要な問題は、軍事活動をいかに組織すべきか、軍事組織をいかに建設すべきか、軍事をいかに統率すべきかということであつた。だが一般にどんな闘争といえども、それは常に大衆の革命的積極性・創意性・英雄主義と、党の意識性・組織性・計画性との結合であるが、それは軍事にあつても決して例外ではなく、よりその強固な、高度な結合が要求される。前者に立脚しえない軍事は単なる一時的陰謀に終らざるをえず、後者によつて統率されない軍事は、自然発生的爆発にとどまらざるをえない。軍事活動にあつても、党—階級の相互関係は尤

えずふまえられねばならず、他の諸活動との関連において、全般的活動内容・活動計画の一環に組織されねばならない。軍事活動によつて他の一切の活動を代行させることはできず、又軍事活動を組織された政治的力の基礎を離れてとりあげることにはできない。

しかし、又軍事活動は極めて真剣な、困難な活動であり、それは非常に頭強さ、計画性・系統性を、秘密性・陰謀性を、高度な技術的要素を要する。従つて我々が、蜂起・革命戦争の政治的準備の時期において軍事活動を組織するというのは、まずもつて、革命的諸活動の一環として、軍事の技術的側面(軍事工作)を長期にわたつて計画的系統的に組織し、一步一步組織的に蓄積し、軍事の技術機構を党の一組織機構としてつくり上げることである。軍事カードルを戦闘団として組織することではなく、軍事活動・軍事の技術機構の組織者として育て上げ、組織することである。又帝國主義軍隊内での工作を組織し、秘密の党組織を建設することである。更に大衆の強固な政治勢力の中に、闘争の激化、その要求に応じて様々な階梯での戦闘自

衝組織を創設していくことである。(軍事の政治的側面は、階級闘争の基本的問題として、党一階級総体の問題としてたてられねばならない。)

このことは当然にも、一層強固な革命的組織——一層強固な思想的結束を確保し、政治の巾を広げ、権力問題一戦略的観点に立つてより広汎な革命的諸活動を調整と系統的に組織し、中央集権的組織性・規律性を鍛え上げ、革命的階級の中に堅固な基礎・より深い支持と信頼をかちえる革命的組織へと、党組織全体を高めて上げていくこと。そしてより広い、より強固な、人民大衆の政治的部隊を築き上げていくことを要求する。この関係は具体的な活動・闘争・戦闘の諸経験と、党内の頑強な粘り強い、思想的組織的闘いによつて鍛え上げられていかねければならない。言うまでもなく、この戦闘は決して軍事組織によつて請負われる特殊なものではなく、大衆の革命的積極性・英雄主義・創意性と固く結びついた、党総体の政治的組織的に集中された闘いとして実現されるべきであり、その技術側面を軍事組織が支え抜き、統率し抜くのである。勿論そ

る戦闘団建設、戦闘団から党へと定式化し、この党を隊内生活の共産主義に求めることになつたのである。

以上「建党・建軍一遊撃戦」路線は、運動の一層の前進への要求を、その戦闘的突出によつて表現し、その火花——とくに六・一七——となりつつも、まさにそれをプロレタリアートの階級闘争の意識的表現者へと鍛え上げ、階級闘争の一切の現われを統率し、それらを単一の、真の意味での階級闘争へと打ち鍛え組織化していくという方向・その指導的核へと自らを鍛え上げていくという方向へ踏み出すのではなく、軍事活動一建軍と単純な軍事的観点に彩られたゲリラ戦という戦闘形態を直接に結びつけて、その閉じられた円環の中に自己を局限し、現在の労働者階級人民大衆とその闘いから自己を切り離し、一方ではそれを軍事力学観点からする「革命戦争の発展形態」の主體的な展望に「戦略」化し、他方では隊内共産主義、その人民への波及・普遍化として「綱領」化し、軍事活動の技術的熟達・尖鋭化を「組織」論化し、一つの体系Vにまで高めたのである。そしてこの過程で、革命的情

の重点のおき方、活動全般での比重・実際の諸機能等は、階級闘争全体の発展段階・水準・それが党に課す任務によつて変化していくものであり、あらかじめ絶対な準則を定めることはできない。

「建党・建軍一遊撃戦」は、この軍事活動・軍事組織の側から強固な革命的組織の問題を提起しつつも、遂にそれを軍事活動の枠内、その抽象化・ロマン化と技術的練磨この点では驚くべき精力をもつて、多大の成果と教訓を生み出した——としてしか提起しえなかつたのだ。だから軍事活動をいかに統率すべきかという問題について、思想・政治政策一綱領・戦略・戦術の問題としてたてることができず、又それを体現し、実行していく組織の建設としてたてることができず、隊内共産主義の実現という、小ブルジョアの観念論へ母胎論へ陥つたのである。「前衛(個々の前衛的分子のことか、? 筆者)の軍人化、軍の中の党」というスローガンは現在の組織をいかにして真にプロレタリアートの前衛的中核部隊に党へ、変革し、鍛え上げていくのかということ回避し、個々人の決意によ熱と勇敢さ、戦闘精神に満ちながらも、労働者階級の階級闘争にとつても、又我々の組織的前進にとつても、何の成果と利益もたらさないばかりか、多大の無益な犠牲と打撃をもたらした、M作戦や七・三〇平和台事件等をもたらしたのであつた。まさにそこに、我々がどの階級の立場に立ち、どの階級の利益のために、どの階級の解放闘争として、どの階級のどのような力に立脚して、又それを高め発展させるべく闘おうとしているのかをいう、根本問題における根本的欠陥が暴露されたのである。我々はこれを根本的に、徹底的に、思想的実践的に克服し、変革し抜くべく、頑強に、執拗に、徹底的に闘わねばならない。その事を通して、その基礎にたつて「建党・建軍一遊撃戦」路線の下で、最大の(いや唯一の)というべきか)精力、驚くべき情熱と精力を傾注してつくり出された革命活動の技術的側面についての成果と教訓を学び取り、摂取していかねばならない。

第九章 連合赤軍——新党結成と同志殺害・銃撃戦

七一年八月、赤軍派中央軍と日共革命左派人民革命軍は連合赤軍を結成した。

これは、戦術的軍事的共闘としての連合であると同時に、党的合同をめざしこの第一歩としての連合であった。この連合は「統一赤軍」軍の合同か、「連合赤軍」軍の戦術的共闘かという論争をはらんだまま遂に十二月末、党的合同——新党結成へと到つたのであつた。そしてその下での戦闘の飛躍の追求は、一方での大量の同志殺害へと、他方での未曾有の銃撃戦へと到り、同志殺害の腐臭と銃撃戦の炎の中に自己を解体し尽し、一つの革命運動の歴史に終止符を打つたのであつた。

我々は今、この過程について、その細部にわたる真実の姿を、その全貌をいまだ知り尽くすことはできないけれども、明らかにされている文書と事実を基礎に以下の四点を総括しておきたい。即ち、

があつたのであり、党の水準・革命運動の水準が烙印されていたのである。

連合赤軍結成の基軸は次の三点にまとめられる。

一つは、鉄砲を握り、警察・自衛隊・米軍に対する本格的武装闘争——ゲリラ戦を遂行し、「革命の魂」としての「人民の軍隊」を即出すること、その下に全人民を統合することである。

二つは、中国を大後方とし、ベトナムを大前線とする革命戦争の進攻に呼応し、米帝の後退——日帝の進出と対決する遊撃戦を戦うことである。

三つは、前衛の軍人化と軍の中の党である。

さて、連合赤軍の結成が政治路線の問題を曖昧にしたところに問題の本質があるのではない。問題は鉄砲を握り「敵軍事力を一歩一歩かじっていくゲリラ戦」を行なっていくことを無条件に、最大或いは唯一の政治的基準とし、その軍事組織・ゲリラ戦をこそ全人民を統合する最大の核心としたこと、又そうせざるをえなかつたところにあつたのである。

更にいえば、それまで政治路線と主張されていたも

- ① 連合赤軍結成の根拠と意義。
- ② 日共革命左派へ神奈川県委への批判的検討。
- ③ 新党——へ革命戦争の党への結成の総括。
- ④ 同志殺害と銃撃戦の歴史的 성격

△—▽ 連合赤軍結成の根拠と意義

連合赤軍の結成は一定の政治路線の一致に基く政治上の統一戦線（更には党合同に向けた過渡形態）を基に、その一環として軍事組織の緊密な連合が闘いとられたのではなくて、むしろ逆転した関係、即ち相方が軍事組織を組織し武装闘争——ゲリラ戦を追求しているという現実の共通地盤に立つての軍事的観点から、何よりもまず軍事組織の統合と武装闘争——ゲリラ戦の緊密な提携をめざし、そのことによつて一つの政治的潮流と政治的ヘゲモニーを作り出すものとして結成されたのである。またそのことにこそその基本的な特徴

がこの一点に凝縮せざるをえなかつたところに問題の根本はあつたのだ。即ち、権力問題を階級支配の構造の問題として把握することができず、経済的基礎から切り離してへ階級への観点を曖昧化したこと、権力問題を軍事力に直接に実体化して敵軍事力と一群の大衆と把握、それに対する戦闘性、軍事力の組織化に自己の革命性の唯一の基準を見出したこと、そうせざるをえなかつたところに問題の根本があつたのだ。

右の意味で、ここには最も徹底した、最も誠実な戦闘的民主主義派としての姿、水準が鮮明に烙印されているのである。その意味で連合赤軍の結成は、かの三・

二テーゼ、五一年綱領と同一の水準に、否、一層純化し、概念化し、尖鋭化して自己を位置づけ、戦闘的突撃を志向したのである。又、そこに赤軍派と日共革命左派の合流の真の根拠と意義もあつたのだ。我々は既に八革命的左翼への中で、それがどのように発展され、赤軍派によつて純化され、突出されていつたかを明らかにしてきた。我々はそれを、後に日共革命左派の批判的検討を通して一層明らかにするであろう。

だが、ここで我々にはもう一つの点にふれなければならぬ。それは我々が主要に世界革命を強調し、日帝自立論と社会主義革命を主張して進んできたのに対し、日共革命左派は主要に一国革命を強調し、従属国規定、反米、愛国、民族民主革命を主張して進んできたことである。この相違はどのように「解決」され「解消」され、或いは後景に追いやられたのか。それは主要に米帝の世界戦略とインドシナ・中国・朝鮮の反米反日本軍国主義統一戦線の中で把握された、日本の国家権力の特質と日本階級闘争の政治的任務として積極的に克服されていったのである。しかし問題はその先にあった。即ち、我々は根拠地国家中国に、ベトナム革命戦争に自己の立場を置いて、それを世界革命戦争の進攻へ切り開く日本先遣隊——握りのゲリラとして自己を位置づけ、この観点から反米反日帝を主張し、それによつて漠然と社会主義革命の道が開かれるという徹底したコスモポリタニズムの傾向をもつていた。

他方、革命左派も又、自己の立場を中国において、(事実、このことは「根拠地問題を国際的観点で、中

国に見出すことによつて解決した」と主張された)「米帝の侵略戦争を革命戦争で打ち破る」との観点から、一握りの少数精鋭のゲリラとして自己を位置付け、その遊撃戦が漠然と広大な反米愛国闘争を呼びおこすという見地に立つていた。

その意味で、右の二つの路線上の論争——歴史的に継統されてきた——は本来権力問題と革命の性格をめぐる論争であるにもかかわらず、自己の立場を中国、ベトナムに根拠づけ、その「一握りのゲリラ」の武装闘争をば、漠然たる社会主義革命や民族民主革命——反米愛国によつて政治的に意味づけようとするものになつたのである。だから、急進的コスモポリタニズムと戦闘的民族主義は、日本プロレタリアートの国際的任務に基いた日本革命の戦略問題へと克服されるのではなく中国、ベトナムに自己の立場を根拠づけた戦闘的民主主義の中に融合したのである。

こうした政治的傾向を思想的かつ組織的に表現するスローガンこそ「前衛の軍人化と軍の中の党」であつた。これは第二次綱領論争における党—軍一体化の組

織構造(党が軍をつくり、軍が党をつくる。)に「人の要素」——人の主観的能動性——が結びつけられて、建

党・建軍の思想、組織論として提起された。それは一言でいえば「ゲリラから党へ」という戦闘団主義の組織思想であるが、問題は次の四点において現われた。

一つは、軍事組織それ自身を党的基準、最大の思想的、政治的基準とせざるをえなかつたことである。

二つは、軍事組織の建設を、個々の前衛的分子の主観的決意→軍人化に委ねざるをえなかつたことである。三つは、この軍事組織の発展、或いは軍事組織の党的表現を共産主義化——隊内共産主義の実現に求めざるをえなかつたことである。

四つは、これら全体を貫いて、たえず個々人の主観的決意と自己否定——自己変革としてしか問題をたてることのできなかつたことである。徹底した小ブルジョアの主体性論の思想に立脚せざるをえなかつたことである。そのために抽象的に、概念的に「人の要素」「人(人間一般)の主観的能動性」が強調されている。

② 日共革命左派(神奈川県委)の批判的検討

我々は、連合赤軍の結成を総括するためには、どうしても日共革命左派の批判的検討を避けて通ることはできないと考える。なぜなら、七〇年十二・十八以降連合赤軍を最も首尾一貫して体系的に代表してきたのは、むしろ日共革命左派であつたと言いうるからである。たとえそうではないとしても、連合赤軍が日共革命左派を一方の基軸とし、赤軍派自身がそれに大きく影響され、吸い寄せられ、融合していったのは疑いもない事実だからである。

そこで我々は日共革命左派について、その「反米愛国——遊撃戦争論」について検討を加えておきたい。この「反米愛国——遊撃戦争論」は次のように主張されてゐる。

(a) マルクス主義の核心はプロレタリアート独裁の学説即ち国家と革命に関する学説である。↓革命の根本問題は国家権力の問題であり、国家権力の本質は暴力であり、その中心は軍隊、軍事力である。↓軍隊、軍事力を握つてゐるものが権力を握つており、今日の日本

では在日米軍・自衛隊の指揮権等は米帝にあり、日本の国家権力は米帝が握っている。

(b) 政治は経済の集中であり、軍事は政治の集中である。↓故に、軍事力を米帝が握っているということ。政治的にも経済的にも米帝が日本を支配していることを意味する。だから今日の日本の基本的矛盾は、米帝と日本民族の矛盾である。↓当面の日本革命は民族民主革命であり、それは米帝の支配から民族的解放を達成し、一部親米独占資本、軍国主義者等かいらい売国勢力を一掃する革命である。この革命には労働者農民を中心に中小ブルジョアジー、更には愛国的独占資本も参加する。(若しくは中立化させる。)

(c) 革命の根本問題は敵軍事力をせん滅し、味方の軍事力を打ちたてることである。プロレタリアート独裁とはつまるところ軍隊を持つことであり、軍隊さえ握つておれば徐々に社会を改造していくことができる。プロレタリア階級の指導権は軍隊を保持していることによつて体现される。

(d) しかし、現在敵軍事力は強大で、味方の軍事力

だが、これと同じ意味で「軍事は政治の集中であり従つて軍事は政治に対して優位に立たざるをえない」と言ひうるだろうか。もしそう言うならば、我々は軍事によつて政治を統率し、軍によつて党を統率するという観点に立たざるをえない。そこでは軍事の階級的、政治的性格が無視され、曖昧化されざるをえない。けれども「戦争は別の手段をもつてする政治の継続」であつて、政治の延長、凝縮であり、政治・階級・独裁の手段・道具である。政治とは階級支配の問題であり(だからこそ、それは経済に基礎づけられている。)

階級独裁の問題であり、階級闘争の内容の問題である。軍事は常に政治に規定されるのであり、その形態であり、その延長である。

上記(b)の観点は右の観点を転倒し、軍事から政治・階級支配・階級闘争の内容を規定しようとしている。軍事は階級支配の、あくまで道具であるということが忘れ去られている。軍事から八階級Vが導かれているのである。そしてこの観点は次のような自然発生性に導いていく。即ち、まず軍事的に闘うことが他の全て

は弱少でゼロに近い。↓故に遊撃戦争で徐々に敵軍事力をかじつて、味方軍事力を拡大していく。↓建軍遊撃戦争を闘うことによつて、それを中軸とする反米愛国の強大な統一戦線が実現されていく。↓これらは、現在米帝の侵略戦争が益々拡大し、日本軍国主義をそれに動員していきつつある中で「侵略戦争を革命戦争で打ち破ろう」のスローガンに集約される。(以上)

「政治は経済の集中であり、従つて政治は経済に対して優位に立たざるをえない。」(レーニン)これは権力の獲得と共産主義社会の組織化をめざすプロレタリアートの闘争の目的意識性を示すものであり、プロレタリア革命における上部構造の土台に対する能動性、主導性を示すものである。このことから次のごとから導きだされるのである。即ち、プロレタリアートの一切の闘争はプロレタリア政治によつて統率されねばならず、又社会主義建設の過程での経済活動もプロレタリア政治によつて統率され、導かれなければならないこと。あらゆる闘争、あらゆる領域のあらゆる活動における党の指導性が不可欠であることである。

の闘いの出发点・原動力であり、それは無条件に革命的、目的意識的な闘いであり、又そのことによつて必ず自然発生的に反米愛国闘争を呼び起し、かつ、あらゆる種類の自然発生的闘争を反米愛国闘争として統率する。ア・プリオリな軍事的闘争と幅広い反米愛国統一戦線。何故なら、軍事闘争は無条件にあらゆる闘争の上に立ち、あらゆる闘争を規定し、統合するものなのだから。そして軍事闘争は無条件に最も反米愛国的闘争であり、これによつて全ての政治経済関係は暴露されるのだから。これこそがレーニンのいう「社会民主主義的政治」の欠除であり、経済主義とテロリズムではないか。

更に問題を進めよう。

マルクス主義の学説の眼目がプロレタリアート独裁にあることは全くそのとおりである。だがそのことは我々に、レーニンの次の指摘を踏まえることを要求する。

「『資本主義社会と共産主義社会との間には、前者から後者へ革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この過渡期の国

「それはプロレタリアートの革命的独裁でしかありえない」マルクスのこの結論は、近代資本主義社会でプロレタリアートが演じている役割の分析とこの社会の発展についての事実、プロレタリアートとブルジョアジーとの対立する利害の非和解性についてこの事実とにもとづいている。

或いは又、

「プロレタリアートの独裁を認めることは、ひとりプロレタリアートだけが真に革命的な階級であるという『共産党宣言』の命題最も緊密に、切つても切れないうように結びついている。」

更には、この見地は、

「この革命的暴力の経済的基礎、その生命力と成功の保証であることは、プロレタリアートが資本主義に比べると、一層高度の型の社会的労働、組織を代表し、実現しているということである。ここにこそ核心がある。ここにこそ力の源泉があり、共産主義の不可避的な、完全な勝利の保証があるのである。」

「勝利したプロレタリアートは所有（資本主義的所

関係を形成するようになり、彼らを現実の階級闘争の中で打ち鍛えると同時に、階級闘争を常に全人民的政治闘争として、階級闘争総体を政治権力闘争として形成させねばならないということを意味している。

しかし、プロレタリアートを支配階級へと高める、組織すること。労働者階級を内乱・蜂起—プロレタリア権力樹立へと向かわしめ、その主体へと高めていかねばならないのである。労働者階級とそれに率いられた人民が支配階級を打倒し、自己の支配をうちたてること。国家権力の、一つの階級から他の階級への移行。これが革命の根本問題が国家権力の問題であることの意味である。

だからマルクス主義では、国家権力の本質は暴力であるということと同時に、国家権力は階級支配の道具、搾取階級の支配の道具であるという二つの見地が結合されている。そして、まさにこの階級支配の基礎として資本制生産様式が暴露されている。

他方、暴力としてこの国家組織は警察・軍隊・官僚制度・監獄・裁判所等として構成されており、プロレ

「有と地主的所有」を廃止し、これを徹底的に破壊したが、ここにこそプロレタリアートの階級支配があるのである。何よりもまず所有の問題にあるのである。所有の問題が実際に解消されたこと、そのことによつて階級支配が保証されたのである。」等々として買われている。まさにそうした見地に立つて、プロレタリアートの自覚した団結、中央集権的組織性・勤労大衆に対する指導的・教育者的・組織者の役割を、プロレタリア独裁の根本要件として主張したのである。

「階級闘争を認めるだけではマルクス主義者ではなく、プロレタリアート独裁を認め、その樹立への闘争、革命的实践をなしりる者でない限りマルクス主義者ではない。」というレーニンの言葉は、労働者階級の闘争の長い日々における資本主義批判の実践的展開の物質化が国家権力闘争に収れんされることを意味しており、階級闘争が政治的分野をとらえるだけでなく、国家権力の構造をとらえる全人民的政治闘争となること、従つてマルクス主義は労働者階級を権力主体へと高めるべく闘わねばならず、労働者階級が直接権力との攻防

タリアートはそれらを粉々に打ち砕き、自己を革命的暴力へ、中央集権的組織性をもつた権力組織へと組織しなければならぬ。ただ、我々はそれが具体的にどのような攻撃方法・どのような闘争形態・どのような過程をもつてなされるかについて、我々の頭の中でひねり出すことは出さないし、又それは無意味である。革命的階級の大衆運動の諸経験が提供する様々な素材によつて我々はそれを解決していきるのである。

いずれにせよ、国家権力の構造という時、それは経済的土台に基礎づけられ、階級関係・諸階級の相互関係を含んだ階級支配の構造として把握されねばならない。我々がこのことを強調するのは、我々が単純な反権力主義に陥ることのないよう、あくまでプロレタリア独裁と共産主義社会の組織化をめざすプロレタリアートの階級闘争の見地を貫くためである。

軍事を、軍事力を具体的な全階級関係から切り離し抽象化してそれ自身として独立的に実体化し、そこから自己の基本的実践方針。路線を導こうとするのは素材機械的唯物論である。上記 a b の観点はまさに

それであり、そこからは「軍隊対人民」という図式が生まれてこないのだ。国家権力を階級支配の道具としてではなく、階級支配の根拠、本源と捉え、更に軍隊をその核心とすることによって、軍隊こそ階級支配の根拠、本源とされ、軍隊Ⅱ階級支配の主体、とされているのだ。現実の具体的な、生きた階級、階級関係階級闘争は、敵軍事力に対する人民の闘争ということに一面化される。Ⅷ階級Ⅴの観点は解消される（実際、この図式の下では、労働者はどこから自己の階級意識を汲みとるのか。）ここでは、政治Ⅰ階級性を問題にすべきところであるのに、軍事がその論拠として押し出され、それが軍事を統率すべき政治だといわれる。だから、この観点は軍事によって軍事を統率するといふ結論に至るのだ。

軍事、軍隊によって政治（権力）Ⅰ階級が規定され統率されるのではなく、逆に政治（権力）Ⅰ階級が軍事、軍隊を規定し、統率するのであり、プロレタリアートの階級性を徹底的に明確にし、鍛えあげることこそ決定的な問題なのだ。

ロレタリアートの階級闘争、階級的独自性に関する見地がないのである。それはまさに、純然たるナロードニズムであり、小ブルジョア社会主義である。

これと関連して、前記Gの点については、次の事を強調しておきたい。

「社会民主党は決して小生産者の『戦闘力』を組織しはしない。それはただ、労働者階級の戦闘力だけを組織する。」レーニンはこの観点からバルチザン戦争についても、その戦闘力の階級性をいかに保持し、純化すべきかについて強調したのであつた。

我々はあくまでプロレタリア階級の戦闘力を組織するのであり、他の階級と同盟するとしてもⅠそれは全く必要なことであるがⅠそれはプロレタリアートの階級的法則性を鍛え、その一層の進出と指導力を強めていくためである。そして他の階級を自己に従属させ、その先進的諸分子をプロレタリアの側に移行させていくのである。

プロレタリアートの階級的独自性を曖昧にすることは、とりもなおさずプロレタリアをブルジョアに従属

革命左派の観点では、あたかも様々なウクライドが機械的に併存しているかの如く、親米独占資本・愛國独占資本・中小資本家・農民・小自営業者・労働者を並列的に並べたて、それらを米帝に対する関係において敵、味方に振りわけける。そして国家権力は社会的、階級的基礎の全くひ弱なものであるとして、米帝に全面的に掌握されており、純然たるかいらい勢力がそれに引き寄せられ、結びあつているとする。他方では、労働者農民・都市自営業者・学生・インテリゲンチヤ等といった様々な社会層が同列化され、人民という曖昧な概念によつてくぐられていく。労働者階級は数的に多い、単なる一社会層として、他の社会層と融合せしめられている。又、種々の政治的諸現象、諸特質は、その最も深い経済的基礎から明らかにされるのではなく、かいらい勢力の恣意や主観として説明され、帝國主義の基本的、政治的、経済的特質そのものが政策の問題に解消される。基本的な階級関係Ⅰ経済的に基礎づけられたⅠも、ばらばらな諸勢力の羅列に変えられる。

要するに、ここには基本的な階級、階級支配、プ

させていくことを意味する。

革命左派の諸君は、どこかで「広範な反米愛國統一戦線におけるプロレタリアートの指導性は、軍隊を掌握していることによつて保証される。」と述べている。だが、今問題になつているのは、この軍隊、その戦闘力の階級性は何によつて確保されるのか、ということである。革命左派はそれを抽象的な、観念的な思想共産主義論に求めたのであるが、一体この共産主義の思想と反米愛國とはどのように内的に関連づけられたのであろうか。

プロレタリアートの階級性を曖昧にすることは、とりもなおさず小ブルジョアの戦闘力に引き下げることの意味するのであるが、一般に革命左派の場合は、資本主義がたえずブルジョア、小ブルジョアイデオロギⅠを生み出し、プロレタリアに押しつけることを軽視している。労働者は一方で資本主義批判の実践的展開を行いつつも、労働者自身がたえずブルジョア、小ブルジョアイデオロギーによつて汚され、消耗され、だいなしにされていること、だからそれと必死に闘い、

自己の階級性を純化し続けなければならぬことを軽視している。

いかなる軍事力も階級性を曖昧にして論じることができない。プロレタリアートの階級闘争を離れて敵軍事力の消滅や味方軍事力の創設を問題にすることはできない。

「支配階級の打倒をめざす革命的暴力とは、(革命的階級の) 大衆の、抑圧され搾取される広範な大衆の暴力である。党の指導の下で、彼らは無数のやり方でその力と決意を発揮する。最善かつ最も革命的な方法は、状況に最も適した形態の暴力を創造し、組織しうるもの、大衆の力を最大限に動員して支配階級に進攻し、最もよい条件で革命に勝利をもたらすものである」(レ・ヌアン)

最後に

革命左派の「遊撃戦争の戦略」はプロレタリアートの階級闘争の戦略、戦術の見地に基礎づけられていない、典型的な軍事第一主義の観点である。なぜなら、それは具体的な階級闘争の歴史的発展段階、具体的な情

自己の主観的な革命的願望、熱意に立脚したものであることが明らかであろう。

そしてそれは又、革命左派の綱領的立場の帰結でさえあるのだ。なぜならそれは「客観的事態と客観的進化過程とを分析する場合完全な科学的冷静さと、大衆の……革命的精力、革命的創造力、革命的創意の意義の最も断固たる承認とを結合させる」基礎をもたないからである。

③ 新党——八革命戦争の党V結成の総括。

九・一六 三里塚の偉大な闘争、十一月における連合赤軍の闘争の「挫折」と、無党派独立戦闘団への指導力の後退及び彼らの独立化の傾向は連合赤軍の中に焦燥感をも生み出しつつ、戦闘と八建党—建軍Vの飛躍に向けて、山岳への結集と新党の結成へと進んでいった。

新党結成は既に連合赤軍結成によつて踏み込まれていた軌道であつたが、特に具体的契機として、七一年秋の闘争への総括態度として押し出された。

六・一七爆弾闘争の炎が新たな戦闘行動への決起の

勢、政治的・階級的諸条件から出発するのではなく、教条と八革命戦争Vについての抽象的觀念と、そして機械的な純軍事的対比と軍事的諸条件から出発し、その力学的発展過程を他の一切の諸条件と切り離して独立的なものとして抽象化して、一つの戦略にまで体系化しているからである。

かくして、これらの全実践を集約するスローガンたる「米帝の侵略戦争を革命戦争で打ち破れ!!」という内容を、革命左派の綱領的立場と結びつけて理解すれば、米帝の日本民族に対する侵略戦争を民族革命戦争で打ち破れ!!ということである。これこそまさに、自己の立場をベトナム—インドシナ人民に移行させた立場であり、日本の社会的、政治的諸条件、基本的階級関係、階級闘争の情勢をそのように把握していることを示している。この立場の乗りうつりと、そこから提起されているこのスローガンは、革命左派の戦術が決して(日本の)プロレタリア階級の階級闘争に立脚したものでなく、米帝の侵略革命戦争に対する自己の熱烈な義憤と、戦うベトナム人民に対する同情と

気運を呼び起し、人々をして一層勇敢な奮起と創意へ駆り立てた。その中には含まれている浮浪人的傾向の危険(例・朝霞自衛官攻撃等)を全く寄せつけない持続性・頑強さ・大衆性・意識性・組織性をもつ三里塚の闘いは、その真に底深い根本性・大衆性・持続性によつて、これらの気運・奮起・勇敢さ・創意を引き寄せ、凝縮し、九・一六の偉大な炎を実現した。

この九・一六の闘いの中に、六七年来八革命的左翼Vと結合して頑強に、持続的に闘われ、徹底的に培われ鍛えあげられてきた、自覚し、組織された大衆の力と七一年四月—七月の八革命的左翼Vの新たな前進、跳躍の試み、運動が結合し、一体に融合して、七月—八月の激しい緊張をもつた、し烈な対敵・ゲリラ的諸戦闘と試練のるつぼを通して成長し、八革命的左翼Vと日本階級闘争総体の限界は、この飛躍と前進地点をどのように継承し、打ち固めるかを要求した一〇—十一月沖繩闘争の中で露呈されたのである。

三里塚では、「長年にわたる堅忍不拔の闘争によつて組織され、教育され、訓練された」大衆の革命的精

力、革命的創造力、革命的創意が基礎をなしており、たとえ三里塚の闘いが局部的であつたとしても、その闘い自身が全国の労働者階級・動労大衆の階級闘争―更には国際階級闘争における自己の位置、意義、任務の自覚に基いて、その利益でもつて徹底的に自己を統して闘うことによつて、その闘いは紛れもなく一つの全国性、更には国際性を持ちえたのである。だからこそそれは九月の全ての闘争、諸戦闘を自己の闘争の一環引き寄せ、転化した。そうして又、「人民大衆が革命の政治目標に対して目覚める時、又彼らが組織され、断固として闘いに立ち上る時いかなる兇暴な敵にも打ち勝つ力をもつものである。」(ケエン・ザップ)を事実をもつて示したのである。

△革命的左翼Vの誠実な部分は、自己の意識性をのりこえたこの闘いに献身的に参加し、その中に意識性組織性、計画性をもちこむべく努力し、自らその要索となることによつて大きな役割を果たした。しかし、それをどう普遍化し、全国の労働者階級の中に持ち込み、自らを鍛え、とりわけ十一月の沖繩闘争の中で自

が、敵から武器を奪い、飛躍をかちとつた主体によつてのみ奪取した銃々として、その奪取した銃々を使用して敵を殺し、敵を殺すことで日本革命戦争―味方の飛躍を切り拓くことができる……

銃による主体の変革と主体の発展による銃の発展『プロ独を生み出す銃』の相互媒介的關係が主張されている。「銃によるせん滅戦」が階級闘争の具体的な情勢や諸条件、政治目標や政治的任務等と無関係に、それら全ての上に立つ抽象的、絶体的なものとして提起され、一切がそれに収れんされ、「銃によるせん滅戦」が無条件的に階級闘争全体、その政治的発展、統率・索引の中心に、又党建設の中心におかれている。

だが、「鉄砲を指揮しうる党」の建設を「銃によるせん滅戦」のものに求めることは、逆に「鉄砲が党を指揮すること」に導いていく。そして新党は「銃をもつこと」それ自身、「銃によるせん滅戦」それ自身を基準―最大の、或いは唯一の―にして結成された。それはまぎれもなく戦略上の軍事無政府主義―労働者階級の権力樹立に向けた、自己の全般的な政治活動

らのものとして打ち固めるのか、自己の新たな進路の第一歩を踏み出すのか、について答えることができなかった。このことは他方少数の無党派独立戦闘団の中に浮浪人的軍事行動への傾向を増大させた。

この時期連合赤軍は沈黙を保った。十一月の戦闘行動の計画も挫折した。当初の全都―全国ゲリラ戦線を組織する方針は、独立戦闘団グループの一層の独立化によつて後退した。革命戦線のグループとの内部論争意見の相違も激化し、深まつた。まさにこれらに対する一つの凝縮された態度こそ新党―△革命戦争の党V結成であつた。

七一年新党結成直前の一二・一八集会への赤軍中央軍アビールは「銃にたるせん滅戦」を一切の中心に押し出し、他の全てから切り離し、全てをそれに凝縮した。そこには新党結成の一中心内容が示されている。

爆弾闘争では戦闘グループしか生れず、軍は生まれにくいこと。軍になるには銃を持たねばならず、銃によるせん滅戦を闘わねばならないこと。「銃によるせん滅戦

任務から切断され、自己目的に抽象化され、戦略化された軍事―の徹底化であり、それが銃それ自身の中に思想―政治の根拠を見出す唯銃主義として凝縮したのである。(その根底には、権力問題と労働者階級闘争に関する、素朴な機械的な即物的見地がひそんでいる。政治的急進主義の徹底化である。)

だが、このような「銃によるせん滅戦」の唯一無二の政治的基準化と「プロ独の銃」をめぐる観念的・ロマン主義的唯銃主義、軍事・銃のロマン化による党結成は、一体何に基いてその団結を確保するのか。何によつてその銃撃戦を闘う団結を鍛えあげるのか。

「日本階級闘争の中で、かつてないシレッと権力と攻防を通じて我々がかちとろうとし、その端緒にいた革命戦争の党建設、その内実としての『共産主義化』の闘いは、敵権力に対する銃を軸としたせん滅戦以前に、我々自身に死にもの狂いの闘争を要求していつた。この闘いの中で彼らの死は、決して反革命や個人の卑劣な人問性の問題として片付けられるものではなく、文字どおり生死をかけた革命戦争の主体構築の

闘いの中に刻み込まなければならぬ。」(森上申書)この「共産主義化」は既に人民革命軍の中で「銃を握り、銃による~~之~~激戦を闘いうる」思想の獲得、共産主義的人間への変革として進められていた。だが抽象的な「銃を握り、せん滅戦を闘いうる」思想の獲得とは、つまるところ諸個人の情念・情熱・決意を促進し、打ち固めようという以外のものではない。

軍事行動が抽象化され、ロマン化され、エスカレートされるだけ、組織の基礎、闘争の基礎に諸個人の情念が置かれざるをえなくなり、その徹底化自身が生み出す組織無政府主義、個人主義による組織困難、危機！それは政治警察の弾圧、追求によつて加重された！は水平主義をもつてそれを克服しようとする志向を不可避に生み出す。そして共同生活による、あるべき「共産主義的人間関係」の実現、「共産主義の母胎としての隊内生活」の実現こそが一切の矛盾を克服し、「死を覚悟し、生を期して」「勝利か死か」の~~之~~激戦を戦いうる絶対的な団結を作り出す。この純粋な共産主義的人間関係を規律によつて実現すること。まさにこれ

部分的修正が無意味であることだけを指摘しておく。なぜというに、ここで突き出されている問題は、共産主義運動の根幹、最も基礎的な思想的立場に関わるものだからである。それを問ひ、明確にしておくことなしには、真に根本的な総括はありえないであろう。私の総括も結局のところ、この一点に集約されるのであり、その故に、この一点に関わる我々の立場を明らかにしてきたのである。そこで、ここでは補助的に以下の点についてふれておきたい。

第一に、我々は、レーニンがくりかえし行つた警告、政治活動の基礎に情念をおいてはならない、革命の戦略と戦術の基礎に情念をみなくてはならない、という警告を、深く胸に刻み込まねばならないこと。(それは、我々が総括の最初の出発点におこうとしたものでもあった。)

我々にとつて必要なことは、たえずプロレタリアートの階級闘争の真の利益を体现する思想的—政治的立場を明確にすること、その際における最も厳密な科学

らのことが「共産主義化」の内容とされている。

「規律による純粋な共産主義的人間関係—共産主義の母胎としての隊内生活の実現」こそが最高の団結であり、闘いの源泉であり、生死を賭した~~之~~激戦を支えるものであり、△死△の現実性、個別性を越える絶対性、普遍性とされている。即ち、「革命戦争の党」の内実である。だからこそ△革命戦争の党△を構築する「共産主義化」の闘いは、死にものぐるいの闘いであつたのであり、この観点からすれば、規律の違反者、共産主義化しえない者とは、共産主義的人間関係・共産主義化の破壊者であり、更に革命戦争の党の破壊者△銃による~~之~~滅戦△の破壊者である。そして「共産主義化」とは、それとの死にものぐるいの闘争とみなされるし、この闘争を通してこそ△革命戦争の党△が構築されるものだつたのである。

これは、まさしく徹底した論理であり、又この論理に徹底的に忠実に実践されたのであつた。

我々はこれについてもはや多くふれる必要もないであろう。ただ、我々は部分的総括や、部分的批判や、はそのためにこそ積極的な思想闘争を主張し、党内闘争を主張するのである。それは矛盾をなくすためでもなければ、「共産主義化」のためでもない。それはひたすら、階級社会である以上諸階級の思想的—政治的傾向が当然プロレタリアートの党内にも反映し、様々な意見をつくり出すからである。(特に、情勢の急激な変化の時には、それは鋭いものとなる。)

かかる様々な意見に対して、プロレタリアートの党は、党内闘争、党内の思想闘争によつて、この意見の相違を明確にし、その中からプロレタリアートの階級闘争の真の利益を体现する思想的—政治的立場が何であるかを明確にし、つかみとり、その下に意見の相違を解決し、強固な思想的—政治的統一を獲得していき、それを基礎にして組織性と規律を高めていかねばならない。その際において、真に唯物論的な態度、厳格な科学性こそが唯一の導きの糸となるであろう。

第二に、連合赤軍の山岳集結について、我々は単なる技術上の問題としてでなく、又単なる誤りとしてではなく、基本的な敗北として把える。なぜなら、山岳

集結は、

a 党派としての思想的、政治的解体の進行の結果であり、思想的統一性・中央指導の解体が組織上の分解、分散化を招いていたことの結果であつたこと。その克服が、まさに徹底した水平主義としてしかなされえなかつたこと。

b かつ、この思想的政治的解体、組織的分解をいつて、政治警察の攻撃が加えられ、この組織上の困難の解決としての山岳への集中は、それ自身が既に、政治警察との組織的闘争の敗北的表現であつたこと。

c 更に、この山岳への集中は、共同生活による隊内共産主義の実現——「共産主義化」として思想化されたことに思想的、政治的、組織的指導が解消されたこと。山岳集中——共同生活それ自体が目的化され、基本路線化されたことである。

我々は自己の思想的、政治的立場をたえず明確化し純化し、鍛えあげ、その確固たる統一性によつて結束を強化しなければならぬ。かつ、それをたえずプロレタリア階級の中に蒸餾づけ、自己の共産主義的活動

基礎となるものである（勿論それは必ず社会的現実、階級闘争の現実を対象化し、階級闘争の正しい実践を打ちたて、実践によつて検証されねばならない）。他方規律問題は、現実の階級闘争の最前線にあつて権力と対峙し、同時にプロレタリア階級を、プロレタリアート独裁樹立（蜂起——プロレタリア権力樹立を核心とする革命戦争）の闘いへと組織し抜いていく目的意識性によつて規定づけていく戦闘組織の規律として、具体的に打ちたてられ、解決され、点検され、鍛えあげられねばならない。

第四に、連合赤軍における思想問題と規律問題の混乱——規律による「共産主義化」という事柄は以下にその根拠をもつていた。即ち、その思想的政治的立場が同時に社会的立場を対象化しえていないこと、思想的政治的立場をも対象化し、抜くものとして獲得しえていないこと。従つて、自己の思想的政治的立場と社会的立場との分離の徹底化——プロレタリアート独裁の觀念化・空語化——に根拠をもつていたのである。（我々が、原則的な資本主義批判を基礎におく、というこ

をプロレタリア階級の斗争の基盤の上におき、その中で物質化し、多面的な活動を組織すること。そして情報と指導の中央集権化と機能の分散化、活動における各組織員の創意性の結合、各々の活動の自立性とその中央集権的集中性・統一性との結合をめざして、組織の基本性格と骨格を形造つていかなばならない。

第三に、規律について。

思想的に解決すべき事柄を規律によつて解決しようとすることは、次のような弊害を生むことを指摘せねばならない。即ち、一方で党の団結の源泉、自覚と積極性、英雄主義の源泉であり、階級的立場を打ち鍛え階級闘争の正しい実践を明確にしていく思想問題の粘り強い解決を放棄し、真の自覚と団結を崩すものであり、他方で規律を抽象的、絶対的規律へと変質せせしめるものであることを指摘せねばならない。

思想問題はあくまでも思想問題として解決する以外に、他の何ものによつても代行することはできない。そして思想問題の解決こそが、たえず全ての出発点

との意義の一つはその点の克服にあるのだ。）

連合赤軍の同志殺害をもつてする組織解体、破壊は、武装闘争をテコとして、プロレタリア運動をプロレタリアート独裁に向けた階級闘争へと推し進めていく、最も確固たる推進者へと、六〇年代へ革命的左翼Vの運動を高めあげていく道へ踏み出そうとしつつも、まさにその時に、自己の小ブル的共産主義思想、急進主義的政治傾向を徹底して癒しがたい内的矛盾に陥り、それを最後の結論にまで徹底化することの中に、自己の歴史的位階と党的内容を明らかにしたのであつた。そして、最もひたむきな、最も凝縮された格闘の中で自己の破綻を明らかにしたのであつた。

最後に、あの銃撃自衛戦闘こそは、自己の破綻、敗北思想的路線的誤りにもかかわらず、尚かつ革命運動の利益を守り、自己の歩んだ道の歴史的役割と敗北を全うし自己の革命精神を守り抜いた英雄的闘争であり、献身性と英雄主義の発揮であつた。（このように受けとめることはA支持Vとは全く別の事柄である。）

連合赤軍は、敵権力とその暴力とに対し、自己の力の

最後まで尽して敢然と闘い抜いたこの銃撃自衛戦闘によつて、自らを生み出した革命的左翼の十数年の革命的伝統―それがどんなに弱点と限界をもつていたとしても―を守り抜き、その歴史に連なっている勇敢で、献身的で英雄的な諸戦士の名誉と伝統を守り抜いたのである。そうして、自己の革命運動、革命戦士としての名譽を明らかにしたのである。

たとえ破綻し、敗北がもはや明らかになつたとしても、その時点において尚、自己の力の及ぶ限り、敵に對して闘い抜き、自己の運動の歴史的水準を階級闘争の歴史の中に刻みこみ、その遺志と教訓と再生をプロレタリア階級の手に乗ねるこの英雄主義を、我々は胸に深く刻みこみ、あらゆる場で、あらゆる部署で培い發揮していかねばならない。

我々は別の道を通つて、別の進み方で、別の立場と力を基礎として、連合赤軍の遺志を繼承し、教訓をわがものとし、プロレタリア階級、人民大衆の偉大な解放戦争として実現するであろう。そのためにも我々はこの破綻を根本的に克服せねばならず、我々の道、我

第十章 総括のまとめ―我々の立場と進路

総括を終るにあたって、この数年間の我々と現地点に對する概括的のまとめをもって、我々が今どのような道に進み出していくべきかを示し、総括の結論としておきたい。

七〇年代初頭の一時期は、國際共產主義運動にとつても、大きな成長の試練にさらされた時期であった。六〇年代の前進過程とその頂点に闘い取られた爆発をどのように教訓化し、もう一步の前進として打ち固めるのが、帝國主義と社会帝國主義の反撃、世界的布陣の再編攻撃、反革命の強化との熾烈な組織的激闘の中で、とりわけ党的な旗印と力、組織的戦列として鍛え上げ、高地を、前線の堡壘を確保し抜き、将来の世界的攻勢への戦略的準備結合と、戦線の一段根深い、頑強な組織化をおし進める試練であった。六〇年代後半の世界的な戦闘的昂揚と前進―将来の世界的攻勢からみれば、尙前哨的位置をもった、前進拠点を闘い

々の進路を確立せねばならない。だからこそ我々は、この銃撃戦を無批判的に讚美し、讚美することによつて、自己の立場と任務を確立し、新たな力を鍛えあげていく困難な格闘を回避する傾向には断固として反對する。問われているのは、自力で自らの道を切り開き、その道に沿つてたわみなく前進していくことである。そしてまさしくそのためにこそ、その第一歩として以上の総括はあつたのだ。

取るものであり、一つのけいこでさえあつたが、それだけに多分に未熟さと自然発生性に彩られた―を、真に確固たる指導的思想に導かれた、戦闘的な、組織的力として鍛え上げ抜く闘いは、何よりもそれを代表した諸党派の共產主義運動としての（或いは共產主義運動への）飛躍と、独自性を鍛え上げる闘いであった。そのようなものとして諸傾向をふるいにかけ、多様な諸傾向の錯綜の中から、真実の共產主義的潮流を鍛え上げていく過程であった。この過程で、長年にわたる革命闘争の鉄火によって教育され、世界階級闘争の最前線を堅持し、國際的な党派闘争を原則的に貫き、共產主義運動を前進させてきた、中国―ベトナム―朝鮮の革命闘争、それを代表する諸党が、帝國主義と社会帝國主義に對する戦闘的高地を闘い取り、國際共產主義運動のための背骨となり、その國際主義的立場と、周倒な準備と、堅忍不拔の果敢な戦闘と、況ゆ

る情勢の変化に適應し敵の弱点・内部矛盾をも利用する柔軟な戦術と、全人民を組織し、動員し、統率する深さにおいて、この過程の領導者となった。(尚、我々はこの過程で生じた林彪問題についても次の様に考へている。基本的には九大会を踏まえて党をどのように改造し鍛え上げ、党を核心とする階級と人民の戦列をどのように組織し、教育、訓練し抜き、戦略的目標と共産主義の勝利に向けて、それを実現する力、自己の國際的独自性をどのように頑強に、たゆみなく組織し抜いていくのかについて、確固たる原則的立場を堅持しえず、急進主義的、力学的、戦術「左翼主義」的に、そして政治的にプラグマチズム、冒險的にしかこたえることのできなかつた、林彪の破綻、脱落であること。だが未だ若く、生まれて間もない革命運動、米、日、ヨーロッパ、更にラテンアメリカやパレスチナ・アラブでは、より厳しく、より混沌たる試練と状態を経験した。ブラックパンサー党の分派闘争、ウェザーマンの転換、ヨーロッパにおける諸分派の分立、パレスチナ解放運動におけるPFLP、DIP、Fatah黒い九

月の統一戦線と分派闘争、ゲバラ以降のラテンアメリカ革命闘争の諸経験と諸勢力の再編等、各々の諸条件、闘争の直接的目標と性格、歴史的成長過程、直面する情況の相違と特殊性にもかかわらず、自己の思想の明確化、國際主義の立場、プロレタリア的な階級性、党としての政治的指導力、統率力をめぐって、試練とふるいにかけられてきた。たとえばPFLPが、ファタ派のアラブ小ブルジョア政權への依存性、そこからくる妥協性、又その思想的政治的曖昧さ、組織的ルーズさを克服し、同時に黒い九月の民族急進主義、階級的立場の曖昧さとテロリズムへの傾斜を克服し、マルクスレーニン主義を打ち固め、國際主義の立場に立って自力更生を貫き、戦闘における原則性と毅然さを保持し抜き、頑強に大衆工作を實行し、自己の組織的厳格さ、独自性を鍛えつゝ、統一戦線を執拗に、柔軟に保持し抜いてきた態度を高く評価し、学び取らねばならない。我々は又、アメリカ革命運動に生じた混乱と再編におけるヤングローズ党の立場と進路に深い共感を感じる。総じて問題は、六十年代後半の一時期に急速に成長

した急進主義運動が、その限界をふみこえる苦闘において、改良主義、日和見主義——それは或る場合には小ブルジョア民族主義と、他の場合には社会排外主義への屈服||帝國主義的經濟主義と一体になった——に転落するのか、又は急進主義の徹底化——或る場合には民族急進主義と、他の場合には急進的コスモポリタニズムと一体になった——から思想的政治的厳格さと階級的大衆の基礎をもたない戦闘団化していくのか、それとも急進主義運動を、確固たる共産主義思想に基礎づけられ、國際主義の独自性を明確にした、真に階級的な革命運動、堅固な組織性に貫かれた運動へと克服し抜いていくのが問いただされてきたのである。まさにその意味で我々の敗北・破綻は、國際共産主義運動の飛躍と前進を聞いて取る格闘と再編において生じた、一つの傾向の最も凝縮され、徹底化された敗北・破綻であったのだ。(勿論國際共産主義運動の世界的規模と歴史からすれば、一つのエピソードにすぎないであろうが。)そしてそこに、今日のマルクスレーニン主義と多様な無政府主義的傾向をはらんだ反

スタマルクス主義との、國際主義と小ブルジョア民族主義やコスモポリタニズムとの分岐点が、そして今日の世界的規模におけるプロレタリアートと小ブルジョアジーとの相互関係が印されたのであった。我々はこの敗北・破綻の徹底的な克服を、思想的、実践的に貫いていくことによって、自から労働者階級の世界軍の一部隊へと鍛え上げていかねばならない。最後に、現在の我々の立場と進路について簡潔に要約しておこう。

①我々は「共産党宣言」——「資本論」——「ボルシェヴィキ綱領」の見地をしっかりと堅持し、資本主義に對する階級的批判を基礎にして、労働者階級の階級闘争とその到達目標、そして革命的实践の核心をなすプロレタリアート独裁の立場をわがものとしていく。勿論これは言葉の上でどんなに確認しても何の意味もない。それはたえず実践的に獲得され、貫かれ、点検され、鍛え上げられねばならない。それは日々、資本の蓄積と共に深まる貧困、隷属、抑圧、精神的肉体的磨滅、搾

取

取の増大を強制され、苦惱と呻吟をしいられ、しかし又不可避的に闘いを増大させ、その解放の力を培って行く——まさにこれらの過程の中に旧社会の変革的契機と新社会の形成的要素が明らかになるのだ——労働者階級の現実の運動に献身的に参加すること。そして彼らの苦惱、呻吟、確放の力に真に立脚し、その一つ一つの階級的ヒラメキを組織し、鍛え、苦惱の真の内容と根拠を、**搾取者との階級的利害の非和解的対立**を、解放の目標とその諸条件を、彼らの歴史的役割と任務を常に示しつゝ、実際に共に苦闘し、日々諸衝突の最前線に立って支え抜き、それを指導的思想をもつた組織的闘いへ発展させ、改良主義と闘い、彼らの階級的自覚と政治的発達と組織化に助力すること。又それを堅忍不拔に実行し抜き、強じんな思想性・組織性・党派性をもった、真の組織者、かつ戦闘の砦をもった、真の組織性、かつ戦闘の砦たる革命的組織を、プロレタリア階級の深部に建設し、鍛え上げること。これらのことをたえず基礎として打ち鍛え、又そのことによって我々のプロレタリア的党風を培わね

によって抑圧されている民族の解放闘争を實際に支持・支援し、これを同時に民族排外主義・社会排外主義との闘争として組織し、更に帝国主義の侵略反革命（戦争）の徹底的革命的破綻のための闘争と結合すること、③搾取者の武装解除とプロレタリアート、被搾取者の武装を徹底的に擁護し、小市民的平和主義の立場と闘うこと。④自力更生の観点に立って、日本におけるプロレタリアート独裁の樹立をめざす革命闘争の実践をおし進めること、として明確にする。そしてこれと一体になって⑤金融寡頭制の重圧—貧困・隷属・磨滅・零落の強化・反動と暴力への熱望・民族差別と部落差別を中軸とする差別分断支配の構造—官僚的警察の独裁とそれに屈服する経済主義に反対し、社会帝国主義の二大潮流から解放されたプロレタリアートの革命的団結と、それに統率された被搾取労働大衆の同盟を組織し、⑥議会主義と小ブル政權構想に反対し、又それに対する急進主義的反対派とは明確に政治的独自性をもって、革命的蜂起、革命戦争を闘い取る隊列を組織し抜くこと。⑦これらの核心に、プロレタリアート

ばならぬ。

第二は、第一の見地の実践的核心である、国際主義とプロレタリアート独裁の立場を堅持し、労働者階級の階級闘争の一切の現われをこの核心へ統率し抜き、この核心を軸に鍛え上げ、真の意味での階級闘争—政治闘争—高め上げていくべく活動することである。そのために我々は、プロレタリアートの社会革命の前夜、戦争と革命の時代、腐朽化と寄生性の體物—社会排外主義との闘争の時代としての帝国主義を明確にし、帝国主義と社会主義との分裂を組織する立場と任務を明確にすること。更にプロレタリア共産主義革命の今日の到達点において、帝国主義と社会帝国主義に反対する国際主義の立場を、①中国共産党・ベトナム労働党・朝鮮労働党をはじめとするアジアの共産主義の潮流との結束を、世界プロレタリア共産主義革命の勝利に向けて、現代修正主義と仮借なく闘いながら、闘い取っていくこと、②世界階級闘争の最前線をなしている民族解放闘争を實際に支持・支援し、献身的に援助し抜くこと、そしてこのことをとくに「自由の」帝国主義

の不拔の戦闘の砦—革命的前衛党を、全人民の闘争の最前線に建設し抜き鍛え上げる闘いを確固として遂行すること。

このような立場と内容を、ありと汎ゆる民主主義闘争、経済闘争の中にもち込み、結合させ、統率し、それがより多くの領域と分野・形態をわがものとしていくべく頑強い闘い、鍛え上げ、党—階級、党—統一戦線の組織的隊列として物質化していくこと。そして我々は革命党を中核とする労働者階級と、それに統率された労働大衆の同盟の力でもって、蜂起、革命戦争を闘い取り、強大な暴力手段と官僚制度をもつてする独占ブルジョアジーの権力を粉砕し、米帝—在日米軍を叩き出し、ブルジョア常備軍と警察と特権的官僚・議会制度を廃止して被搾取者の革命軍、武装した労働者、労働大衆の大衆組織に直接に立脚する権力を樹立し、銀行とトラストを収奪し、生産と分配の人民統制を實施し、プロレタリア諸国・民族解放闘争—諸国のプロレタリアートとの新たな革命的結合をつくり出していくであろう。

以上の観点と任務に於いて、我々は当面次のような活動を我々の任務としなければならない。第一は人民大衆の闘争の前線、とりわけ本来のプロレタリア的下層の中から波状的に高まりつつある闘争の前線に出陣し、この闘いを広め、深め、高め、支え、発展させると共に、将来の突撃、総攻撃を準備し、革命的政の下に統率し抜いていく、労働者階級の不拔の戦闘の啓、革命的潮流を、労働者階級の深部に建設することである。これは堅忍不拔の頑強な粘り強い活動とならねばならず、強靱な思想性・党派性に支えられねばならない。我々はそのためこそ、年有余の総括を行なってきたが、それは今、実践的に試され、点検され、鍛えられている。(我々はこの間、このような試練に汎ゆる場で直面してきた。我々はその中で一步一步成長を聞き取ってきたのであるが、まさにこれからこそ本場の試練に直面するであろう。)我々はとくに今、革命的思想の堡壘、革命的宣伝煽動活動の拠点・組織工作の中核・戦闘の砦としての、地区組織—細胞の建設に主要な力を注がねばならない。第二に、我々はそれを共

際活動を組織しなければならない。とくにこゝでは世界階級闘争の最前線たる民族解放闘争を実際に支持し、支援し抜く活動である。第五は我々の革命活動を政治警察の攻撃から防衛し、我々の組織の非法的基礎を築き、将来の革命的強襲に備え、準備するための、又日々の戦闘を強化するための、秘密活動の諸業務・特別の技術的諸活動・秘密活動の機構を組織せねばならない。とくにこの活動は細心の注意と、細々とした無味乾燥な活動に耐える献身性を要求するものであり、最大の厳格な思想的条件を付与して遂行しなければならぬ。第六に獄中同志との政治的交通を確保し、かつ権力の種々の攻撃から防衛し、奪還していくための活動。第七に、以上の活動についての指導と情報を集中し、その全ての糸を一身に集中化し、系統だてていく、確固たる中央組織の建設。このような固く結束した、継承性をもった、修練と訓練を積んだ中央組織を建設し抜いていくことなしに、どんな革命運動も、真の成算を約束されることはない。

最後に我々は、全ての誠実な共産主義的グループと

同の活動として実行し抜いていくために、我々が直面する様々の課題と領域についての我々の立場・態度・政策を明確にし、全ての経験と教訓を集中し、検討を加え、普遍化し、党内情報と討論を組織し、情勢についての共通の認識と、共通の一つの全体的進路に沿って進みうるように、機関紙・通信活動を組織せねばならない。第三に我々は綱領論争を持統的に、頑強に組織しなければならぬ。この眼目は次の三点にある。

一つは共産主義運動の原則的立場・思想的基礎を徹底的に純化し、鍛え上げ、汎ゆる実践活動を真に支え抜き、導きの糸となるようにしていくことである。二つは今日における国際主義的立場・我々の党建設の立場を鮮明にし、とりわけ国際活動に確固たる背骨を与えるものとしていくことである。三つはとりわけ日本革命の戦略問題を明らかにし、我々の日本革命の実践に、首尾一貫した系統性と指針をつくり出していくためである。そしてこの分野こそ今や我々にとって焦眉の課題となつてゐる。第四に我々は自己の国際主義的立場に基いて、又それをより具体化し、鍛え上げつゝ、共同して、革命党の建設に進んでいくであろう。それは決して、急進的気分をもったインテリゲンチヤの小群を統合することではなく、日本の住民大衆を新しい生活と闘いへ呼びさましたる、大衆的労働者運動の先進的代表者・革命的分子を、厳格に原則的に統合することである。革命党建設への要求が増々広汎に提出され、高まり、増々真剣なものとなりつゝある現在、我々はその一中核的隊列を、誠実に、真剣に、頑強に担っていかねばならない。

連合赤軍事件に関する特別報告

はじめに

革命運動上における正しい路線と組織は、幾多の実践上の誤まりとその教訓の積み重ねによってはじめてその基礎がえられるものである。そうして、それを基礎として誤まった方針と誤まった組織指導に対する断固とした斗争によってようやく確固とした正しい路線と組織が獲得されるものである。

今回の全国臨時総会において、わが共産主義者同盟赤軍派としての結成以来の歩み——とくに連合赤軍の歩み——を総括すること、これはここ一年間の再建活動を通しての重要な党建設上の課題であった。この課題は今、ようやくして解決の途についた。これは、主として総括についての報告にのべられている。

だが、全同志諸君に特別に報告して充分に検討していただきたいことがある。それは連合赤軍の同志殺害

に関する問題である。この同志殺害という行為は、明らかなに誤まったものである。すなわち、疑いもなくこの行為は革命戦士を殺害し、労働者人民に共産主義運動に対するきわめて多大な不信・失望を与えたものであり、更にこの行為によって、ブルジョアジーの反共宣伝、及び労働者人民への政治的抑圧の強化を許すこととなった。

もちろん、同志殺害という行為は、当時の政治思想上、路線上の問題ときってもきりはなせない。軍事第一主義・観念的共産主義・大衆からの召喚主義等々の誤まった政治・思想上、路線上の問題にその起因があることはいうまでもない。こうした誤まった政治・思想上、路線上の問題は、組織全体が責任をもって解決しなくてはならない。同志殺害に関しても、わが同盟をあげて人民大衆の前に自己批判しなくてはならない。

以上をふまえた上で、同志殺害の行為の責任を問うことと、亡き12名の同志（日共革命左派神奈川県常任委員会系の同志たちも含めて）の名誉回復を確認することは、この臨時総会において明確にさせなければならない。

① 連合赤軍同志殺害の事実経過とその分析

現在手に入る資料その他を検討した結果、我々は事実関係とその背景を次のように総括する。

連合赤軍のゲリラ戦は、大衆斗争の武装斗争への転化をある程度促進した。だが、総括についての報告で明らかにしているように、武装斗争を闘う同盟の思想的立脚基盤が根本的に誤っていったため、同盟はますます人民に対する党的統率力を失い、その指導性を軍事のエスカレートに求め、その活動は軍事活動に一面化していった。戦術的には大衆運動から召喚し、人民から孤立し、山岳アジトへの撤退を余儀なくされていた。軍事をプロレタリアの階級の団結を高める道具

として組織するためにも、我々は軍事第一主義的な連合赤軍戦争路線の根本的な路線転換が要求されていた。この要求に赤軍派・日共革命左派神奈川県常任委の指導部がこたえられなかったため、両組織は自らの内部矛盾を激化させていき、それは中央軍・人民革命軍連合赤軍に最も集中して現われた。

結論からいえば、我々は一連の同志殺害を同志殺害という形をとった連合赤軍指導部と「下部」兵士との党内斗争であり、又指導部による党内論争の暴力的圧殺であると分析する。

連合赤軍同志殺害は七一年夏、向山茂徳同志・早岐やす子同志に対して人民革命軍指導部によって行なわれた事に端を発している。この理由は、両同志の戦線離脱による権力への通報を恐れたものだった。これは七一年一月二十六日の以後の一連のいわゆる「総括」↓同志殺害の直接のきっかけをなすものであった。だが、この理由は一二名の同志殺害にとっては外因として作用していたにすぎない。真の内在的理由は別の処

にある。

し一年二月二〇日、共産同赤軍派の中央軍と日共革命左派神奈川県常任委の人民革命軍は組織合同を決定した。その政治的・軍事的基調は以下である。①合同軍事訓練を展開し、新党建設・銃によるせん滅戦をからとる。②かかる飛躍を短期間に果たすために敵しい自己批判——相互批判を通して兵士の小ブル性を払拭し、隊内共産主義をからとる。

革命左派の加藤能敬同志・尾崎充男同志がまずこの方針に反対した。加藤同志は爆弾斗争の多発化による大衆斗争の武装化と武装斗争派の統一を主張し、尾崎同志は反米愛国路線の堅持を主張した。連赤指導部は戦術的には爆弾斗争の重視を右翼日和見主義、思想的には反米愛国の堅持を毛沢東教条主義と批判し、軍——共産主義の母胎論の思想を対置した。だが、かれらは思想（綱領）・戦術・組織全般にわたる党内矛盾を解決するのではなく、反対派を暴力的に圧殺していく、銃をもてる軍隊への飛躍、兵士の小ブル性の払拭という隊内共産主義論はすでに赤軍派にあっては七〇年秋

第二次綱領論争において路線化されているが（新聞

「赤軍七号」）

実践的にはこれは自分の反対派を暴力的に圧殺していく口実以外の何物でもなかった。すなわち、思想的には資本主義批判に基礎をおく階級対立の非和解性と共産主義社会の唯一の担い手としての労働者階級の歴史的位階を科学的に把握し、種々の小ブルイデオロギーと徹底してたたかいプロレタリアートの思想を獲得し、実践的には労働者階級の闘いをプロレタリア独裁の陣型（権力問題）へと高めあげつつ、同時に自己の思想をプロレタリアートの闘いのなかで不断に検証していく。このようにして小ブル性の克服を行うのではなく、何か個人の禁欲主義的修業によって小ブル性が克服され、しかも暴力的に行なえばより徹底して行えると考えるのである。この「共産主義論」はマルクス主義とは縁もゆかりもない。連赤指導部はあるべき共産主義的人格を我流に規定し、それに適応しない点を恣意的に並べたて、あるべき人格と違うからといって暴力をふるい、次々と同志を殺害していくのである。森・永

田兩名は、この「共産主義化の闘い」の中で全く自己の小ブル性は問わないのである。ということは、彼らは資本主義社会が必然的に刻印するブルジョアイデオロギー、習慣等から完全に超越している「共産主義的」人格である、ということになる。森は、この点を上申書で自己批判し、自己批判——相互批判の作風がなかった、病を治して人を救うという観点がなかったからだと述べているが、何故そのような大原則をふみにじったのか？それは、相互批判をすれば永遠の相互告発運動になり、その過程で路線をめぐる意見の対立が拡大していく以外にないからだ。したがって、一方的な糾弾になっていくのである。このとき、党内論争を圧殺するためにそのような誤まった共産主義観をおしつけたのか、それとも逆なのかというのはさして問題ではない。誤まった共産主義観と党内斗争の圧殺は密度に結びついていることを確認しておけばよい。

加藤同志に対しては、バクられたとき権力と雑談した。尾崎同志には「総括」されているが、加藤同志をなくったとき口走った言葉が問題だ。小島和子同志に

対しては加藤同志に接吻されたことを報告するときうれしそうなおそぶりをした。等々の理由で、まず自己の小ブル性の総括を要求し、次に全員でなく、ロープでしばり死亡させていくのである。

かくして、連赤指導部は、銃によるせん滅戦という極左的戦術に対する批判とまともに論争せず、マルクス主義と全く無縁な隊内共産主義論という小ブル的修業思想を対置し、指導部の指導放棄からくる連合赤軍の行きつまりの責任を被指導部兵士の人格的欠陥にすりつけ転嫁していくのである。

以下、同志殺害を通して連赤の内部矛盾がどのように拡大し、内部崩壊していくかをあとづけてみよう。

◎進藤同志に対して。彼が横浜寿町で活動していたことをとりあげルンブロの個人主義的であると批判し、暴行を加える過程で死亡。（赤軍派最初の処罰）

◎遠山同志に対して。彼女は女性であることに甘えていて兵士の自覚が足りないと批判され、暴力を加えられ、七二年一月七日死亡。

◎行方同志に対して。①いつも第二線にゐる、②女

性関係がルーズ等の理由で七二年一月三日から九日にかけて暴力的に批判され死亡。

(この三人の同志は森らの「共産主義論」にだまされ、その要求に必死になって応えようとしながらその過程で殺害された。だが、内部矛盾は更に拡大している。)

◎寺岡恒一同志に対して。彼は野心家であり、女性を蔑視している。という理由で中央委員でありながらそのような小ブル性の責任は大きいとして、一月七日森によって死刑宣告され、殺害される。

◎山崎順河同志に対して。優等生的である。女性関係がルーズであると総括を要求。(1/18)(十九日某同志が戦線離脱「いわゆる「脱走」」その時、彼が「六名を殺した。自分も殺される。といった事把え、総括―共産主義化の意義が他の殺害された同志に比べて全然分かっていない。だから脱走して敵権力に通報する可能性がある。とし、彼も死刑宣告され殺害。」この二同志の場合、進藤、遠山、行方同志の場合と比べて内部矛盾に質的違いがある。この過程で①某同志

の戦線離脱があり、②二同志とも死刑という事で意識的に殺害されている。これは指導部は人民的内部の矛盾を「通報する恐れ有り。」の理由で意識的に敵対矛盾にまで転化した事。

被指導部の方からは、一つは戦線離脱という形で、もう一つは「殺される」とはっきり言った事で「総括」が「共産主義化」でも何でもなく同志殺しの口実にすぎない事を意識し始めたという事、を意味している。加藤同志の戦線問題を巡る指導部批判は今や、無意識的ではあれ思想的批判にまで深刻化したのである。党内斗争・内部矛盾は客観的には、指導部の共産主義に対する思想的立脚基盤を巡る対立に発展していった。

◎金子みちよ同志に対して。妊娠中であるにもか、わらず兵士として山岳ベースに結集した彼女に対して「妊娠をたてに甘えている」と総括を要求し、その過程で暴力を加えられ死亡寸前になっている彼女の胎内から子供を取り出す事まで検討するが二月四日死亡。

◎大槻節子同志に対して①戦術上は右翼日和見主義②服装等趣味がブルジョア的として総括を迫るが、

終止反抗の中で死亡。一月三十日(指導部に対する思想的批判を正しく党内論争として解決できず、又、する気もない連赤指導部は、矛盾が拡大すれば益々その解決方法は醜悪なものになり、且つ、殺害される方はそれに対する批判的姿勢を強めていく。)

◎山本順一同志に対して…彼は始めて総括―同志殺しが誤まりである事を政治主張として述べる(1/22(26)指導部は、事、ここに至っても自己の誤りを認めず、逆エビにばかり総括を要求。一月三十日死亡。

◎山田孝同志に対して…一月三十一日に実践能力がない。理想主義的、官僚主義的として総括を要求。↓2/2中央委員辞任。2/12死亡。(山本同志の真正面からの批判にも答え様としなかった指導部は益々思想的墮落を深め、同志殺しは寺岡同志に続き、中央委員の側まで波及し始めた。連赤は今や内部崩壊を起し始めたのだ。)

(2) 亡き二二名の同志たちの名誉回復について

以上の同志殺害の事実経過をもとに、以下の二二名の同志たちの名誉回復を提案し、決議するよう要請する。

殺害された同志たちの名誉回復については次の通りである。

(1) 進藤隆三郎同志について 進藤同志は革命的兵士であって、いわゆる「総括」の「革命兵士の資質」に関する「個人主義的」とか「ルンプロ的」とかの恣意的な口実は全くあてはまらない。進藤同志は革命兵士として闘い、連合赤軍指導部の誤まった指導のため二十二年の若き生涯を終えた。

(2) 遠山美枝子同志について 遠山同志は赤軍派結成当初からのきわめて献身的で革命的な同志であった。遠山同志の「総括」理由にのべられた「服装や化粧や態度」に「女性としてのブルジョア性」がみられることとか、「戦士としての独立性、行動力に欠けている」等の恣意的な口実はすべてあてはまらない。遠山同志は、革命兵士としてたまたかい、連赤指導部の誤まった

指導のために二十五才の若き生涯を終えた。

(六)行方正時同志について 行方同志は、革命的な兵士であって、連赤指導部が下した「革命兵士の資質」に欠ける云々の理由は全く恣意的であり、全くあてはまらない。行方同志は、革命兵士として闘い、連赤指導部の誤まった指導のために二十才の若き生涯を終えた。

(七)山崎順同志について 山崎同志は、革命的な兵士であって、同志殺害に関して批判的な観点にたとうとしていた。山崎同志の「革命兵士の資質」に欠ける云々の連赤指導部の恣意的判断は全くあてはまらない。山崎同志は革命兵士として闘い、連赤指導部の誤まった指導部のために二十才の若き生涯を終えた。

(八)山田孝同志について 山田同志は連合赤軍指導部の一員として同志殺害に關する責任はまぬがれないが、山田同志自身、後に連赤指導部の誤まった指導のために二十才の若き生涯を終えた。山田同志にさされた「革命兵士の資質」に欠ける云々や、「官僚主義」云々の恣意的な判断・口実は全くあてはまらない。山

田同志は、一九六七年以降一貫して共産同の献身的な一員であり分裂前は中央委員・京都府委員会委員長であった。又、赤軍派結成以降の革命家・革命兵士であった。

(九)日共革命左派神奈川県常任委員会・人民革命軍の七名の同志たち(加藤能敬同志・尾崎充男同志・寺岡恒一同志・金子みちよ同志・大槻節子同志・山本順一同志)について。

七名の同志とも革命家・革命兵士としての道を歩んだ。連赤指導部の誤まった指導のために若き生涯をおえた。

(三)同志殺害を指導した部分と、同志殺害に加担した部分に対する組織処分について

同志殺害の事実経過をもとにして、以下のことを提案し、決議するよう要請する。

(一)青砥幹夫は、連合赤軍の一員として同志殺害に加担した。かつ、彼は警察に逮捕后、思想的に屈服し、極めて多くの自供により、諸同志を國家権力に売りわたした。こうした行為を断固として厳しく弾劾し、彼を共産同赤軍派より除名する。

(二)板東国男、植垣康博両名は、現在拘留所にあり、日々ブルジョア政府の仮借ない攻撃の下におかれている。また彼らは、獄中闘争・公判闘争における同志殺害の自己批判を通じ、革命的観点にたつべく努力している。同盟赤軍派は、彼らのこのような努力、闘争を支持し、支援する立場に立ってきたが、以後もこの立場を貫くものである。

(三)青砥幹夫は、現在拘留所にあり、日々、ブルジョア政府の仮借ない攻撃の下におかれている。同盟は、この攻撃から彼を防御し、彼が國家権力に屈服している状態から脱却するよう援助する。

(以上)

(四)板東国男は連合赤軍の中央委員会の一員として同志殺害を指導し参加した。この行為を厳しく弾劾し、彼を共産同赤軍派より除名する。

(五)植垣康博は、連合赤軍の一員として同志殺害に加担した。この行為を厳しく弾劾し、彼を共産同赤軍派より除名する。

〔附記〕

右の特別報告は、一九七三年×月×日共産同赤軍派臨時総会において採択され、決議された。

なお、この決議と同時に、共産同赤軍派結成時の中央委員（臨時総会現在、獄外で再建活動に組織的に従事している中央委員）の、自らの政治的責任を明らかにした辞任も採択され、決議された。

共産主義者同盟赤軍派

中央委員会



~~¥300.~~ —

¥400.